

松原市文化財報告 第20冊

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第340集

松原市

三宅西遺跡 2

松原市三宅西土地区画整理事業地内物流倉庫建設計画に伴う
三宅西遺跡（D2-1-4）発掘調査報告書

2025年5月

松原市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター

松原市文化財報告 第20冊

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第340集

松原市

三宅西遺跡 2

松原市三宅西土地区画整理事業地内物流倉庫建設計画に伴う
三宅西遺跡（D2-1-4）発掘調査報告書

松原市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター



A区 弥生時代中期前葉の遺構（北東から）

例 言

1. 本書は、大阪府松原市三宅西7丁目地内に所在する三宅西遺跡（調査番号：D2-1-4）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、松原市教育委員会と合同で行なった。整理作業及び本書の編集は公益財団法人大阪府文化財センターが行ない、令和7年5月30日の本書刊行、及び松原市への資料の移管をもって一連の事業を完了した。
調査番号・契約名称・契約期間・現地調査期間などについては以下のとおりである。
【調査番号】 三宅西遺跡D2-1-4
【委託事業名称】 松原市三宅西土地区画整理事業地内物流倉庫建設計画に伴う（現地調査） 三宅西遺跡発掘調査
【委託契約期間】 令和5年11月1日～令和7年5月30日
【現地調査期間】 令和5年11月1日～令和6年6月30日
【遺物整理期間】 令和6年7月1日～令和7年2月28日
【印刷製本期間】 令和7年3月1日～令和7年5月30日
3. 現地調査及び整理作業は以下の体制で実施した。
【松原市教育委員会】
〔令和5・6年度〕教育総務部次長 兼 文化財課長 小玉哲章、同 課長補佐 兼 係長 大矢祐司、
同 係員 樫木剛秀、芝田和也
【公益財団法人大阪府文化財センター】
〔令和5年度〕事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂、同 主査 永野 仁
調査課長 佐伯博光、同 課長補佐 後藤信義、同 主査 伊藤 武、
同 副主査 若林幸子（令和5年12月）、同 副主査 信田真美世（令和6年1月～）
〔令和6年度〕事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂（～令和6年6月）・永野 仁（令和6年7月～）、同 主査 永野 仁（～令和6年6月）、同 課長補佐 新田康博（令和6年7月～）、調査課長 佐伯博光、同 課長補佐 後藤信義、同 主査 伊藤 武、
同 副主査 信田真美世（～令和6年6月）
4. 現地での調査に際し、清水建設株式会社（松原市三宅西土地区画整理組合 業務代行者）にご協力いただいた。
5. 遺構出土の流木・木葉・炭について、株式会社古環境研究所、及び株式会社パレオ・ラボに委託し、放射性炭素年代測定、及び前者2種については樹種同定（大型植物遺体同定）を合わせて実施した。
6. 本書の執筆・編集は伊藤が行なった。なお、第6章の自然科学分析の成果については、納められた報告書を、伊藤が本書用に編集し直したものである。
7. 遺構の写真撮影は、各調査区の担当者が、遺物の写真撮影は、公益財団法人大阪府文化財センター写真室が行なった。
8. 本調査に関わる出土遺物及び写真・図面などの記録類は、松原市教育委員会において保管している。
9. 本書に掲載した実測図や写真などにかかわる著作権については、報告書刊行後に公益財団法人大阪府文化財センターが松原市教育委員会に譲渡しており、図1～4の背景に使用した国土地理院発行の地図、及び写真1に使用した航空写真を除き、松原市教育委員会に帰属する。また、これらを除き「クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)」に基づき、出典の表示を条件として自由な二次利用を許諾する。

凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（TP）を基準にしている。単位はすべてメートルである。
2. 発掘調査での使用測地系は、世界測地系（測地成果 2000）である。遺構図に記載した座標値の単位はすべてメートルである。
3. 本書で用いた北は、いずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。
4. 現地調査及び整理作業は、公益財団法人大阪府文財センターの『遺跡調査基本マニュアル』、及び松原市教育委員会作成の「松原市発掘調査現場作業記録取扱い基準」に準拠して進めた。
5. 断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
なおその記載順は、記号・土色・土質とした。例：10YR5/6 黄褐 シルト
6. 遺構番号は、遺構であることを示す大文字のアルファベット「S」に続いて、遺構の種類に関係なく4桁の通し番号を振った。例：「S0015」・「S2024」
ただし、どの調査区の遺構であるのか混乱しないよう、全調査区通しでの番号は振らず、以下のとおり事前に調査区ごとに番号を割り振った。
A区：S0001 ～ B a区：S1001 ～ B b区：S2001 ～ B c区：S3001 ～
また、壁溝と柱穴・炉などの遺構で構成される「竪穴建物」のような集合体の場合には、上記の遺構番号とは別に集合体独自の番号を付した。この場合、遺構名称の後に番号を付けた。
例：「竪穴建物1」
7. 遺構図における断面位置は、平面図中に「└┐」形によってその位置を示したが、ビットのような小規模な遺構については、煩雑となるため明示していない。代わりに断面図中に断面を観察した方向がわかるように方位を示した。縮尺は各図のスケールバーを参照されたい。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器・木製品については4分の1、石鏃など小型のものは2分の1を基本とした。各々の縮尺については、スケールバーに明示しているのでそちらを参照されたい。なお、サヌカイト製の石器については、石鏃や石錐などの製品はこれまでどおり実測図を掲載したが、剥片は、本書では実測図に代えて写真のみ掲載することとした。その縮尺はすべて2分の1である。
9. 遺物実測図の断面については、縄文土器・弥生土器・土師器・埴輪は白抜き、須恵器は黒塗り、石製品はグレーとした。木製品の断面は、木取り位置がわかるように模式的な年輪を表現しており、実際の年輪とは異なる。また弥生土器についてのみ、胎土から生駒山西麓産と判断できるものは、遺物番号にアンダーバーを付けた。
10. 写真図版中の遺物番号は挿図の遺物番号と対応する。また遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ない縮尺率が判明しているものについては、写真の隅に縮尺率を記したが、カメラ（レンズ）の特性上正確な縮尺にはなっていない。本文中に掲載したサヌカイトの剥片についても同様である。
11. 遺構埋土については、本文中では何層もあるものを簡潔にまとめて説明しているため、挿図記載の土色とは表現が微妙に異なっている。詳細については挿図を参照されたい。なお、土色の表現方法は調査担当者によって異なる。本書ではある程度の統一をはかったが、内容までは変更していない。

目 次

巻頭原色図版

例言・凡例・目次

第1章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	既往の調査	2
第2章	位置と環境	5
第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	6
第3章	調査の方法	10
第1節	現地調査	10
第2節	整理作業	12
第4章	基本層序	14
第1節	層名と遺構面の呼称	14
第2節	A区の層序と遺物	15
第3節	B a区の層序と遺物	16
第4節	B b区の層序と遺物	18
第5節	B c区の層序と遺物	21
第5章	各調査区の成果	25
第1節	A区の遺構と遺物	25
第2節	B a区の遺構と遺物	43
第3節	B b区の遺構と遺物	56
第4節	B c区の遺構と遺物	67
第6章	自然科学分析	81
第1節	分析の目的	81
第2節	放射性炭素年代測定	82
第3節	年代測定試料の樹種同定と大型植物遺体同定	86
第7章	総 括	91

写真図版

報告書抄録

巻頭原色図版目次

A区 弥生時代中期前葉の遺構（北東から）

挿入写真目次

写真1	昭和23年の調査地周辺の状況……………4	写真5	A区S1020断面……………56
写真2	河内台地上の現状……………6	写真6	Bc区北東隅から北方のA区を望む…80
写真3	A区・Ba区基本層序……………22	写真7	試料の断面切片顕微鏡写真……………89
写真4	Bb区・Bc区基本層序……………23	写真8	大型植物遺体……………90

挿表目次

表1	年代測定する遺構と その試料サンプリング位置……………82	表3	放射性炭素年代測定及び 暦年較正結果（試料4）……………84
表2	放射性炭素年代測定及び 暦年較正結果（試料1～3）……………83	表4	樹種同定結果……………86
		表5	大型植物遺体同定結果……………87

挿図目次

図1	調査地位置……………1	図17	A区第7c面検出遺構断面……………26
図2	今回の調査区と既往の調査区……………3	図18	A区第8面検出遺構全体平面……………27
図3	遺跡周辺の地形……………5	図19	A区第8面検出遺構平面・断面……………28
図4	調査地周辺の遺跡分布……………7	図20	A区第8面検出遺構出土遺物……………29
図5	地区割方法……………11	図21	A区第9面検出遺構全体平面……………30
図6	調査区割りと地区割り……………12	図22	A区第9面検出遺構平面・断面1……………31
図7	A区基本層序断面……………15	図23	A区第9面検出遺構出土遺物1……………32
図8	A区7cii層～8層出土遺物……………16	図24	A区第9面検出遺構出土遺物2……………33
図9	Ba区基本層序断面……………17	図25	A区第9面検出遺構出土石器1……………34
図10	Ba区7a層出土遺物……………17	図26	A区第9面検出遺構平面・断面2……………35
図11	Bb区6層出土遺物……………18	図27	S0036出土遺物……………36
図12	Bb区基本層序断面……………19	図28	S0036出土石器……………36
図13	Bc区基本層序断面……………20	図29	A区第9面検出遺構平面・断面3……………37
図14	Bc区7a直上層～7ei層 出土遺物……………21	図30	A区第9面検出遺構出土遺物3……………38
図15	基本層序と各調査区の 層序対応関係模式図……………24	図31	A区第9面検出遺構出土石器2……………38
図16	A区第7c面検出遺構全体平面……………25	図32	A区第9面検出竪穴建物1・2 平面・断面……………40
		図33	竪穴建物1周辺遺構出土石器……………41

図 34	竪穴建物 2 周辺遺構出土遺物	41	図 64	B c 区 S3025・S3026 断面	71
図 35	S0060 出土石器	42	図 65	B c 区 7 a 層下面検出遺構出土遺物	71
図 36	竪穴建物 2・掘立柱建物 1 周辺遺構出土石器	42	図 66	B c 区 7 a 層下面検出遺構 平面・断面 3	72
図 37	A 区掘立柱建物 1 平面・断面	43	図 67	B c 区東半 7 c 層下面検出遺構 全体平面	73
図 38	B a 区西半第 7 a 面検出遺構 全体平面	44	図 68	B c 区 7 c 層下面検出遺構 平面・断面	74
図 39	B a 区第 7 a 面検出遺構平面・断面	45	図 69	B c 区 7 d 層下面検出遺構全体平面	75
図 40	B a 区 S1103 断面	46	図 70	B c 区 S3054～S3057 断面	76
図 41	B a 区第 7 a 面検出遺構出土遺物	47	図 71	B c 区東端 7 e i 層下面検出遺構 平面	76
図 42	B a 区西半第 8 面検出遺構全体平面	48	図 72	B c 区 S3060～S3062 断面	77
図 43	B a 区第 8 面検出遺構平面・断面 1	50	図 73	B c 区 7 e iii 層下面検出遺構 全体平面	77
図 44	B a 区第 8 面検出遺構平面・断面 2	51	図 74	B c 区 S3059 断面 (東半)	78
図 45	B a 区第 8 面検出遺構土器出土状況	52	図 75	B c 区 7 e iii 層下面検出遺構断面	78
図 46	B a 区第 8 面検出遺構出土遺物	53	図 76	B c 区 S3059 断面 (西半)	79
図 47	B a 区東半第 8 面検出遺構全体平面	54	図 77	B c 区 S3054・S3059 出土遺物	79
図 48	B a 区 S1020 断面	55	図 78	B c 区 S3059 出土石器	80
図 49	B b 区東半第 6 面検出遺構全体平面	57	図 79	年代測定する遺構と 試料サンプリング位置	81
図 50	B b 区第 7 面検出遺構全体平面	58	図 80	暦年較正結果 (試料 1～3)	83
図 51	B b 区第 6・7 面検出遺構断面	60	図 81	暦年較正結果 (試料 4)	84
図 52	B b 区第 7 面検出遺構断面	61	図 82	B c 区南東側にみられる 弥生時代集落の広がり	91
図 53	B b 区第 7 面検出 S2022 平面	61	図 83	弥生時代集落の分布	92
図 54	B b 区 S2022・S2029 断面及び S2022 土器出土状況	62	図 84	B a 区周辺にみられる 古墳時代集落の広がり	93
図 55	B b 区遺構出土遺物	63	図 85	既往調査との遺構のつながり (上: S2022・下: S2023・S2038)	94
図 56	B b 区西半第 8 面検出遺構全体平面	64	図 86	B 区の景観変遷	95
図 57	B b 区東半第 8 面検出遺構全体平面	64			
図 58	B b 区 S2023 断面	65			
図 59	B b 区第 9 面検出遺構平面	66			
図 60	B b 区第 9 面検出遺構断面	66			
図 61	B c 区 7 a 層下面検出遺構全体平面	68			
図 62	B c 区 7 a 層下面検出遺構 平面・断面 1	69			
図 63	B c 区 7 a 層下面検出遺構 平面・断面 2	70			

写真図版目次

扉：人力掘削風景（B b区 S2038）

写真図版1 A区遺構

1. 中央部第7c面検出遺構〔北から〕
2. S0001
3. S0002
4. S0004
5. S0005

写真図版2 A区遺構

1. S0014
2. S0015
3. S0020
4. S0021
5. 第8面検出遺構全景〔東から〕
(ドローンより撮影)

写真図版3 A区遺構

1. S0022〔北から〕
2. S0022断面と埴輪出土状況〔南から〕

写真図版4 A区遺構

1. S0022西肩部断面
2. S0022
3. S0022埴輪出土状況
4. S0023
5. S0016・S0017
6. S0016
7. S0019
8. 第8面土器出土状況

写真図版5 A区遺構

1. 第9面検出遺構全景〔東から〕
2. 第9面検出竪穴建物・掘立柱建物
〔北東から〕

写真図版6 A区遺構

1. 竪穴建物1〔南から〕
2. S0046
3. S0050
4. S0051
5. S0056（右はS0058）

写真図版7 A区遺構

1. 竪穴建物2〔東から〕
2. S0060
3. S0073
4. S0074
5. S0078

写真図版8 A区遺構

1. 掘立柱建物1〔南から〕
2. S0089
3. S0091
4. S0095
5. S0101

写真図版9 A区遺構

1. S0025（手前）・S0026（奥）
2. S0028
3. S0027
4. S0027土器出土状況
5. S0033（右）・S0034（左）
6. S0036
7. S0039
8. 下層確認トレンチ

写真図版 10 B a 区遺構

1. 西端部第7 a 面検出遺構〔東から〕
2. 東半部第7 a 面検出遺構全景
3. S1001
4. S1103
5. S1103 西肩部断面

写真図版 11 B a 区遺構

1. 第8面検出遺構全景〔北西から〕
2. 西半部第8面検出遺構全景〔北東から〕

写真図版 12 B a 区遺構

1. 東半部第8面検出遺構全景
(手前は7 a 面検出 S1103)〔東から〕
2. S1020 断面(東側)
3. S1020 断面(西側)

写真図版 13 B a 区遺構

1. S1015
2. S1025
3. S1031
4. S1084 土器出土状況
5. S1091
6. S1092
7. S1095
8. S1100

写真図版 14 B b 区遺構

1. 西端部第7面検出遺構〔南東から〕
2. 西半部第7面検出遺構全景〔東から〕

写真図版 15 B b 区遺構

1. S2003
2. S2004
3. S2005
4. S2006
5. S2010
6. S2012
7. S2013
8. S2014・S2015

写真図版 16 B b 区遺構

1. 東端部第7面検出遺構〔南西から〕
2. S2017
3. S2020
4. S2018(南側)
5. S2018(北側)

写真図版 17 B b 区遺構

1. S2022 全景〔南西から〕
2. S2022 東肩部土器出土状況
3. S2022 西肩部断面
4. S2029 検出状況
5. S2029 完掘状況

写真図版 18 B b 区遺構

1. 第7～9面検出遺構全景
(中央部は S2023, 奥は S2022)〔東から〕
2. S2023 東肩部〔南から〕

写真図版 19 B b 区遺構

1. 東端部第9面検出遺構〔南東から〕
2. 西端部第8面検出遺構
3. S2023 東肩部下層断面
4. S2031
5. S2038

写真図版 20 B c 区遺構

1. 7 a 層下面検出遺構全景〔北西から〕
2. 東半部 7 a 層下面検出遺構全景〔北から〕

写真図版 21 B c 区遺構

1. S3002
2. S3003
3. S3004
4. S3005
5. S3009
6. S3012
7. S3023
8. S3040

写真図版 22 B c 区遺構

1. S3027
2. S3033 木材出土状況
3. S3038 ~ 3041
4. S3041
5. 7 c 層下面検出遺構全景〔北東から〕

写真図版 23 B c 区遺構

1. S3045
2. S3046
3. S3048
4. S3049
5. 7 d 層下面検出遺構全景〔北西から〕

写真図版 24 B c 区遺構

1. 東半部 7 d 層下面検出遺構 (S3059)
全景〔北から〕
2. S3055 (左)・S3056 (右)
3. S3058
4. S3059

写真図版 25 B c 区遺構

1. S3061・S3062
2. S3061
3. 東半部 7 e i 層下面検出遺構
4. S3064
5. 7 e iii 層下面検出遺構全景〔東から〕
6. S3068
7. S3077

写真図版 26 A 区出土遺物

1. 5, 6, 8, 9, 38, 41, 42, 43, 56, 57, 58, 61, 64

写真図版 27 A 区・B a 区出土遺物

- 2, 14, 15, 19, 20, 21, 60, 62, 65, 66, 67, 69, 105, 107, 108, 115, 148, 186, 190, 196, 198, 199, 209

写真図版 28 B a 区出土遺物

- 194, 200, 201, 203, 206, 211, 214, 216, 221, 222, 226

写真図版 29 B a 区・B b 区出土遺物

- 223, 224, 225, 230, 231, 232, 234, 236, 238, 244

写真図版 30 B b 区・B c 区出土遺物

- 24, 26, 27, 29, 30, 32, 33, 36, 240, 241, 242, 243, 245, 246, 248, 249, 250, 253, 254, 255, 256, 257, 259, 261, 264, 266, 267, 269, 270, 272, 277, 278

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、清水建設株式会社によって進められている、松原市三宅西土地区画整理事業地内の物流倉庫建設計画に伴うものである。

この土地区画整理事業が進められている三宅西地区は、松原市の北端に位置し、すぐ北側には大阪市が接している。ここはもともと大和川左岸に広がる水田地帯であったが、近年、都市計画道路堺松原線や大阪千早線（国道309号）、阪神高速道路14号松原線・6号大和川線などの交通網の整備が進み、非常に利便性の高い地域となった。このため、これらの「幹線道路を活かした物流施設や工場等の産業系土地利用を誘致することで、地域産業の活性化を図り、活力ある良好な市街地の形成を図ることを目標」とした都市計画が決定された。

平成29年（2017）12月23日には「三宅地区まちづくり協議会」が設置され、翌年9月には、三宅地区まちづくりの事業化に関する提案募集が行われた。同年12月9日の公開プレゼンテーション及び審査会において提案内容の審査が行なわれ、同年12月23日の上記協議会第3回総会にて、提案企業として清水建設株式会社関西支店・株式会社新都市二十一が承認された。その後、より本格的なまちづくりを進め

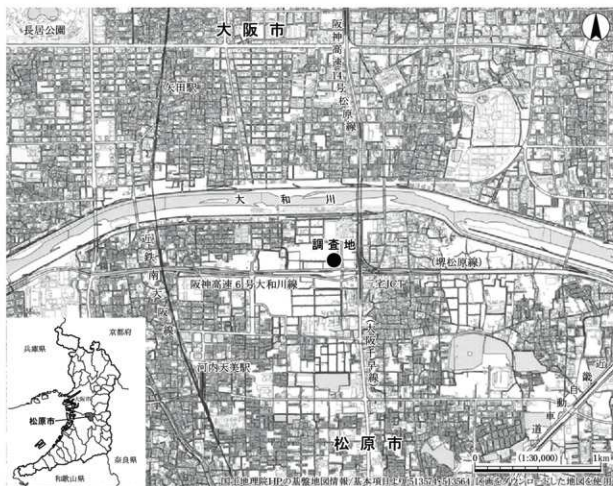


図1 調査地位置

るため、令和2年（2020）3月29日の総会において、「松原市三宅土地区画整理準備組合」が設立され、同年6月に事業の業務代行予定者を募集した。同年9月12日のプレゼンテーション及び審査委員会において提案内容の審査を行ない、同年9月26日の上記組合第2回総会にて、業務代行予定者として清水建設株式会社関西支店が承認された。令和4年（2022）7月23日には「松原市三宅西土地区画整理組合」が²⁾設立され、清水建設株式会社関西支店が業務代行者として決定した。

この区画整理事業地の範囲は約21.1haに及んでおり、そのほぼ全体が周知の埋蔵文化財包蔵地「三宅西遺跡」と重複する。遺跡内には阪神高速道路6号大和川線が東西に通っており、この高速道路建設に伴う発掘調査の成果から、今回の事業範囲においても同様の埋蔵文化財が広く分布することが予想された。このため松原市教育委員会（以下、「市教委」）は、令和3年（2021）2月1日から3月26日の期間で事業地内の試掘確認調査を実施し、発掘調査の必要な範囲を確定した。この試掘確認調査の成果に基づき、令和4年（2022）9月1日から令和5年（2023）9月29日までの期間で、先ずは水路・道路・貯留槽が建設される7箇所にわたって、市教委と公益財団法人大阪府文化財センター（以下、「センター」）が合同で本格的な発掘調査を実施。今回の調査はこれに続く本格的な発掘調査で、物流倉庫建設計画に伴い、地盤改良などが及ぶ範囲について実施した。

発掘調査の実施にあたって、市教委は現状の体制では調査遂行が困難であることから、大阪府教育委員会（以下、「府教委」）に調査の協力を依頼〔「松文第220-2号」令和5年（2023）10月4日付け〕。府教委は市教委に対し、センターが協力する旨回答〔「教文2253号」令和5年（2023）10月6日付け〕。同時にセンターに調査を実施するよう通知した〔「教文2253号」令和5年（2023）10月6日付け〕。これにより、文化財保護法第99条に基づく発掘調査が、市教委とセンター合同で進められることとなった。調査に先立ち、市教委、清水建設株式会社、株式会社島田組、センターの四者は、令和5年（2023）10月19日、適正且つ円滑な発掘調査を図ることを目的とした協定を交わし、令和5年（2023）10月31日付けで、株式会社島田組とセンターが発掘調査に係る委託契約を締結。以上を経て、三宅西遺跡の発掘調査が開始されることとなった。

現地での発掘調査期間は、令和5年（2023）11月1日から令和6年（2024）6月30日まで。調査面積は、市教委より調査不要と判断された箇所を一部調査範囲から除外したため、当初計画より若干減り4,973㎡となった。

第2節 既往の調査

三宅西遺跡の本格的な発掘調査は、遺跡内を東西に貫く都市計画道路大和川線（阪神高速道路6号大和川線）、及び都市計画道路堺松原線の建設工事に伴い始まる。平成15年（2003）10月から平成16年（2004）6月には、計画路線内の遺跡の有無や内容を確認するための確認調査が、国道309号から府道大阪狭山線までの約2kmの区間で実施された。この調査によって路線内まで遺跡が広がっていることが判明し、遺跡の範囲が拡大されることとなった。この成果に基づき、平成16年（2004）11月から平成18年（2006）9月までの期間で、路線内の本格的な発掘調査がセンターによって実施され（三宅西遺跡04-1・04-2・04-3）、平成19年（2007）から平成20年（2008）にかけては、諸事情により着手できず、未調査箇所として残っていた部分や、今井戸川取水施設整備工事に伴う小規模な調査が、遺物整理作業と併行して実施された（三宅西遺跡07-1・07-2）。この一連の調査では、調査地の東端部で弥生時代中期前葉の集落を検出し、中央部では流路からローリングをほとんど受けておらず、炭化物が厚く付着する遺存

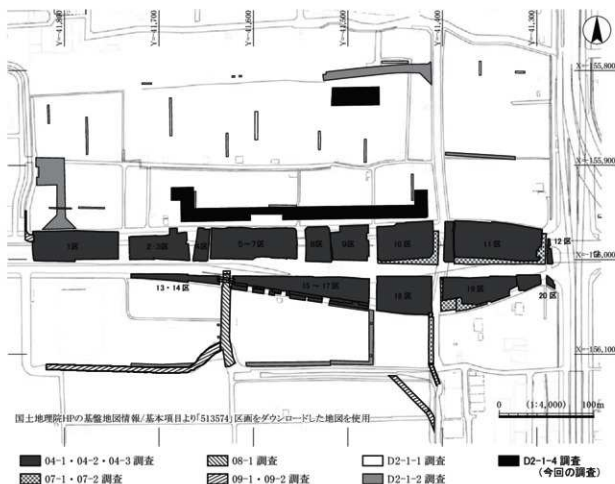


図2 今回の調査区と既往の調査区

状態の非常に良い縄文時代後期中葉の土器が発見され、流路に近接した調査地南側に、この時期の集落の存在が推定されるなど、大きな成果を得ることができた。引き続き、平成20年(2008)から平成22年(2010)にかけて、今井戸川の付け替えや取水施設の整備など、道路建設に関連する付帯工事に伴う調査が実施され(三宅西遺跡08-1・09-1・09-2)、縄文時代後期中葉の土器を包含する流路を検出するなど、04-1～04-3調査の成果を迫認する成果を得ることができた。

前節で記したとおり、その後この周辺の整備計画が決定するが、これまでに実施された上記発掘調査の成果から、この整備事業が計画されている範囲においても埋蔵文化財が広く分布することが予想された。このため市教委は、令和3年(2021)2月から3月の期間で、事業地内の19箇所において試掘確認調査を実施した。その結果、弥生時代の方形周溝墓の可能性のある「L」字状に屈曲する溝などを検出し、阪神高速道路6号大和川線の北側に接した部分に、弥生時代後期から古代・中世の遺構が広がっていることが確認された。この試掘確認調査の成果に基づき、令和4年(2022)9月から令和5年(2023)9月までの期間で、水路・道路・貯留槽が建設される7箇所において、市教委とセンターによる本格的な発掘調査が実施された。結果、遺跡北方に設定した調査区で、遺跡内からは初めて弥生時代後期後半から古墳時代初期の水田が検出された。また古墳時代中期の流路内から、水流の制御が試みられたと考えられる杭列が発見されるなど、当時の開発の特徴を示す興味深い成果が得られた(D2-1-2調査)。

今回の調査は、これに続く本格的な発掘調査で、04-1～04-3調査に近接する東西に長い調査区(B区)と、やや北方に離れた調査区(A区)の2箇所で行った。

註

- 1) 松原市ホームページ「地区計画に関すること」(更新日:2022年6月10日<2025年1月閲覧時点>)
<https://www.city.matsubara.lg.jp/docs/page13395.html>
 「三宅西地区計画」(令和4年3月28日市告第85号)―「南部大阪都市計画地区計画の決定(松原市決定)」
https://www.city.matsubara.lg.jp/fs/1/8/0/1/3/2/_/2022032802.pdf
- 2) 松原市ホームページ「三宅地区のまちづくりについて」(更新日:2023年4月4日<2025年1月閲覧時点>)
<https://www.city.matsubara.lg.jp/docs/page4080.html>

参考・引用文献

- ・財団法人 大阪府文化財センター 2009 『三宅西遺跡』
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2010 『三宅西遺跡Ⅱ』
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2010 『池内遺跡』
- ・松原市教育委員会 2021『(仮称)松原市三宅土地区画整理事業埋蔵文化財試掘確認調査』(未刊)
- ・松原市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター 2024 『三宅西遺跡』



写真1 昭和23年の調査地周辺の状況



写真2 河内台地上の現状

広がっている(写真2)。遺跡はその台地と自然堤防とに挟まれた標高10メートル以下の低平な平野部に立地しており、周辺には、古代条里制に伴う碁盤目状の規則正しい水田が広がっている(写真1)。

なお、周辺の地形や地質については、『三宅西遺跡』に詳しいので、そちらを参照されたい。

第2節 歴史的環境

三宅西遺跡周辺は、古代に河内国丹比郡と呼ばれた地域にあたる。その中の「三宅郷」に属しており、調査地東側の台地上には、その中心であった三宅集落が広がっている。高野山への参詣道の一つである中高野街道が集落の中を南北に通過し、その脇には「屯倉神社」が鎮座する(写真2)。古代には「屯倉」が置かれた地と推定されているが、これまでの調査ではそれを示す成果は得られていない。三宅西遺跡のこれまでの調査成果については、前章で記したとおり、縄文時代後期の集落の存在を示す資料が得られるなど、徐々に周辺の様相が明らかとなってきた。以下、周辺に点在する遺跡について概観する(図4)。

池内遺跡 三宅西遺跡の西側に続く遺跡である。弥生時代前期中葉の水田や流路などからなる生産域と、それよりも若干新しい時期の平地建物・竪穴建物・掘立柱建物からなる居住域が確認されている。居住域の周囲には、2条一対の溝がめぐっており、環濠集落であったと考えられている。また、遺跡西端では方形周溝墓もみつかっており、墓域も広がっていたことがうかがえる。古墳時代の顕著な遺構はないが、平安時代になると再び開発され、区画溝で囲まれた大規模な屋敷が築かれる。屋敷の中からは、廂付きの大型掘立

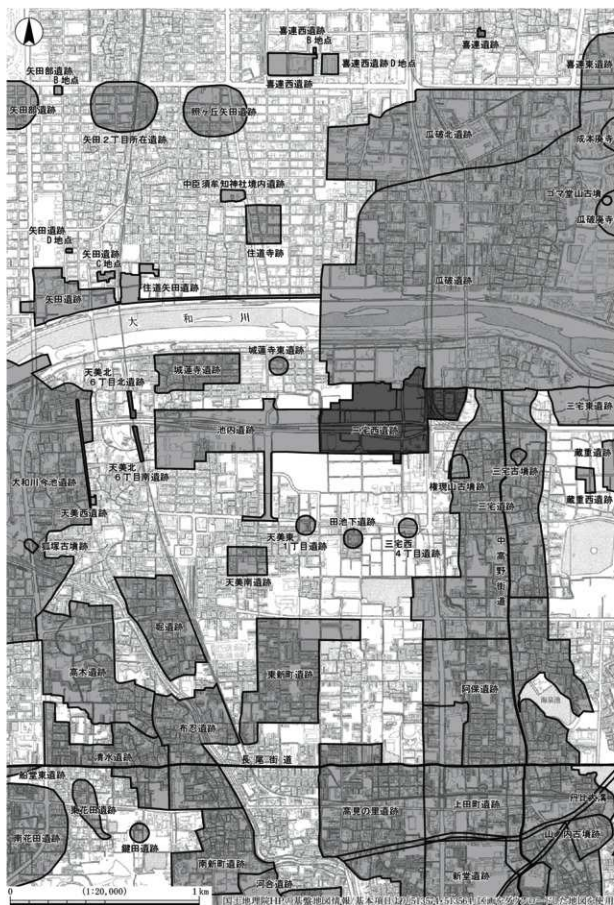


図4 調査地周辺の遺跡分布

柱建物とそれに付随する小型の掘立柱建物・井戸・土壌墓などが検出されている。遺物も豊富で、越窯青磁・緑釉陶器・灰釉陶器などのほか、硯・鈿帯も出土している。

瓜破遺跡 弥生時代前期の土器編年では学史に残る著名な遺跡である。大阪市の南端、三宅西遺跡の北東側に隣接し、その範囲は大和川河床も含め東西約1.7km、南北約1.6kmに及ぶ。昭和14年（1939）に市営瓜破霊園の建設に伴い弥生土器が出土し、翌年には大和川河床で採取された弥生土器が学会で紹介されるなどしたことにより、広く知られることとなった。その後、今里幾次や日本考古学協会による発掘調査が実施され、前期土器の編年が大きく進むこととなった。昭和24年（1949）には採集された「泉貨」が誌上で紹介されている。1970年代以降、開発に伴う本格的な発掘調査が進み、西地区では弥生時代前期の土壌墓や方形周溝墓が検出されている。北東地区では古墳時代中期の土器や奈良時代の瓦が大量に出土し、周辺に古代寺院の存在が推定されるようになった。東南地区では遺跡内で2例目の「泉貨」が出土し、また飛鳥時代の溝や柵に囲まれた掘立柱建物群が検出され、有力豪族の居館と推定されている。大和川以南の当遺跡に近接する地区では、弥生時代中期前葉の居住域や墓域が確認されており、当調査A区で検出した集落との関連が注目される。

大和川今池遺跡 松原市・堺市・大阪市に跨る東西約1km・南北約1.45kmの遺跡である。これまでの調査で、縄文時代草創期の有舌尖頭器が数点出土している。弥生時代の遺構・遺物は少ないが、古墳時代になると、竪穴建物や掘立柱建物で構成される集落が広がる。また家形埴輪をもつ方墳もみつかった。この遺跡で特に注目されるのは、飛鳥時代に整備された「難波大道」が確認されたことである。前期難波宮（難波長柄豊碕宮）から南方に直進する官道で、現在までに総延長285mが明らかとなっている。この発見は、周辺の古道や条里制に関する研究を大きく前進させることとなった。このほか、鎌倉時代後期から南北朝時代に築かれた濠をめぐらせた豪族居館がみつかった。その近くでは平安時代後期の瓦が大量に出土しており、居館に隣接して、「観音堂」と呼ばれた寺院の存在も推定されている。

上田町遺跡 昭和39年（1964）の小規模な発掘調査で出土した土器群について、「上田町Ⅰ～Ⅲ式」と冠して発表し、古式土師器の標識遺跡として知られることとなった。その後の調査では、弥生時代後期の水田が検出され、縦横に走る小畦畔と水口のほか、無数の稲株痕もみつかった。また、古墳時代前期の竪穴建物や井戸などとともに、両時期にわたる河川もみつかり、井堰の跡も確認されている。遺物は弥生時代後期の打製石剣や木製鎌、古墳時代前期の竹で編んだ簞などがみられる。近年では、8世紀の掘立柱建物や土坑を検出し、掘立柱建物の柱穴からは滑石製白玉が49点も出土している。

南新町遺跡 8世紀の土師器・須恵器が多く出土した井戸が検出されている。また金銅製の耳輪や水晶など貴重な遺物も出土している。

三宅遺跡 弥生時代から中世の掘立柱建物や土坑・溝などが検出されているが、未だ大規模調査は行なわれておらず、「屯倉」に関わるような遺構は発見されていない。また遺物も少ない。

阿保遺跡 三宅遺跡の南側に隣接する遺跡で、三宅遺跡と同じく遺跡の中央付近を南北に中高野街道が通る。これまでの調査では、弥生時代後期の河川や古墳時代前期の掘立柱建物・井戸、古墳時代後期の水田や水路、飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物、中世の井戸や溝など、長期にわたる多くの遺構が確認されている。特に海泉池の南方では、飛鳥時代から平安時代にかけての大規模な掘立柱建物群跡が多数発見されており、官衙や古代寺院があったと推定されている。遺物もバラエティーに富み、土器や瓦のほか、下駄や箸・曲物などの木製品、砥石など石製品、また金属製品などが出土している。

布忍遺跡 中世の大寺院「永興寺（ようこうじ）」があったとされる遺跡。昭和54年（1979）に小規模調

査が実施され、平安時代後期の軒丸瓦を含む瓦片が多数出土している。

高木遺跡 弥生時代中期から後期にかけての竪穴建物や井戸のほか、奈良時代前期にさかのぼる可能性がある条里制水田や、奈良時代後半から平安時代初頭の条里を意識した大型掘立柱建物や井戸、溝などが検出されている。海獣葡萄鏡や硯が出土しており、官衙、あるいは豪族の居館と考えられている。また、大和川今池遺跡で検出されている「難波大道」から東に1里に合致する里境の溝や、水田跡には坪境に相当する大畦畔も検出されており、市域の条里制施行の起源を考えるうえで貴重な資料となっている。また、中世の屋敷と考えられる溝によって囲まれた掘立柱建物群や、曲物を積み重ねた井戸などもみつまっている。

堀遺跡 上記高木遺跡の東側に近接する遺跡である。高木遺跡同様に奈良時代後半から平安時代初頭の掘立柱建物群が検出されており、官道沿線の豪族の居館、あるいは官衙と考えられている。このほか同時期の条里制水田や中世の井戸などもみつまっている。

東新町遺跡 弥生時代中期の溝、古墳時代前期の方形周溝墓・溝・井戸、古墳時代後期の灌漑用水路や道路側溝と思われる溝などのほか、堀で囲まれた平安時代末期の掘立柱建物などが確認されている。また、縄文時代晩期から弥生時代前期の間に起こった地震による噴砂の痕跡も発見されている。

清水遺跡 高木遺跡・布忍遺跡に接する遺跡。溝で囲まれた古墳時代後期の掘立柱建物群跡が発見されており、豪族の居館と考えられている。また、条里の坪境と考えられる奈良時代の溝が検出されており、市域の条里制施行の起源を裏付ける貴重な資料となっている。

高見の里遺跡 弥生時代中期の河川跡のほか、中世前半の掘立柱建物や井戸・溝などが発見されている。縄文時代の石匙や弥生時代中期の磨製石剣などの石器類も出土しているほか、平安時代末期の枡が出土していることは注目される。

註

1) 松原市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター 2024『三宅西遺跡』

参考・引用文献

- ・松原市史編さん委員会 1985『松原市史』第一巻 本文編1
- ・『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名体系28 1986 平凡社
- ・松原市教育委員会 1980『三宅遺跡』
- ・松原市教育委員会 1989『松原市遺跡発掘調査概要』昭和63年度
- ・松原市教育委員会 2022『堀遺跡』
- ・松原市ホームページ
『埋蔵文化財包蔵地（遺跡）』https://www.city.matsubara.lg.jp/soshiki/Bunkazai/bunka_sports/bunkazai/hozochi/
『歴史ウォーク』https://www.city.matsubara.lg.jp/soshiki/kanko_citypr/bunka/rekishi_walk/
- ・財団法人 大阪府文化財調査研究センター 2000『大和川今池遺跡（その1・その2）』
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2009『大和川今池遺跡—難波大道の調査—』
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2009『三宅西遺跡』
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2010『池内遺跡』
- ・松原市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター 2017『池内遺跡』
- ・財団法人 大阪市文化財協会 1999『大阪市文化財協会発掘調査報告』—1996年度—
- ・財団法人 大阪市文化財協会 1999『大阪市文化財協会発掘調査報告』—1997年度—
- ・財団法人 大阪市文化財協会 2000『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』
- ・大阪府立狭山池博物館 2010『古代河内川沿いの集落景観』平成22年度秋季企画展

第3章 調査の方法

第1節 現地調査

現地での発掘調査は、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』、及び松原市の「松原市発掘調査現場作業記録取扱い基準」を併用して進めた。

調査番号 事業者との契約名称とは別に、松原市の調査台帳で管理する「調査番号」を付した。当センターでは通常、調査年次がわかるような番号を振るが、今回の調査は、松原市の基準に準拠し、「松原市道路台帳地図」における図郭割を基準とした記号を用いた。「大地区名ー小地区名ー順番号」で構成されるもので、今回の調査は「三宅西遺跡D 2-1-4」である。遺物取り上げラベルや写真撮影用ラベル、また遺物への注記など、すべてこの調査番号を用いることとした。

調査区割りと**調査順** 調査区は事業地の北方と南方の2箇所に分かれる。北方の約960mの調査区をA区とし、南方の東西長約270mに及ぶ調査区をB区とした。このうちB区については、調査担当者を分けて進められるよう三分割し、西からB a区、B b区、B c区とした。調査はA区から開始し、B区については事業者の要望により、西側のB a区からB b区、B c区へと調査時期を重複させながら進めた。

地区割り 遺物の取り上げに用いる区画割りで、これについては当センターのマニュアルに準拠した。世界測地系に則った平面直角座標系第Ⅵ系を基準としたもので、大阪府内全域をⅠ～Ⅴの大小5段階に区画している（図5）。第Ⅰ区画は大阪府の南西部を通る $X = -192,000\text{ m}$ ・ $Y = -88,000\text{ m}$ を起点に、府域を東西9区画（0～8）、南北15区画（A～O）に分割したもので、一区画は東西8km、南北6kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各4分割の、計16区画（1～16）に分けたもので、一区画は東西2.0km、南北1.5kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20分割（1～20）、南北15分割（A～O）する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画をさらに東西、南北ともに10分割（東西1～10、南北a～j）した一辺10mの区画で、出土遺物については、基本的にこの区画ごとに取り上げることとした。第Ⅴ区画は第Ⅳ区画をさらに「田」の字状に4分割（Ⅰ～Ⅳ）した一辺5mの区画であるが、今回の調査では遺物が稀薄であったため使用しなかった。

上記の方法で区画した場合、この調査の第Ⅰ区画は「G 5」、第Ⅱ区画は「4」となり、第Ⅲ区画は「15 N・15 O・16 N・16 O・17 O」の5区画に分かれる（図6）。なお遺物取り上げ用ラベルや遺物台帳への記入は、煩雑となるため第Ⅰ・Ⅱ区画は省略し、「15 N-9 c」のように第Ⅲ区画以降のみとした。

掘削・記録・埋め戻し これまでの調査の成果を参考に、機械掘削により現代の表土・盛土から近世以降の耕作土などを除去し、機械掘削完了面からスコップや鋤簾などを用いて人力掘削を行ない、遺構を検出した。A区とB a区の機械掘削開始時には、松原市教育委員会も立ち合い、深度を確認した。掘削で生じた土砂はベルトコンベヤーなどを使用して調査区外へと搬出した。検出した遺構については、柱穴などの小さなものは片手用草削りや移植ゴテなどを用いて慎重に掘り下げた。埋土の堆積状況など観察が必要な遺構については、二分割するなど断面を残して掘削し、順次遺構平面や埋土堆積状況などの図面作成と写真撮影を行なった。

埋め戻す前には、松原市教育委員会の確認を受け、下層の確認など、その後の調査指示を仰いだ。
写真撮影 遺構写真については、フィルムカメラによる撮影は行なわず、すべてフルサイズデジタル一眼レ

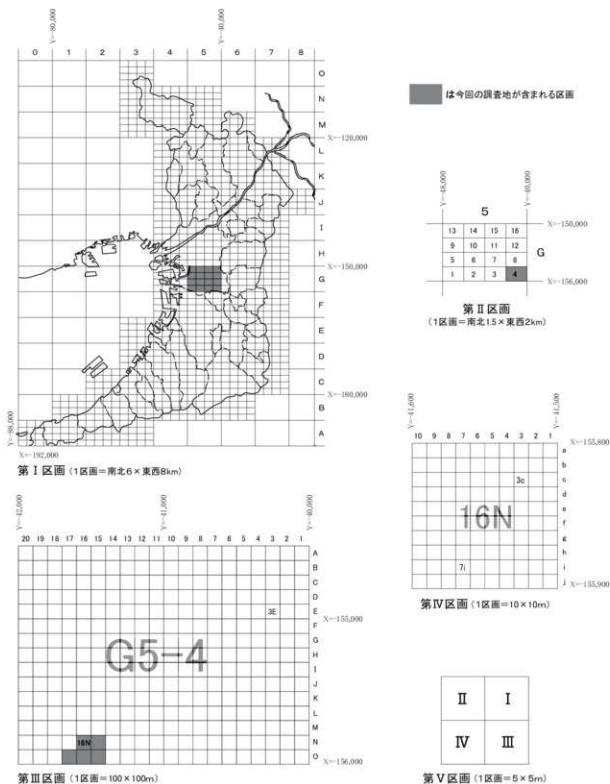


図5 地区割方法

フカカメラにより撮影した。使用したデジタルカメラは、当初「SONY α 7 R IV」の1台であったが、二つの調査区を同時並行で調査したため、途中から「Nikon D610」も併用した。記録写真のデータはRAWデータとJPEGデータの2種類とし、その際のファイル名は、カメラの初期設定のまま「DSC〇〇」とした。

なお、調査区的全景写真については、小型ドローンによる撮影を計画し、A区で一度実施したが、記録写真として耐え得るような画質に達していなかったことが判明したため(写真図版5-2)、その後は取り止

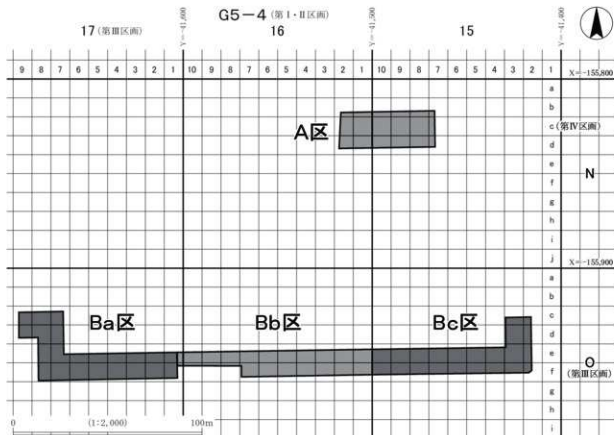


図6 調査区割りと地区割り

め、高所作業車を利用して高位置からの撮影をすることとした。その撮影は上記カメラを用いて調査担当者が行なった。

遺構図 平面図・断面図とともに、すべて株式会社島田組が作成した。トータルステーションとCADソフトを用いて図化したものを、調査担当者が確認・修正、及び土色・土質などの記入を行ない完成させた。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

遺構名 遺構番号は、基本的に松原市の基準にしたがって付した。遺構であることを示す大文字のアルファベット「S」に続いて、遺構の種類に関係なく4桁の通し番号を振った。「S0015」・「S2024」という具合である。なお、前述のとおり調査区を分割し、一つの調査区に一人の担当者を張り付けて、二つの調査区を同時進行で調査したため、相手の調査区で何番まで遺構番号を使用したのかなど、お互いに把握することができず、全調査区通しの番号を振ることが困難となった。このため、事前に調査区ごとに番号を割り振ることとした。最初に調査を開始したA区は0001から、Ba区は1001から、Bb区は2001から、Bc区は3001からとしている。またこれらの番号とは別に、壁溝と柱穴、竈などの遺構で構成される「竪穴建物」のような集合体の場合には、上記のような遺構番号とは別に集合体独自の番号を付した。この場合「竪穴建物1」のように、遺構名称の後に番号を付けた。

第2節 整理作業

整理作業のうち、報告書の編集作業は、基本的には当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して進めたが、出土遺物や記録類は、最終的に市に移管することとなるため、遺物や遺構写真の台帳、遺物の収納方法などについては、松原市の様式・基準にしたがった。

現地調査期間中は、現場詰所において出土遺物の洗浄や注記、現地で撮影した遺構写真の整理など、基礎的な整理作業を現場作業と並行しながら実施し、現地調査終了後の令和6年7月から同7年2月までは、堺市所在の当センター整理室において、本格的な遺物整理作業及び報告書の作成を進めた。

遺物 整理作業の対象となった遺物は、弥生時代から古墳時代の土器・石器が中心である。現場撤収時の遺物量は、収納コンテナ（松原市仕様：内寸54×34×20cm）に17箱で、内容は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦器、陶磁器、瓦、石鐮や剥片などの石器類、木製品などである。

出土遺物は、原則出土した日付順に登録番号を付し、ブラシやハケを用いて洗浄した。乾燥後は台帳と照合できるよう注記作業を行なった。ただし木製品や石製品には注記していない。注記は面相筆を用いて遺物の端に小さな文字で登録番号を墨書した。その注記には、登録番号の前に調査番号も入れ、「D 2-1-4-登録番号」とした。注記後は、調査区・出土遺構・出土層位・出土年月日・遺物の内容などを記入した遺物台帳を作成した。

本格的な整理作業が始まった段階で、遺物を遺構ごとに広げて接合作業を行ない、出土した遺物の内容を確認しながら、実測可能な遺物を抽出した。抽出したものは必要に応じて石膏を用いた復元作業を行ないながら順次実測作業を行なった。また縄文土器や弥生土器、埴輪などの文様は実測図に貼り込めるよう拓本をとった。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、描画ソフト（Adobe Illustrator）を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。本書に掲載した遺物は最終的に278点となった。

遺構 各遺構面の全体平面や個々の遺構平面・断面、遺物出土状況、調査区の地層断面については、株式会社島田組による作図によってすべてデジタル化されていたため、報告書作成時には、そのデータを加工して挿図を作成した。

写真 現地で撮影した遺構写真は、調査区ごとに分けて保存し、調査区・撮影対象遺構・撮影内容・撮影方向・撮影年月日などを記入した記録写真台帳を作成した。

報告書写真図版のうちの遺構写真については、デジタルカメラで撮影したRAWデータを色調補正して使用した。遺物写真については、挿図のレイアウトがほぼ決まった段階で、大まかに図版レイアウトを組み、当センターの写真室へ遺物を搬入して撮影を行なった。

報告書編集 これらの作業が進み、挿図や写真図版が大まかに仕上がった段階から、並行して本文の執筆に取りかかった。また文章量と調整しながら挿図の組み換えや遺物番号の入れ替えなどを行ない、写真図版と併せて報告書の編集作業を進めた。

収納・保管 整理作業を終えた遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外の非掲載遺物に分け、松原市の様式にしたがって収納コンテナに収納した。掲載遺物には水色、非掲載遺物には黄色のコンテナを使用し、各コンテナには内訳を記したラベルを貼付した。最終的なコンテナ数は、掲載遺物10箱、非掲載遺物13箱となった。また、その内容を記載した遺物収納台帳もあわせて作成した。

図面のうち遺構実測図については、調査区ごとに分けて左上隅に通しの図面番号を赤鉛筆で記入し、調査区・記録内容・縮尺などを記した図面台帳を作成した後、A3サイズのコピー紙に収納した。遺物実測図の収納にもA3サイズのコピー紙を用いた。

各種台帳やデジタルカメラで撮影した遺構写真、報告書原稿などのデジタルデータは、外付けハードディスクに格納した。

第4章 基本層序

第1節 層名と遺構面の呼称

前章で記したとおり、南側のB区については、東西方向に長い調査区であったため、三分割して調査を進めた。調査区名称は、枝番を用いて西からB a区・B b区・B c区とした。調査区内の層序は、A区・B区ともに基本的に乾燥しにくい南辺の調査区壁面で観察し、写真撮影や図面作成を行なった。また特徴的な層序については適宜北辺の壁面でも記録をとった。¹⁾

当遺跡が立地する地域は、古代に設定された条里の痕跡をとどめる水田、あるいは畠として長い間継続して利用されている。このため、近世以降の耕作によって、古代・中世の耕作面はもちろん、それ以前の遺構面にも攪拌が及んでおり、古代から中世の時期の遺構は、深いもの以外ほとんど残っていない。

機械掘削により、これら近世以降の耕作土を除去し、暗褐色や黄褐色などの暗色を呈する地層の上面から人力掘削を開始した。通常ならば、この暗色層を「1層」として調査を進めるが、今回の調査では、この暗色層がこれまで周辺で実施された調査の「7層」にあたるであろうと判断できたことから、いずれの調査区もこの「7層」を起点に調査を開始することとした。ただし、最初に調査に着手したA区とB a区では、距離も離れており、地層の堆積状況も異なっていたことから、「7層」を基準に、それ以下はその調査区ごとに地層に番号を付けた。これはB b区・B c区についても同様で、例えばB b区では「7層」、「8層」と上から単純に番号を振っているが、B c区では、B b区で「7層」とした地層より上の面でも遺構が遺存していることが判明したため、「7層」の中をアルファベットやローマ数字を用いて細かく分けて対応した。このため、B b区で「7層」、「8層」としていた地層が、B c区では「7 e層」となり、さらにその中が「i～iii」の3層に細分されるなど、一つの地層に、調査区ごとに異なる層名が付くこととなってしまった。本書では、調査区ごとに異なる層名を整理し、統一した名称で報告すべきであったが、遺物の取り上げや、遺構写真などにもこの層名が使われており、修正・統一することが難しいため、本書内でも現地調査の際に付けた層名のまま報告する。それぞれの地層の対応関係については図15に示した。

なお、機械掘削で除去した1～6層（B b区は1～5層）については、壁面を分層し、記録もとしてはいるが、調査対象外の地層であったため、どの地層が何層なのか一つ一つに層名を付けて対応させることを省略した。

遺構面の呼称については、A区・B a区・B b区では、7層を除去して現れた8層の上面を「第8面」のように、X層の上面を「第X面」としたが、B c区では、7 a・7 b・7 c層が上部からの攪拌によって削られていたため残りが悪く、ほかの調査区のような呼び方ができなかった。7 a・7 b・7 c層は東半の一部には残っているが、西半部までは分布しておらず、機械掘削完了面が、どこも第7 a面となる訳ではなく、また7 a層除去後の面が第7 b面となる範囲もあれば、7 b層や7 c層もなく、直ちに第7 d面となる箇所もあった。このためB c区のみ、7 a層除去後の面を「第7 b面」ではなく、「7 a層下面」のように遺構面を呼称することとした。なおこれは、あくまでも単にどの地層掘削後の遺構面なのかを表したものであり、検出した遺構の帰属面を表現したものではない。

以下、調査区ごとに基本層序について報告する。

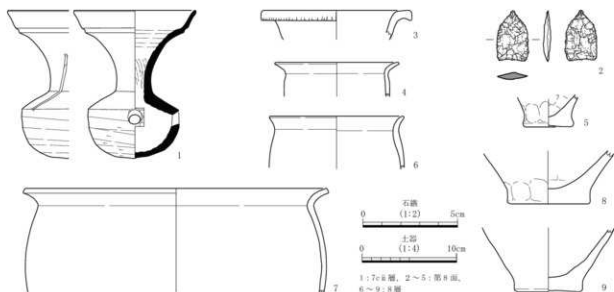


図8 A区7c ii層～8層出土遺物

れるが、古代の遺物はこの1点のみであり、混入品の可能性がある。

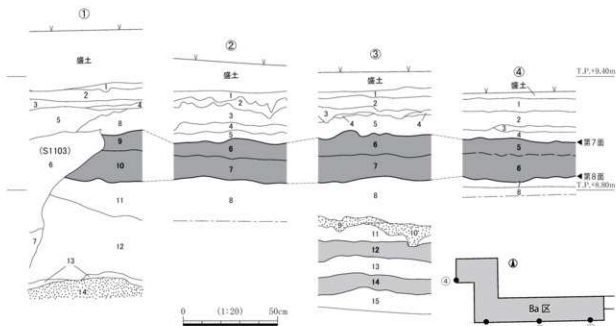
8層は黒褐色や褐灰色の粘土などで、東端では約0.2 mの厚さがあるが、西に向かって薄くなり、0.1 mほどの厚さとなる。また一部が7c層上面まで鳥状に盛り上がる箇所もみられた。この盛り上がりは、おそらく7c層の形成過程で、8層が削られずに残った部分と考えられる。8層からは、弥生土器（3～9）が出土している。3は壺で、4～9は甕。いずれも中期前葉（第Ⅱ様式）のものである。このほか、サヌカイト製の石鐏（2）1点と剥片が十数点出土している。須恵器小片も2点含まれていたが、これは混入品と思われる。この8層除去後の面（第9面）で、弥生時代中期前葉の遺構を多数検出した。この面は東に向かって緩やかに下がっており、標高はT.P.+7.8～8.1 m前後である。

9層以下については、調査区周囲の側溝壁面や調査区西寄りに設定した下層確認用のトレンチ（図21）によって確認した。9層は厚さ約0.15 mで、下層確認トレンチ部では黄褐～黄灰色の粘土を呈する。10層の上半（10a i層）は粗～中粒砂が少量混じる黒色の粘土、下半（10a ii層）は下位層の小偽礫や、粗～中粒砂を多く含む黒色のシルト質粘土で、厚さは上下合わせて約0.2～0.3 mである。

第3節 B a区の層序と遺物

B区は、阪神高速道路大和川線の北側に並行する東西方向に長い調査区で、B a区はその西端約3分の1の範囲にあたる。

東端部では現地表面下約0.5 m、西端部では約0.25 mで7a層に達する。この面（第7面）は高低差もなく、東から西まで比較的平坦である。7a層は土色の濃淡によって上下2層に分けた。上層（7a i層）は粗粒砂～小礫が混じるにぶい黄褐色のシルト～極細粒砂。下層（7a ii層）は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルトや、粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐のシルト～極細粒砂である。厚さはほぼ一定で、7a i・7a ii層合わせて0.2～0.25 m程度である。7a層の上面や7a層からは、古墳時代前期（庄内式期後葉～布留式期前葉）の土師器片（10～21）が多数出土している。須恵器は、7a層上面から甕の体部片が1点出土しているのみである。10～16はいずれも甕である。弥生形甕や庄内形甕から布留形甕まで、若干の時期差が認められるが、大きくは庄内式期後葉から布留式期前葉に収まるものばかりである。17は小型器台脚部。18は鉢か。体部外面には板状工具による擦過痕がみられる。19～21の各種壺も同時期



- ①
- 2.5V5/1 黄灰 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【現代跡土層】
 - 2.5V7/4 浅黄 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【耕土層】
 - 2.5V7/4 浅黄 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【耕土層】
 - 10V86/6 明黄褐色 シルト
 - 2.5V6/2 灰黄 シルト～細粒砂
 - 10V86/2 灰黄褐色 粗粒砂～小礫（ワナナリ）赤土方粗粒土【S1103道路】
 - 10GY6/1 緑灰 シルト～堆細粒砂【S1103道路】
 - 10V85/4 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂
 - 10V85/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 10V83/1 黒褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト【第7a層】
 - 10V84/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【S1020道路】
 - 2.5V7/2 灰黄 シルト～堆細粒砂
 - 2.5V5/1 黄灰 粗粒砂～小礫を多く含むシルト【土壌層】
 - 2.5V6/2 灰黄 シルト混じる中粒砂～粗粒砂、小礫

- ②
- 2.5V7/3 浅黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【耕土層】
 - 10V86/2 灰黄褐色 粗粒砂～小礫を多く含むシルト 幸②の3～4層に対応
 - 10V87/4 にぶい黄褐色 シルト
 - 10V87/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫を非常に多く含むシルト幸②の3と同層
 - 10V86/6 明黄褐色 シルト幸②の4層と同層
 - 10V84/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 10V84/2 灰黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 2.5V7/4 浅黄 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂 幸第8面基盤層

- ③
- 2.5V7/4 浅黄 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂
 - 2.5V6/6 明黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト【耕土層幸①の1と同層】
 - 2.5V7/3 浅黄 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【耕土層】幸②幸③の1と同層
 - 10V85/4 にぶい黄褐色 シルト
 - 10V86/6 明黄褐色 シルト
 - 10V84/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 10V84/2 灰黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 10V86/2 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第8面基盤層】
 - 10V87/2 にぶい黄褐色 堆細粒砂～小礫混じる中粒砂～粗粒砂～小礫
 - 10V85/3 にぶい黄褐色 堆細粒砂～中粒砂混じるシルト～堆細粒砂
 - 2.5V8/4 灰黄 シルト
 - 2.5V4/1 黄灰 粘土～シルト【土壌層】
 - 2.5V6/1 黄灰 シルト
 - 2.5V3/1 黒褐色 粗粒砂混じるシルト～堆細粒砂【土壌層】
 - 2.5V8/1 黄灰 粗粒砂混じるシルト～堆細粒砂

- ④
- 10V86/4 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【耕土層】
 - 2.5V6/6 明黄褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【耕土層】幸南面の2と同層幸
 - 10V86/2 灰黄褐色 粗粒砂～小礫を非常に多く含むシルト
 - 10V85/3 にぶい黄褐色 粗粒砂～小礫を非常に多く含むシルト～堆細粒砂
 - 10V83/2 黒褐色 粗粒砂～小礫を非常に多く含むシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 10V83/1 黒褐色 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂【第7a層】
 - 10V87/1 灰白 粗粒砂～小礫混じるシルト～堆細粒砂
 - 10V87/2 にぶい黄褐色 粗粒砂～粗粒砂～小礫

図9 Ba区基本層序断面

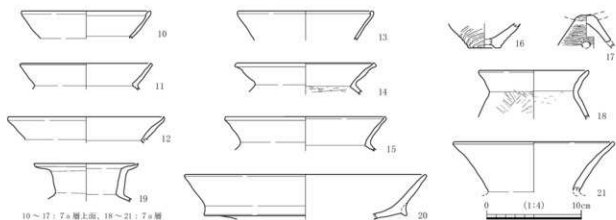


図10 Ba区7a層出土遺物

のものである。

7 a ii 層除去後の面（第8面）の標高はT.P.+8.85 m前後で、顕著な起伏もなく平坦である。この面で古墳時代前期の遺構を多く検出した。8層は粗粒砂～小礫が混じる浅黄色のシルト～極細粒砂や、粗粒砂～小礫が混じるにぶい黄橙色のシルト～細粒砂であるが、調査区西端部は含まれる砂粒が粗く、粗粒砂～小礫が混じる灰白色のシルト～極細粒砂や、にぶい黄橙色の細～粗粒砂・小礫となる。

平面的な調査は第8面までとしたが、部分的に下層の地層堆積状況も確認し、記録をとった。その結果、8層よりもさらに下層のT.P.+8.25～8.55 m付近に、暗色層が確認できた（図9の③）。黄灰色のシルト層を挟んで、その上層に黄灰色の粘土～シルト、下層に黒褐色の粗粒砂混じりシルト～極細粒砂の2層があり、これが調査区全体に広がっている。なお場所によって間層が薄く、上下の暗色層2層が連続している箇所も認められた。

第4節 B b 区の層序と遺物

B 区の中央約 3 分の 1 を範囲とする調査区である。

調査区中央部には幅の広い流路（S2022・2023）が位置しているため、調査区の西端と東端では、地層の状況が大きく異なる。西端部では、現地表面下約 0.4 m で、B a 区の 7 a 層に対応する 7 層に達する。この 7 層上面では、幾筋もの溝を検出している。7 層は締りのある黒褐色の粘土質シルトで、一部では B a 区のように土色の濃淡によって上下 2 層に分層可能であったが、その差は B a 区ほど明瞭ではない。厚さは約 0.3 m である。この 7 層からは土師器の小片が 9 点、上面からは古墳時代の須恵器小片が 2 点出土している。

7 層の下には 8 層とした極粗～粗粒砂が混じるにぶい黄褐～褐色の中粒砂～シルトがあり、さらにその下には、粘性が強く、細～極細粒砂が僅かに混じるにぶい黄褐～褐色の粘土質シルトの 9 層と続く。この西端部の 8・9 層は、東端部で 8・9 層とした地層とは、流路を挟んで完全に分断されており、まったく様相が異なっている。調査を進める上で同じ層名を付すこととしたが、それぞれが連続するものかどうかは検証できていない。西側 9 層下の T.P.+8.2～8.3 m 付近には、硬化した褐色や黒色のシルト偽礫を多く含む灰黄褐色の粘土質シルトの暗色層が確認できる。この暗色層は B a 区の下層で確認した暗色層に対応するものかもしれない。

B a 区から続く上記 7 層は、調査区の東方まで分布する地層であるが、調査区中央西寄りに位置する S2022 によって、Y=-41.585 m 付近から Y=-41.555 m 付近までは、完全に削られて存在しない。ちょうどこの S2022 の範囲にのみ、S2022 の埋土上面に 6 層がみられる。粗～中粒砂が混じるにぶい黄褐～暗褐色の粘土質シルトで、厚さは約 0.1 m である。これは S2022 が埋まった後にできた上面の窪みにたまった地層と考えられる。この 6 層からは、古墳時代の土師器・須恵器の小片のほか、8 世紀の須恵器蓋（22）と杯（23）、瓦の小片が出土しており、S2022 が古代には埋まり切っていたことがうかがえる。

S2022 東側の調査区中央部では、6 層がなくなり、7 層との間に灰黄色の細～極細粒砂の堆積が現れる。これは S2022 の東側にのみ分布する地層で、調査区の壁面では、S2022 の埋土から続いているように観察できたことから（図 12 の③ 14-2）、S2022 埋土との関係を何度も精査して検証したが、この地層を S2022 が切っているような状況は認められなかった。この地層は東方に向かってシルトが多くなり、土色にもぶい黄



図 11 B b 区 6 層出土遺物

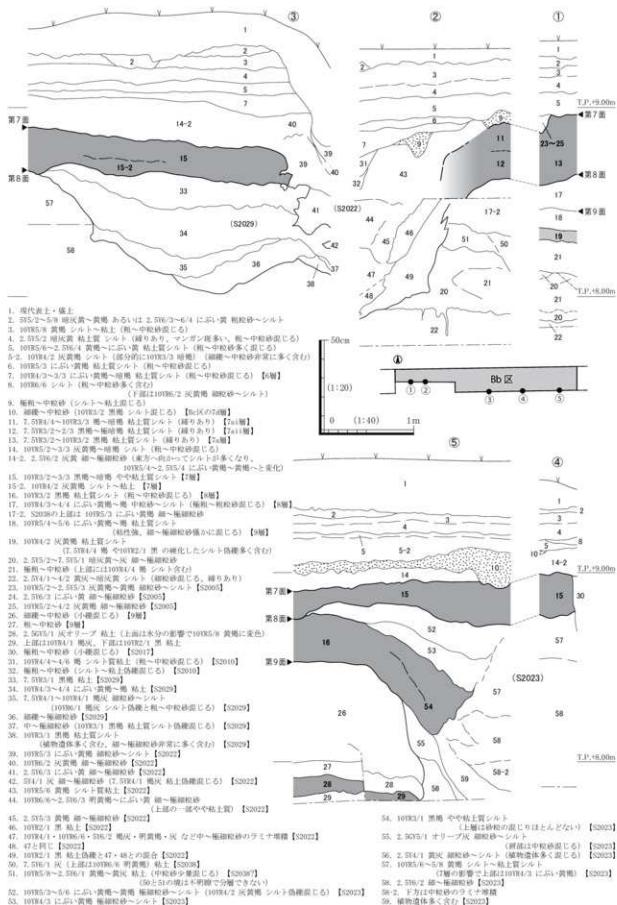


図 12 Bb区基本層序断面

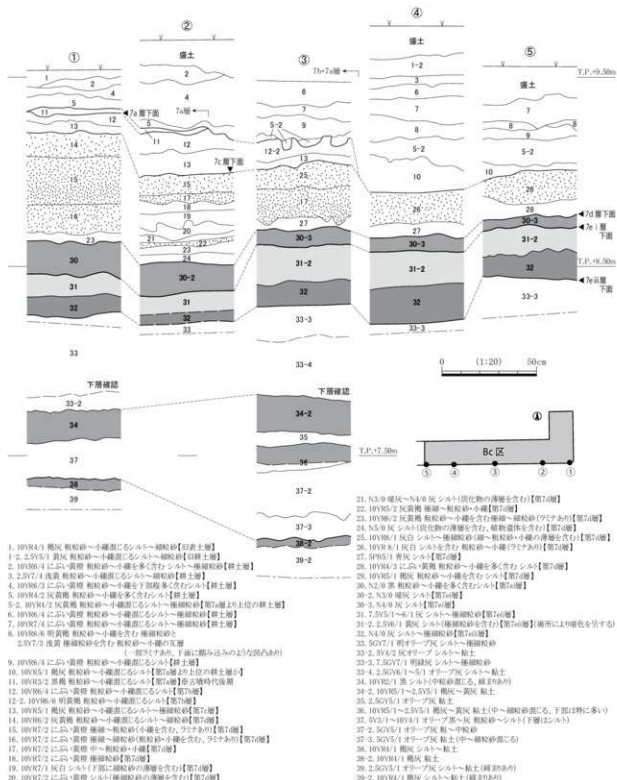


図 13 Bc区基本層序断面

褐～黄褐色へと変化する。厚さは0.15 m程度である。この地層の下に、Ba区から続く7層が広がる。7層は調査区中央付近では黒褐～暗褐色のやや粘土質シルトで、約0.2 mの厚みとなる。7層以下は、すべてS2023の埋土である(図12の④)。

調査区東端部では、7層の上にみられた上細礫～極細砂粒が薄くなり、Bc区との境付近では完全になくなる。それに代わってその上面には、Y=-41,520 m付近から東側に、黒褐色のシルトが混じる細礫～中

粒砂が現れる。この砂層は B c 区の 7 d 層に対応する地層で、東に向かって徐々に厚みを増し、B c 区との境付近では 0.2 m 弱の厚みとなる。7 層の下には、西方で 8 層としたものとはまったく様相の異なる 8 層が分布する。粗～中粒砂が混じる黒褐色の粘土質シルトで、厚さは約 0.25 m である。B c 区の 7 e ii・iii 層に続く地層であるが、B b 区では分布範囲が狭く、分層できなかった。調査区中央部で検出した S2023 上には、この 8 層は及ばないが、7 層には覆われるという状況である。8 層からは遺物は出土していない。

東端部の 8 層の下には、9 層とした小礫が混じる細礫～中粒砂が厚く堆積し、その下の T.P.+7.80 m 付近には灰オリブ粘土の暗色層が約 0.1 m の厚みで分布する。9 層は 8 層と同じく西端の 9 層とはまったく様相が異なるものである。この上面でピットを数基検出している。

第 5 節 B c 区の層序と遺物

東西に長い B 区の東端約 3 分の 1 を範囲とする調査区である。

西半部では、7 d 層とした砂層まで、現地表面から 1 m ほど機械掘削したが、東半部では、7 d 層よりさらに上に、7 a～7 c 層とした遺構を伴う地層が存在していたため、東側に向かって機械掘削を徐々に浅くした。調査区東端部では現地表面から 0.2 m 程度で 7 a 層に達する。7 a 層は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルトで、厚さは 0.05 m 程度と非常に薄い。また分布範囲も狭く、東端から Y=-41.435 m 付近までしか分布しない。この下面で、古墳時代後期の遺構を検出している。この下に 7 b 層・7 c 層と続く。

7 b 層は粗粒砂～小礫が混じるにぶい黄橙色や明黄褐のシルト、7 c 層は粗粒砂～小礫が混じる褐灰色のシルト～極細粒砂で、両層合わせても厚い箇所でも 0.1 m ほどの厚さしかない。この 7 b 層・7 c 層も、西半部までは広がっておらず、東端から Y=-41.465 m あたりまでの分布であり、7 a 層とともに、上部の耕作に伴い削平されたものと考えられる。7 a 層やその直上の層からは、土師器、須恵器 (25～29)、埴輪 (24) などが出土している。すべて小片である。土師器には甕・壺・高杯・甕、須恵器には蓋杯 (26～28)・壺 (25)・甕・甕などがある。いずれも 6 世紀中頃から後半のものである。24 は円筒埴輪小片である。焼成は軟質。突帯は断面台形を呈する。このほかサヌカイトの剥片も 1 点出土している。7 b・7 c 層からは、土師器の小片が数点と、サヌカイトの石鏃 (30) が 1 点、剥片が 4 点出土している。

7 c 層の下には、7 d 層とした厚い砂礫が堆積する。砂礫の中にはラミナ堆積が観察でき、砂礫層の最下部には青灰色のシルトがたまると、氾濫堆積層であったことがうかがえる。厚さは、西端部で 0.2 m 程度であったものが、東に向かって 0.4～0.5 m と厚くなる。調査区が隔てているため検証はできていないが、

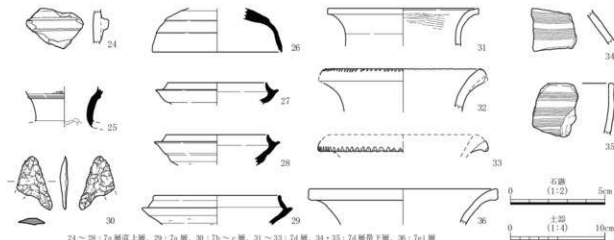


図 14 B c 区 7 a 直上層～7 e i 層出土遺物



写真3 A区・Ba区基本層序

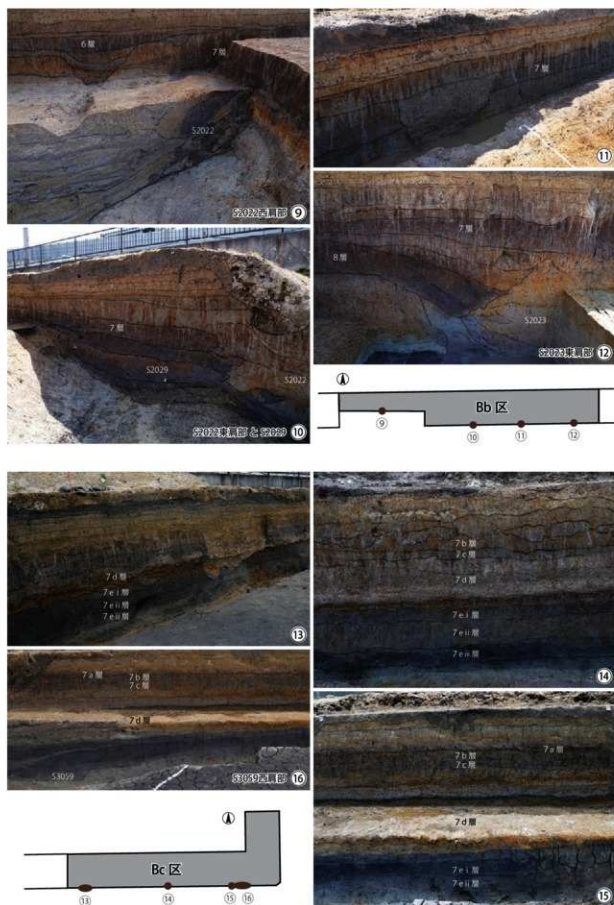


写真4 Bb区・Bc区基本層序

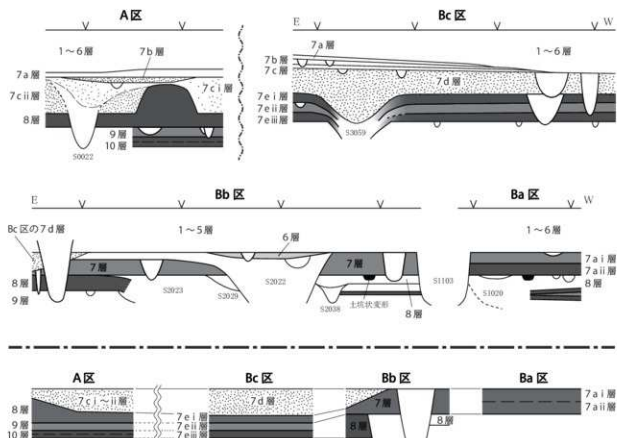


図 15 基本層序と各調査区の層序対応関係模式図

このBc区の7d層とA区の7e i・ii層とが対応しているのではないかと考えている。7d層からは弥生土器(31~35)、土師器の小片のほか、サヌカイトの剥片が1点出土している。弥生土器はいずれも中期前葉のものである。32と33の広口壺は、口縁部下端が割れた破片で、同一個体である可能性が高い。35は櫛描直線文を施す鉢。

砂礫層の下には7e層とした暗色層が堆積する。3層に分層でき、上から7e i・7e ii・7e iii層とした。7e i層は灰~暗灰色のシルトで、Bb区の7層に対応する。その下面の標高は、調査区西半部ではT.P.+8.6 m付近でほぼ平坦であるが、東半部は流路S3059に向かって徐々に下がる。中期前葉の弥生土器片(36)が僅かに出土している。7e iii層は灰色のシルト~極細粒砂で、7e ii層は、その両層に挟まれたやや色が淡い灰~黄灰色のシルト~極細粒砂である。この3層合わせた厚みは約0.3~0.4 mである。7e iii層下面はBb区の第9面に対応する面で、小ピットを多数検出した。

なお、調査区南壁寄りの2箇所を下層確認を行ない、断面の観察を行なった(図13の①・③)。結果、7e層より下層に大きく2つの暗色層が広がっていることを確認した。そのうち下部の褐灰色のシルト~粘土は、東に向かって徐々に上がっていることが明らかとなった。

註

- 1) 地層の土色・土質は、同じ内容を表していても、「ブロック」と表現するか「偽礫」と表現するか、「粗粒砂~小礫」とするか「小礫~粗粒砂」とするかなど、調査担当者によってその表現方法が微妙に異なっていた。本書では、例えば「微砂」と記録されていたものを「極細粒砂」へ、「粗砂混粘質細砂」と記録されていたものを「粗粒砂混じり粘土質細粒砂」へ書き換えるなど、編集段階である程度の統一をはかったが、「ブロック」と「偽礫」を統一するなど、それぞれの表現を大きく変更するような修正までは行わず、担当者の表現をできる限り活かし、採用した。これは第5章においても同様である。

第5章 各調査区の成果

第1節 A区の遺構と遺物

第1項 第7c面検出遺構

調査区西端に溜池の堤と溝（攪乱）がある。その東側で溝とピットを検出した。

S0001 調査区中央に位置する溝である。蛇行しながら調査区を南北に横断する。幅は0.6～1.35 m、深さは深い箇所では0.3 mを測る。埋土は、上層が粗～中粒砂が少量混じる灰黄褐色のシルト質粘土、下層は中粒砂が少量混じる褐灰～黒褐色の粘土である。7 b層の砂層がこの遺構を覆っていることを断面で確認した。

土師器小片が5点出土している。

S0002 調査区の中央、S0001の東側に位置する溝である。S0001と異なり直線的で、約22度西偏する。幅は0.2 m程度と細く、深さも約0.05 mと浅い。埋土は極粗～中粒砂を多く含む灰黄褐～暗褐色のシルト質粘土である。

S0003 調査区西半に位置するピットである。平面形は直径0.2～0.25 m程度の円形で、深さは0.11 mを測る。埋土は極粗～中粒砂を多く含む灰黄褐～黒褐色の粘土質シルトである。

S0004 調査区の西半、S0003の南西側に位置するピットである。平面形は長径0.45 m、短径0.35 mの楕円形で、深さは0.15 mを測る。埋土はS0003と同じである。

土師器小片が1点出土している。

S0005 調査区の西半、S0004の南西側に近接するピットである。平面形は直径0.4 m足らずの円形で、深さは0.11 mを測る。埋土はS0003と同じである。

S0006 調査区の西半、S0001の西側に位置する溝である。S0001と異なり直線的で、約22度東偏する。幅は約0.3～0.5 mで、深さは約0.05 mである。浅いため、途中で途切れ検出できない箇所がある。埋土は粗～中粒砂が混じるにぶい黄褐色の粘土質シルトや粗～中粒砂である。

土師器小片が1点出土している。

S0007 調査区の中央、S0001と0002との間に位置するピットである。平面形は直径0.25～0.3 m程度



図16 A区第7c面検出遺構全体平面

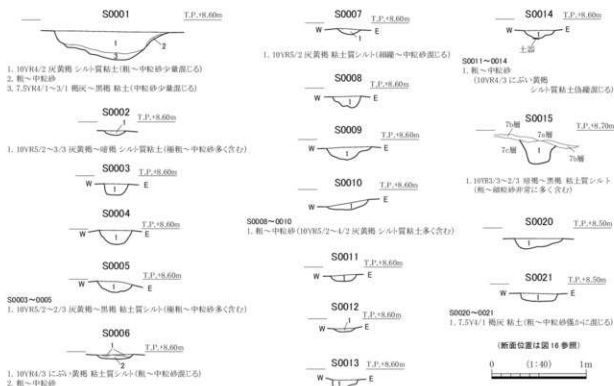


図 17 A区第7c面検出遺構断面

の円形で、深さは0.05 mを測る。埋土は細砂～中粒砂が混じる灰黄褐色の粘土質シルトである。

S0008 調査区の中央、S0007の南側に位置するピットである。平面形は長径0.4 m、短径0.3 mの楕円形で、深さは0.12 mを測る。埋土は灰黄褐色のシルト質粘土を多く含む粗～中粒砂である。

S0009 上記S0008の西側に近接するピットである。平面形は直径0.5 m足らずの円形で、深さは0.13 mを測る。埋土はS0008と同じである。

S0010 上記S0009の西側に近接するピットである。S0001と重複し、S0001を切る。平面形は直径0.4 m強の円形で、深さは0.07 mを測る。埋土はS0008と同じである。

S0011 調査区の東半、南壁際に位置するピットである。平面形は直径0.3 m足らずの円形で、深さは0.06 mを測る。埋土はにぶい黄褐色のシルト質粘土偽礫が混じる粗～中粒砂である。

S0012 上記S0011の南側に近接するピットである。平面形は直径約0.2 mの円形で、深さは0.03 mを測る。埋土はS0011と同じである。

S0013 上記S0012の南側に近接するピットである。平面形は直径0.3 m足らずの円形で、深さは0.1 mを測る。埋土はS0011と同じである。

S0014 調査区の南壁際、S0002の南端部に近接するピットである。平面形は長径0.35 m、短径0.28 mの楕円形で、深さは0.09 mを測る。埋土はS0011と同じである。

底から土師器の小片が1点出土している。

S0015 調査区の西半、南壁際に位置するピットである。調査区南壁にかかっていた遺構で、平面的な検出はできていない。直径は約0.4 mで、深さは0.24 mを測る。埋土は粗～細粒砂を非常に多く含む暗褐色～黒褐色の粘土質シルトである。7 b層の砂層がこの遺構を覆っていることが断面で確認できた。

S0020 調査区南東隅に位置する土坑である。7 c層上面では、認識できなかったが、7 c層上半の掘削途中で、7 c層上面から掘り込まれた遺構であったことが確認できた。曲がった短い溝状の土坑で、幅は約

0.5～0.6 mを測る。深さ約0.1 mで、埋土は粗～中粒砂が僅かに混じる褐灰色の粘土である。

S0021 上記 S0020 の北側に位置するビットである。7 c 層上面では未検出であったが、S0020 と同じくこの面に伴う遺構である。平面形は直径 0.4 m 足らずの円形で、深さは 0.08 m を測る。埋土は粗～中粒砂が僅かに混じる褐灰色の粘土である。

土師器小片が 1 点出土している。

第 2 項 第 8 面検出遺構

調査区の東西両端で流路や溝、ビットを検出した。

S0016 西端攪乱の西肩部に位置する溝である。南西―北東方向に斜行する。東端は攪乱によって削られ、西端は後述の S0017 と重複し、S0017 に切られる。幅は約 0.4～0.5 m で、深さ 0.1 m 弱である。埋土は極粗～中粒砂を非常に多く含む灰黄褐～にぶい黄褐色の粘土質シルトである。

土師器小片が 1 点出土している。

S0017 調査区南西隅に位置する流路である。幅は 3 m 以上あるが、西肩は未検出。検出面から約 0.8 m 掘り下げたが、底は検出できなかった。埋土は細礫～中粒砂や褐灰～灰黄色の細粒砂～シルトなどで、これより下層にも、厚く砂が堆積する。

弥生時代後期の壺と思われる底部片（37）が 1 点出土している。外面は磨滅するが、辛うじてハケ目が確認できる。

S0019 調査区西端に位置するビットである。この面に伴う遺構と考えているが、攪乱の法面で検出しているため、正確な所属面は明らかでない。平面形は直径 0.51～0.55 m の円形で、深さは 0.45 m を測る。埋土は黒褐色の粘土礫が混じる黄褐～暗灰黄色の極粗～中粒砂や、黒褐色の粘土、粗～中粒砂が混じる黒褐色のシルト質粘土などである。

底から庄内式甕（38）がほぼ完形な状態で出土した。ハケ調整の前に施された右上がりのタタキは、ハケ目と誤認するほど非常に細かい。

S0022 調査区東端に位置する溝である。やや西偏する南北方向の溝で、D 2-1-2 調査の 7 a ii 層下面で検出した S0093 へとつながる溝と考えている。この遺構の上部の 7 c 面は、砂やシルト・粘土が折り重なるように複雑に堆積しており、遺構の検出が非常に困難な状況であった。そのため、遺構はないだろうと

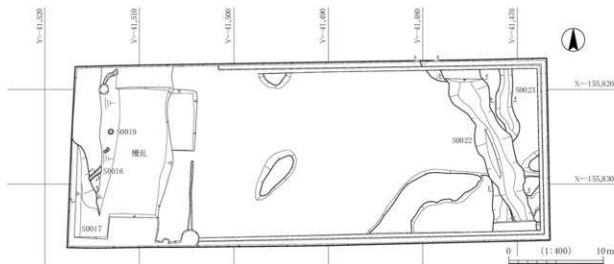


図 18 A 区第 8 面検出遺構全体平面

思い込み、調査では7c層を除去した第8面でこの溝を検出しているが、調査区北壁の断面を観察すると、溝東肩はやはり立ち上がりが不明瞭であったが、西肩部は明らかに7c層の上面から掘り込まれているように観察できた(図19、写真図版4-1)。したがって、本来はこの第8面の遺構ではなく、第7c面で検出すべき遺構であったと考えている。

第8面での溝幅は2.2~4.2m、深さは、南半では第8面から約0.9~1.0mで底に至るが、北半では、湧水のためぬかるみ、1.0m掘っても底を確認することができなかった。南端部では2条の溝が重複しているように、高低差0.3m程度の段ができていた。埋土は細礫~細粒砂、灰~黒色の粘土偽礫の混合土、細

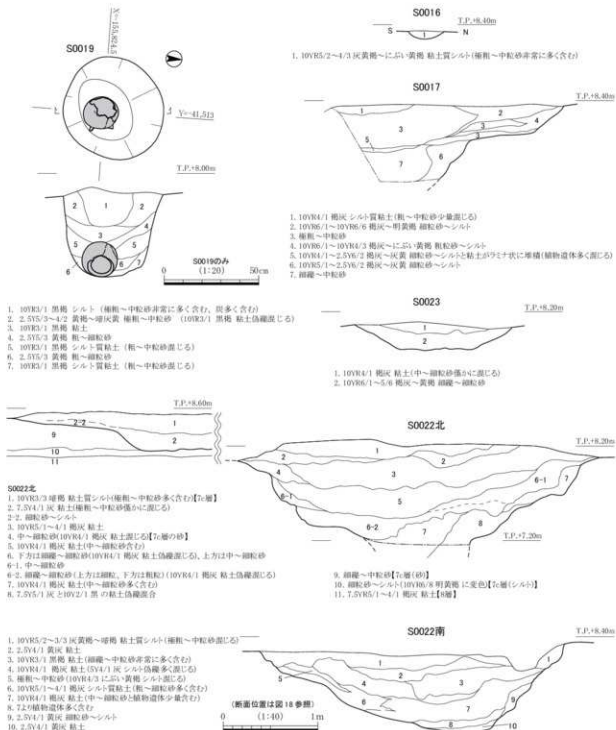


図19 A区第8面検出遺構平面・断面

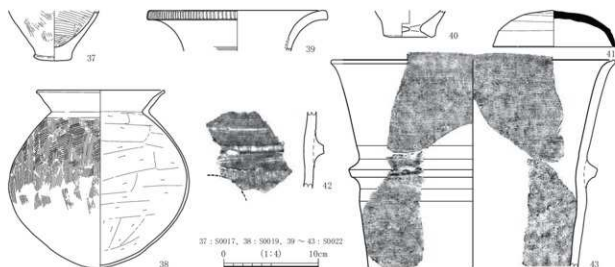


図 20 A区第8面検出遺構出土遺物

礫～中粒砂を多く含む黒褐色粘土、砂粒やシルト偽礫・植物遺体を多く含む褐灰色粘土、黄灰色粘土などである。

弥生土器（39・40）、須恵器（41）、埴輪（42・43）などが出土している。39は弥生時代中期前葉の広口壺。40は有孔鉢。39と同時期か。41は6世紀後半の杯蓋。42・43は5世紀前半の円筒埴輪。両者ともに須恵質で、外面には赤色顔料の塗布がみられる。タテハケ後、ヨコハケを施すが、静止の痕跡は認められない。突帯は断面台形である。42には透孔が認められる。43はやや開き気味の口縁部片で、端部も細く外反させる。内面も、口縁端部から約11cm下までヨコハケを施す。外面のハケー単位の幅は8cm以上あり、一単位の中でも下方ほど目が細かい。

S0023 調査区の北東隅、S0022の東側に位置する溝である。S0022から分岐し、北へのびる。幅は約1.3～1.8mで、深さは深い箇所では0.3m程度であるが、北壁際では非常に浅く、輪郭が不明瞭となる。S0022に比べ浅く、人為的な遺構ではない可能性が高い。S0022にも伴わない7c ii層形成時にできた溝状の窪みと考えた方がよいかもしれない。埋土は中～細粒砂が僅かに混じる褐灰色粘土と細礫～細粒砂であるが、これは7c ii層が流れ込むように堆積したものである。

第3項 第9面検出遺構

もっとも遺構密度が高い遺構面である。竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟のほか、多くの土坑やピット、溝を検出した。

S0024 西端攪乱の東肩部に位置する土坑である。平面形は長径1.7m、短径1.25mのやや長い五角形で、深さは平面規模の割に浅く、0.1m程度である。埋土は粗～中粒砂が混じる黒褐色の粘土で、炭も多く含んでいる。

弥生土器（44～50）が出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。44～46は甕、47～49は壺、50は高杯、あるいは台付鉢の脚部。

S0025 調査区の西半、S0024の東側に位置する土坑である。S0026とS0027と重複し、両者に切られる。平面形は楕円形で、短径は約1.7m、長径は約2.7mに復元できる。深さは0.27mで、埋土はオリブ灰色の粘土偽礫が混じる黒色粘土である。

弥生土器（51～55）が出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。51は壺の頸部片で、

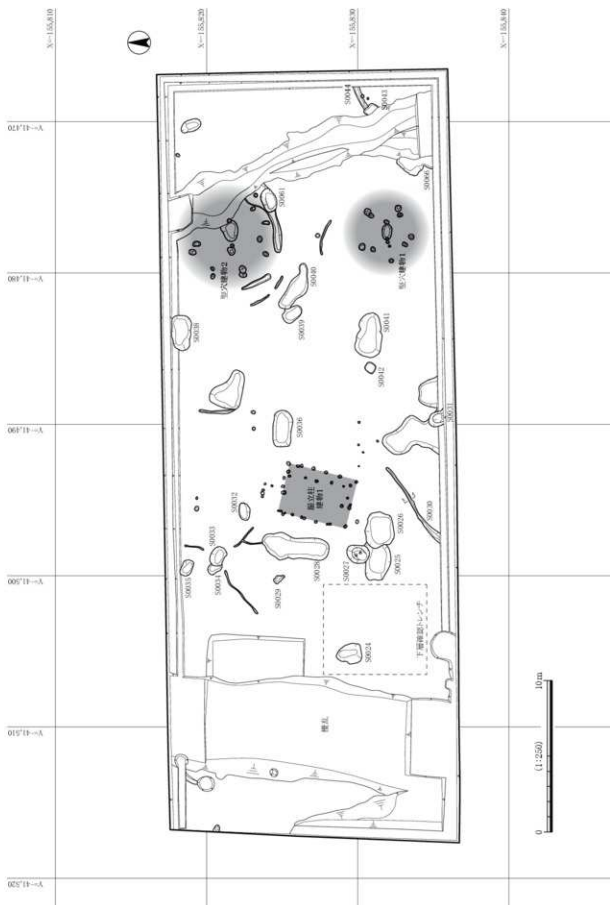


図 21 A区第9面検出遺構全体平面

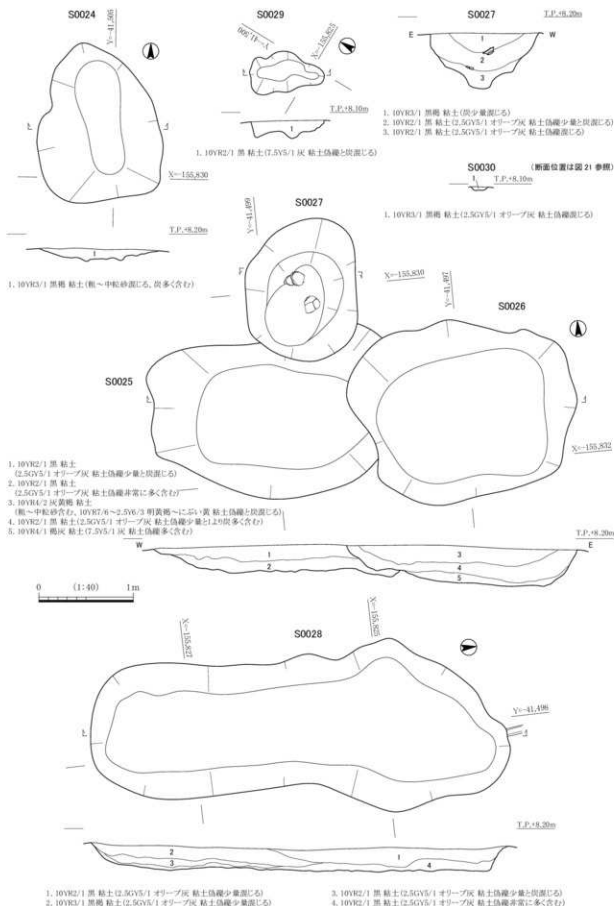


図 22 A 区第 9 面検出遺構平面・断面 1

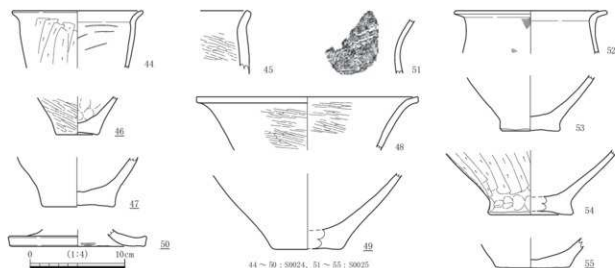


図 23 A区第9面検出遺構出土遺物1

非常に雑な櫛描波状文と直線文が施されている。52～54は甕、55は壺と思われる。54の外面は縦方向のヘラケズリである。

S0026 S0025の東側に重複する土坑で、S0025を切る。平面形は長径2.45m、短径1.9mの隅丸長方形で、深さは0.4mを測る。埋土は下層から、灰色の粘土偽礫を多く含む褐灰色粘土、オリーブ灰色の粘土偽礫と炭を多く含む黒色粘土、粗～中粒砂や炭・明黄褐～にぶい黄色の粘土偽礫が混じる灰黄褐色の粘土である。

弥生土器片が多数と、サヌカイトの剥片（72・73）が2点出土している。

S0027 S0025の北側に重複する土坑である。平面的にも、また南北方向に設けた断面の観察によってもS0025を切っていることを確認した。平面形は長径1.5m、短径1.15mの楕円形で、深さは0.6mを測る。埋土はオリーブ灰色の粘土偽礫や炭が混じる黒褐～黒色の粘土である。

弥生土器（56～60）と、サヌカイトの剥片（74～76）が3点、敲石（77・78）が出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。56～58は壺、59は甕、あるいは鉢か。60は鉢。内外面に密にヘラミガキを施すものが多い。77は端部に敲打痕がみられる。78には顕著な敲打痕は認められないが、両者ともに被熱している。

S0028 調査区の西半、S0027の北側に近接する土坑である。平面形は長径4.4m、短径1.3～1.8mの長い楕円形で、深さは0.25mを測る。埋土はオリーブ灰色の粘土偽礫や炭が混じる黒褐～黒色の粘土である。

弥生土器（61～66）が多数と、サヌカイトの剥片（79）が1点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。61は甕で、外面は縦方向のヘラケズリ。61以外は広口壺。65は横方向のヘラミガキの後、肩部に5条の櫛描直線文を施す。そのうちの下から2条目には、一部に扇形文を入れ、疑似流水文とする。もっとも上の直線文から約4cm隔てて、頸部にも櫛描直線文を施すが、その間には、直線文に先行する縦方向の櫛描波状文とヘラミガキが認められる。ただしこれは、直線文の間隔全体にみられるものではなく、一部分にのみみられる施文である。

S0029 調査区の西半、S0028の西側に近接する土坑である。平面規模は長径0.8m、短径約0.4mで、第9面検出の土坑の中ではもっとも小さい。平面形は不整形で凹凸がある。深さは約0.1～0.2mと、底にも凹凸がある。埋土は灰色の粘土偽礫と炭が混じる黒色の粘土である。

弥生土器小片が1点出土している。

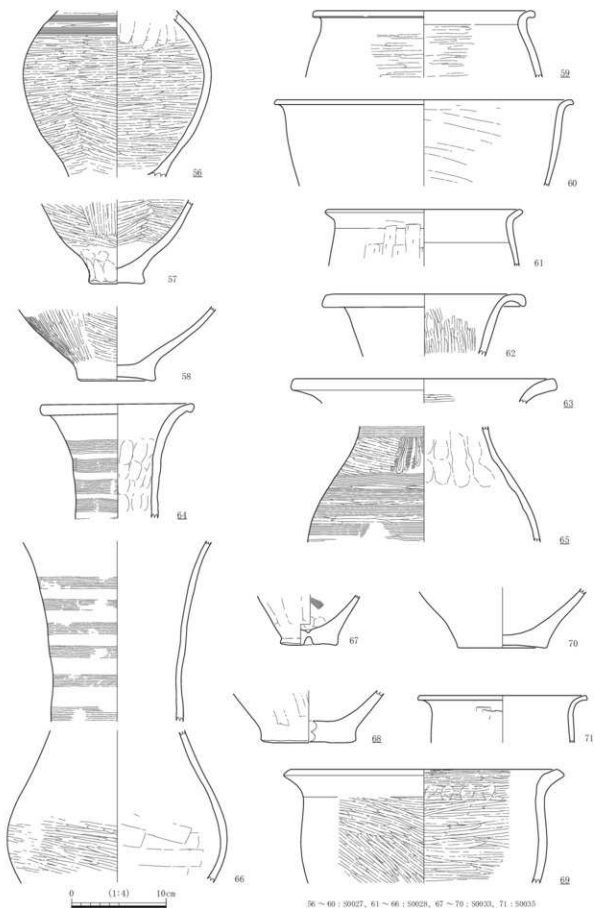


图 24 A区第9面検出遺構出土遺物 2



図 25 A区第9面検出遺構出土石器 1

S0030 調査区の西半、S0026の南側に近接する溝である。南西―北東方向に斜行する。幅は0.2 m程度であるが、南壁際で若干広がりが約0.5 mとなる。深さは0.05 m足らずで浅い。埋土はオリブ灰色の粘土偽礫が混じる黒褐色粘土である。

弥生土器小片が5点出土している。

S0031 調査区の中央、南壁際に位置する土坑である。周囲に深さ0.1 m足らずの浅い落ち込みがあり、その埋土除去後に検出した。平面形はおそらく楕円形を呈すると推定できるが、南側が調査区外のため明らかでない。平面規模は短径約0.95 m、長径1 m以上である。深さは約0.45 mで、埋土は灰色の粘土偽礫が混じる黒色粘土や、炭が混じる褐灰～黒色の粘土である。

弥生土器小片が4点出土している。

S0032 調査区の西半、S0028の北東側に近接する土坑である。平面形は長径1.15 m、短径0.7 mの楕円形で、深さは0.05 mを測る。埋土はオリブ灰色の粘土偽礫と炭が混じる黒色の粘土である。

弥生土器小片が1点出土している。

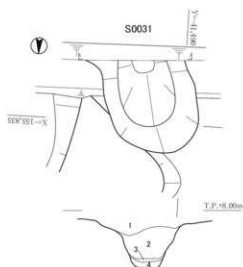
S0033 調査区の西半、S0028の北側に近接する土坑である。下記S0034と重複し、S0034を切る。平面形は長径1.3 m、短径0.9 mの楕円形で、深さは0.4 mを測る。埋土はオリブ灰色の粘土偽礫や炭・中粒砂などが混じる黒褐～黒色の粘土である。

弥生土器（67～70）が多数と、サヌカイトの剥片（80）が1点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。67は鉢か。底部の内側と外側から穿孔が試みられた痕跡がある。69の鉢は内外面共に密なヘラミガキを施す。

S0034 上記S0033の西側に重複する土坑で、S0033に切られる。平面形は長径1.1 m、短径0.6 mの楕円形で、深さは約0.2 mを測る。埋土はオリブ灰色の粘土偽礫や炭が混じる黒色の粘土である。

弥生土器小片と、サヌカイトの剥片（81）が1点出土している。

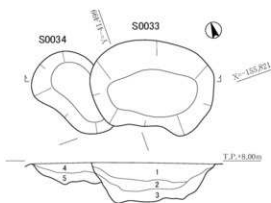
S0035 調査区の西半、S0034の北側に近接する土坑である。平面形は長径1.15 m、短径0.7 mの楕円形で、深さは0.26 mを測る。埋土は、下層が炭を非常に多く含む黒色粘土で、上層が炭を多く含む粗～中粒砂混じりの褐灰色粘土である。



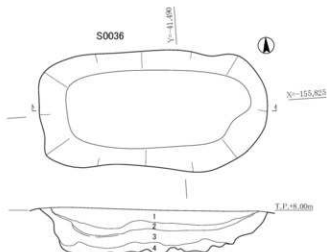
1. 10VR4/1 焼灰 粘土 (7.5V5/1 灰 粘土偽縁面じる) 【落ち込み】
2. 10VR4/1 焼灰 粘土 (炭炭じる)
3. 10VR1,2/1 黒 粘土 (炭炭家に多く含む)
4. 10VR2/1 黒 粘土 (7.5V5/1 灰 粘土偽縁少量面じる)



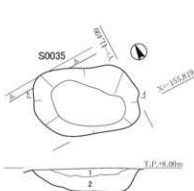
1. 10VR2/1 黒 粘土 (2.5GV5/1 オリーブ灰 粘土偽縁少量と炭炭じる)



1. 10VR3/1 黒焼 粘土 (炭炭多く含む、中粒砂炭じる)
2. 10VR3/1 黒焼 粘土 (1より炭炭多く含む、中粒砂炭じる)
3. 10VR2/1 黒 粘土 (2.5GV5/1 オリーブ灰 粘土偽縁少量と炭・灰へ中粒砂炭じる)
4. 10VR2/1 黒 粘土 (2.5GV5/1 オリーブ灰 粘土偽縁少量と炭炭じる)
5. 10VR2/1 黒 粘土 (2.5GV5/1 オリーブ灰 粘土偽縁非常に多く含む)

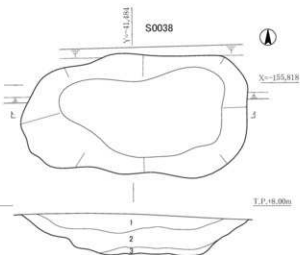


1. 10VR5/1~4/2 焼灰~灰炭焼 粘土 (炭・灰へ中粒砂少量面じる)
2. 10VR3/1 黒焼 粘土 (7.5V5/1~2.5GV5/1 灰へオリーブ灰 粘土偽縁多く含む、炭炭じる)
3. 10VR2/1 黒 粘土 (7.5V5/1~2.5GV5/1 灰へオリーブ灰 粘土偽縁と炭炭非常に多く含む、砂に上面に炭炭い)
4. 10VR3/1 黒焼 粘土 (炭へ中粒砂多く含む、炭炭じる)



1. 10VR4/1 焼灰 粘土 (炭炭多く含む、炭へ中粒砂炭じる)
2. 10VR2/1 黒 粘土 (炭炭非常に多く含む)

0 (1:40) 1m



1. 10VR4/1 焼灰 粘土 (炭炭じる)
2. 10VR2/1 黒 粘土 (炭炭非常に多く含むラミナ状に堆積、10VR5/3 により炭炭・灰へ偽縁面じる)
3. 10VR3/1 黒焼 粘土 (2.5GV5/1 オリーブ灰 粘土偽縁多く含む)

図 26 A区第9面検出遺構平面・断面2

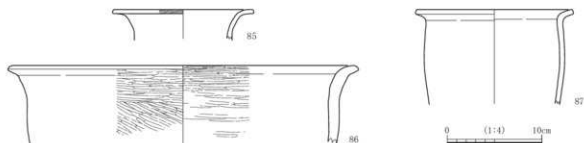


図 27 S0036 出土遺物

弥生土器(71)が多数と、サヌカイトの剥片(82・83)が2点、敲石(84)が1点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。71は甕。84は端部に敲打痕がみられる。

S0036 調査区中央に位置する土坑である。平面形は長径 2.4 m、短径 1.2 ~ 1.25 m の楕円形で、深さは深い箇所 0.5 m を測る。埋土は 4 層に分層できる。上から、炭と粗～中粒砂が少量混じる褐灰～灰黄褐色粘土、灰～オリーブ灰色の粘土礫を多く含む炭混じりの黒褐色粘土、灰～オリーブ灰色の粘土礫と炭を非常に多く含む黒色粘土、粗～中粒砂を多く含む炭混じりの黒褐色粘土である。

弥生土器(85 ~ 87)が多数と、サヌカイト製の石錐(105)が1点、剥片(88 ~ 104)が17点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。85は広口壺で、86・87は甕。85の口縁端部には僅かにハケ目が認められる。

S0038 調査区の中央、北壁際に位置する土坑である。平面形は長径 2.4 m、短径 1.25 ~ 1.3 m の楕円形で、深さは 0.43 m を測る。埋土は 3 層に分層できる。上から、炭が混じる褐灰色粘土、炭を非常に多く含む、にぶい黄褐色のシルト礫が混じる黒色粘土、オリーブ灰色の粘土礫を多く含む黒褐色粘土である。

弥生土器(106 ~ 109)が多数と、サヌカイトの剥片(119 ~ 123)が5点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。106は甕、107は高杯、108・109は壺である。108の色調はにぶい黄褐色(10YR7/2 ~ 7/3)で、肩部に櫛描波状文と刺突文を交互に配す。内面は筋が残る強いナデである。他地域からの搬入品か。109も肩部の破片で、縦方向のハケの後、櫛描波状文、扇形文、直線文の施文がみられる。扇形文は波状文よりも後の施文で、2単位を合わせて円形状の文様とする。

S0039 調査区の東半、S0038の南側に位置する土坑である。下記S0040と一部重複するが、接する程度の僅かな重なりであり、先後関係は明らかでない。平面形は長径 1.4 m、短径約 0.85 m の楕円形で、深

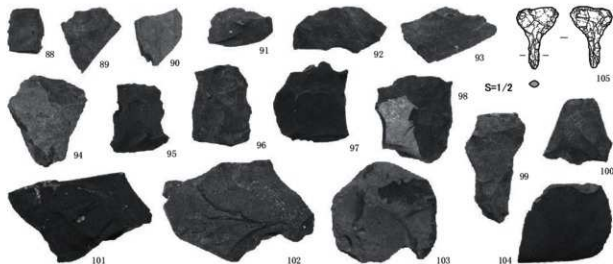


図 28 S0036 出土石器

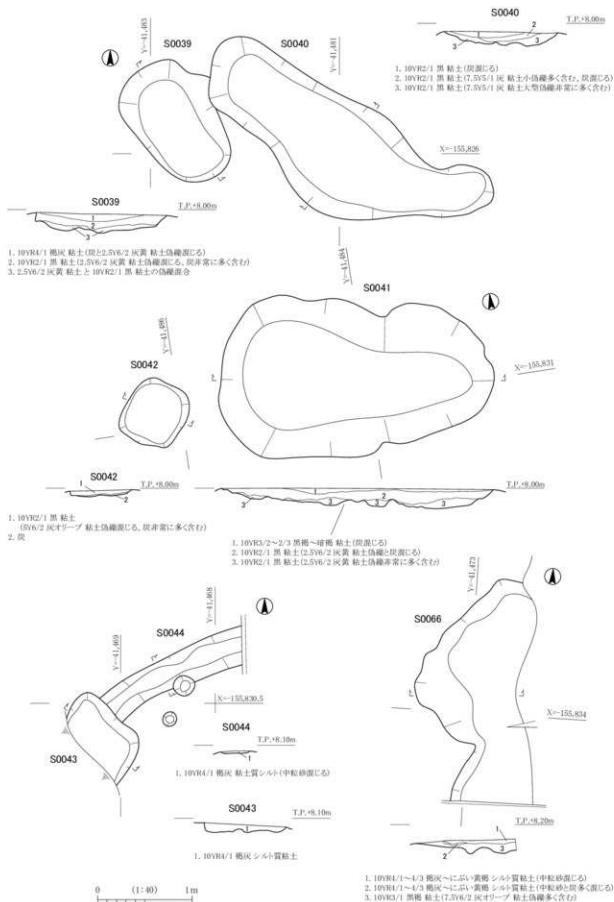


図 29 A区第9面検出遺構平面・断面3

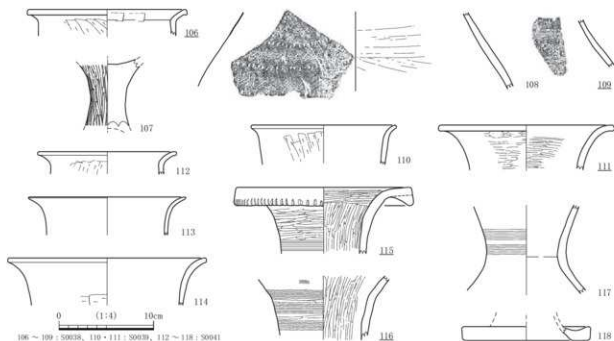


図 30 A区第9面検出遺構出土遺物3

さは0.2 mを測る。埋土は、最下層が灰黄色粘土と黒色粘土の偽礫混合土で、その上が灰黄色の粘土偽礫や炭が混じる褐灰～黒色の粘土である。

弥生土器（110・111）と、サヌカイトの剥片（124～126）が3点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。110は甕で、外面は縦方向のヘラケズリ。111は広口壺。内外面共に横位のヘラミガキである。

S0040 上記S0039の東側に接する土坑である。平面形は歪んだ長い弧形を呈しており、また底も西半が若干深いことから、二つの遺構が重複していた可能性が高い。平面規模は最大幅1.2 m、長さ3.3 mで、中央部では深さは0.15 mを測る。埋土は灰色の粘土偽礫を多く含む炭混じりの黒色粘土である。

弥生土器片が多数出土している。ほかの土坑出土の土器と同じ中期前葉のもので、櫛描直線文を施す破片が認められる。

S0041 調査区の東半、S0039の南側に位置する土坑である。平面形が僅かにくびれた弧形を呈していたことから、S0040と同様に二つの遺構が重複していると考えられたが、縦断面には、時期差を示す堆積は認められなかった。平面規模は幅1.4～1.7 m、長さ2.9 mで、深さは0.2 mを測る。埋土は炭が混じる黒褐～暗褐色の粘土や、灰黄色の粘土偽礫を多く含む黒色粘土などである。

弥生土器（112～118）が多数と、サヌカイトの剥片（127・128）が2点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。112～114は甕、115～117は広口壺、118は高杯である。115は内外面ともに密なヘラミガキで、頸部には櫛描直線文、口縁部下端にはキザミを施す。



図 31 A区第9面検出遺構出土石器2

S0042 調査区の東半、S0041 のすぐ西側に近接する土坑である。平面形は一辺 0.6 ～ 0.7 m の隅丸方形で、深さは 0.06 m を測る。埋土は炭を多く含む、灰オリーブ色の粘土偽礫混じりの黒色粘土で、底には薄く炭が堆積する。

S0043 調査区南東隅、S0022 の東肩に重複する土坑である。S0022 によって西側を欠くが、おそらく一辺 0.9 m 程度の隅丸方形を呈していたと推定できる。深さは 0.1 m で、埋土は褐灰色のシルト質粘土である。

S0044 上記 S0043 の東側に重複する溝である。断面での検証は行っていないが、平面検出の段階では S0043 が切っていた。幅は 0.3 ～ 0.4 m で、西半部の深さは断面図のとおり 0.05 m 以下と非常に浅いが、東半部は深さ 0.15 m 程度と極端に深くなる。遺構が重複していたのかもしれない。西半部の埋土は中粒砂が混じる褐灰色の粘土質シルトである。

S0047 下記竪穴建物 1 の中央土坑 S0046 の西端に重複するピットであるが、竪穴建物に伴うものかは不明。S0046 埋土上面から掘り込まれていることが断面観察から明らかである。平面形は直径 0.18 ～ 0.2 m の歪んだ円形で、深さは 0.15 m を測る。埋土は灰黄色粘土と褐灰～黒褐色粘土の偽礫混合土である。

サヌカイトの剥片（137 ～ 139）が 3 点出土している。

S0061 下記竪穴建物 2 の南側壁溝 S0063 と重複する土坑である。この付近は常に遺構面に水が浮いた状態で非常にぬかるんでいたため、S0063 との先後関係は検証できていない。平面形は長径 1.55 m、短径 1.0 m の楕円形で、深さは 0.23 m を測る。埋土は最下層にオリーブ灰色粘土と黒色粘土の偽礫混合土があり、その上が炭を含む褐灰色や黒褐色・黒色の粘土の互層となる。

弥生土器（148 ～ 150）と、サヌカイトの剥片（167）が 1 点出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。148 ～ 150 は甕。148 の内面には指頭圧痕が無数に残る。外面は目が浅く不明瞭なハケで、頸部は内外面ともにヨコナデとする。また口縁端面にはハケ調整用の板状工具による圧痕を刻む。149 の外面はヘラケズリで、150 の外面は縦位のハケ。

S0066 調査区の南東隅、S0022 の南端西肩に重複する土坑である。S0022 によって東側を欠くため、全体の形状や規模は不明。残存東西幅 1.1 m、南北長 2.35 m で、深さは深い箇所 0.15 m を測る。埋土は中粒砂と炭が混じる褐灰～ぶい黄褐色のシルト質粘土や、灰オリーブ色粘土の偽礫を多く含む黒褐色粘土ある。

弥生土器小片が 3 点と、サヌカイトの剥片（169 ～ 171）が 3 点出土している。

S0080 下記竪穴建物 2 の中央土坑 S0060 の西端に近接するピットであるが、竪穴建物に伴うものかは不明。平面形は直径約 0.25 m の円形で、深さは 0.15 m を測る。埋土はオリーブ灰色の粘土偽礫が混じる黒色粘土である。

サヌカイト製の石錐（186）が 1 点と、剥片（187・188）が 2 点出土している。

竪穴建物 1 調査区南東隅に位置する。平面形はおそらく直径 5 m 程度の円形になると推定できるが、周囲の壁溝が残っていないため正確には明らかでない。中央土坑（S0046）を有する建物で、4 本主柱（S0053・S0054・S0055・S0056）のものから、5 本主柱（S0048・S0049・S0050・S0051・S0052）へと建て替えが認められる。4 本主柱の柱穴は、平面形が 0.25 × 0.35 m 程度の楕円形で、深さは 0.2 ～ 0.3 m 程度である。柱間寸法はどれも 2.1 m であり、S0046 を中心にほぼ正方形に配置されている。5 本主柱の段階でも、柱穴は S0046 を中心に整った五角形に配置されている。その柱間寸法はいずれも 2.1 m である。柱穴は、S0050 以外は 4 本主柱のものよりはやや大きく、直径 0.35 ～ 0.45 m の円形で、深さは 0.3 ～ 0.45 m を測る。4 本主柱時の柱穴 S0056 と 5 本主柱時の柱穴 S0052 が唯一重複しており、この断面観察により、S0052 が切っていること、つまり 5 本主柱の柱穴が 4 本主柱の柱穴を切っていることが確認でき

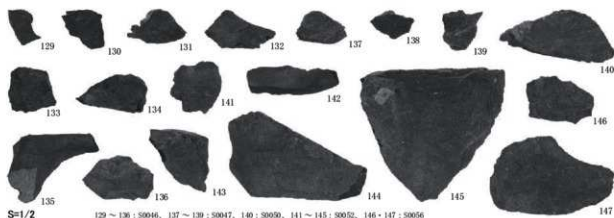


図 33 竪穴建物 1 周辺遺構出土石器

た。中央の土坑 S0046 の平面形は、長径約 1.0 m、短径 0.62 m の楕円形で、深さは 0.17 m を測る。埋土中間層には炭が約 0.05 m の厚さで堆積していた。

中央土坑 S0046 からは弥生土器小片と、サヌカイトの剥片（129 ~ 136）が 8 点出土している。柱穴 S0050 からはサヌカイトの剥片（140）が 1 点、S0052 からは弥生土器小片 3 点と、サヌカイトの剥片（141 ~ 145）が 5 点、S0056 からはサヌカイトの剥片（146・147）が 2 点出土している。

竪穴建物 2 調査区の北東隅、竪穴建物 1 の北側に約 5 m 隔てて位置する。建物の東側約 3 分の 1 が S0022 によって削られているため、全容は明らかでないが、平面形は直径約 7 × 8 m の楕円形に復元できる。周囲には幅 0.3 ~ 0.4 m の壁溝（S0062・S0063）がめぐるが、検出できたのは、その一部のみである。さらにその外側からも、湾曲する幅 0.1 m 程度の細い溝（S0067）を検出しているが、こちらは周堤の外側に設けられていた溝であろうか。中央土坑（S0060）を有する建物で、規模を縮小する建て替えが認められる。当初はおそらく 8 本、ないしは 9 本主柱（S0073・S0074・S0075・S0076・S0077・S0078）であったが、7 本主柱（S0068・S0069・S0070・S0071・S0072）へと建て替えられている。これは唯一新旧の柱穴が重複する S0070 と S0076 の断面観察によって確認できた。柱穴の平面形は、新旧ともに長径 0.3 ~ 0.4 m、短径 0.2 ~ 0.25 m 程度の楕円形で、深さは竪穴建物 1 よりも深く、S0074 のように 0.6 m 以上あるものもある。柱間寸法も新旧ほぼ同じで、2.0 ~ 2.1 m であるが、S0069 と S0070 間のみ 2.2 m と僅かに広い。中央の土坑 S0060 の平面形は、長径約 1.5 m、短径 1.0 ~ 1.1 m のやや歪んだ楕円形で、深さは 0.25 m を測る。埋土下層には炭が約 0.05 m の厚さで堆積していた。

中央土坑 S0060 からは弥生土器（151）と、サヌカイトの剥片（154 ~ 166）が 13 点出土している。151 は中期前葉の甕底部片である。壁溝 S0063 からは弥生土器片が 3 点と、サヌカイトの剥片が 1 点出土している。柱穴 S0068 からは弥生土器（152）と、サヌカイトの剥片（172 ~ 175）が 4 点出土している。152 は中期前葉の壺底部片で、内外面ともにヘラミガキを施す。このほか、S0069 からは弥生土器小片が 2 点、S0071 からは弥生土器小片と、サヌカイトの剥片（176 ~ 178）が 3 点、S0072 からは弥生土器

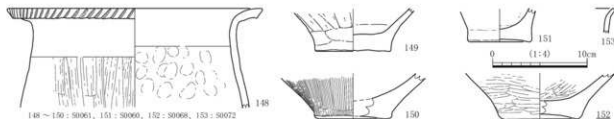


図 34 竪穴建物 2 周辺遺構出土遺物

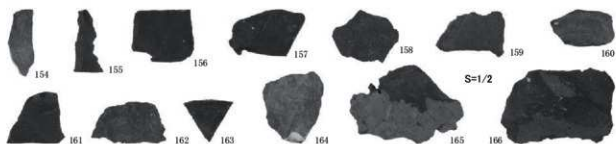
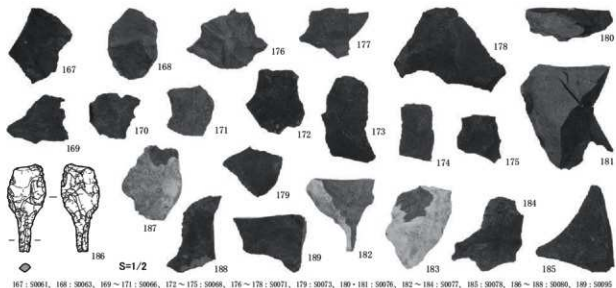


図 35 S0060 出土石器



167 : S0061, 168 : S0063, 169 ~ 171 : S0066, 172 ~ 175 : S0069, 176 ~ 178 : S0071, 179 : S0073, 180 ~ 181 : S0076, 182 ~ 184 : S0077, 185 : S0078, 186 ~ 188 : S0080, 189 : S0095

図 36 竪穴建物 2・掘立柱建物 1 周辺遺構出土石器

(153) が 1 点出土している。153 は中期前葉の甕口縁片である。また、S0073 からはサヌカイトの剥片 (179) が 1 点、S0076 からは弥生土器小片 1 点と、サヌカイトの剥片 (180・181) が 2 点、S0077 からはサヌカイトの剥片 (182 ~ 184) が 3 点、S0078 からはサヌカイトの剥片 (185) が 1 点出土している。

掘立柱建物 1 調査区中央に位置する。桁行 5 間 (約 4.6 m)、梁間 2 間 (約 3.2 m) の小規模な南北棟建物で、約 14 度東偏する。切妻造りの建物で、東の側柱は、南から S0089・S0102・S0101・S0100・S0099・S0098、西の側柱は南から S0091・S0092・S0093・S0094・S0095・S0096 であるが、東の側柱筋より 0.5 ~ 0.7 m 内側にもう 1 条の柱列が認められる。S0107・S0106・S0105・S0104・S0103 を柱穴とする 4 間の柱列であるが、外側の柱筋とは柱間がまったく揃っておらず、また短いことから、東の側柱のみ建て替えた、あるいは、東面のみ廂が付随していたとは考え難い。柱穴も浅いことから、建物の中を仕切のような簡易な間仕切りが設けられていたのではないかと考えている。妻柱は南面が S0090、北面が S0097 であるが、両者ともに柱間中央ではなく、やや西側に偏った位置に設けられている。柱穴はいずれも小さな円形で、柱間寸法はどれも揃っておらず、0.8 ~ 1.15 m の範囲でまちまちである。深さも S0091・S0102 のように深く、0.3 m 以上もあるものから、S0092・S0093 のように 0.1 m 程度の浅いものまでさまざまである。建物の北面西寄りには、L 字状の柱列が付随する。入口などの施設であろうか。その柱穴の規模は建物の柱穴とほぼ同じで、深さも、深いものでも 0.1 m 程度である。

S0095 からはサヌカイトの剥片 (189) が 1 点出土している。また、北西隅の S0096 に近接する S0115 からは、弥生土器片が 1 点出土している。

〈現地調査担当：伊藤〉

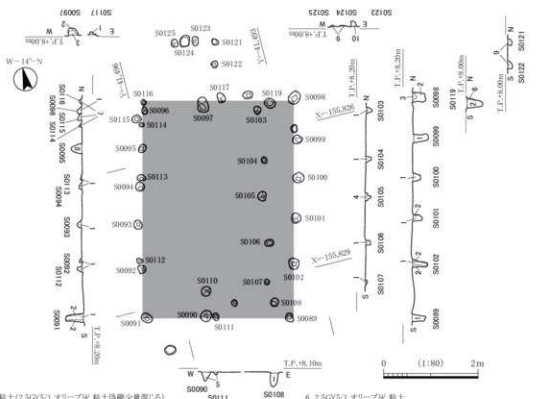


図 37 A区掘立柱建物1平面・断面

第2節 B a区の遺構と遺物

第1項 第7 a面検出遺構

流路や溝のほか、僅かに土坑やピットを検出したが、遺構は稀薄である。

S1001 調査区北西隅に位置する溝状の落ち込みである。幅は0.7～0.9 m程度であるが、北壁際では2 m程度にまで広がる。深さは非常に浅く、0.05 m程しかない。埋土は炭化物や小礫が混じる褐灰色の粘土質細粒砂である。

土師器(190)のほか砥石の剥離片が出土している。土師器は弥生形甕など古墳時代前期のものである。190は布留式期前葉の複合口縁型で、内外面は横位のヘラミガキである。

S1002 調査区の北西隅、S1001の東側に隣接するピットである。平面形は直径約0.4 mのやや歪んだ円形で、深さは0.06 mを測る。埋土は小礫混じりの褐灰色粘土質細粒砂や、粗粒砂混じりの粘土質細～中粒砂である。

土師器小片が2点出土している。

S1003 調査区の北西隅、S1001の西側に隣接するピットである。平面形は直径約0.4 mのやや歪んだ円形で、深さは0.08 mを測る。埋土は粗粒砂が混じる灰褐色の粘土質細粒砂である。

土師器小片が出土している。

S1004 調査区の北西隅、S1001の西側に隣接するピットである。下記S1005と重複し、S1005を切る。平面形は長径約0.5 m、短径0.35 mの楕円形で、深さは0.05 mを測る。埋土は細粒砂が混じる褐灰色の粘土質細粒砂である。

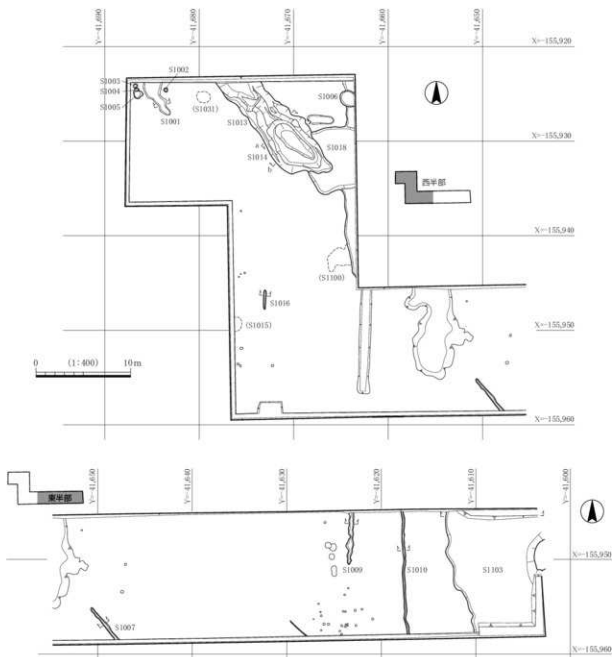


図 38 B a 区西半第 7 a 面検出遺構全体平面

S1005 調査区の北西隅、S1001 の西側に隣接する土坑である。S1004 と重複し、S1004 に切られる。平面形は長径約 1 m、短径 0.8 m 程度の楕円形であったと思われるが、東側の一部がやや張り出し歪む。深さは 0.08 m を測る。埋土は粗粒砂が混じる褐灰色の粘土質極細～細粒砂である。

S1004・1005 からは土器器小片が出土している。ただしどちらの遺構からの出土なのかは不明。

S1006 調査区西半の北東隅に位置する土坑である。平面形は長径 1.9 m 以上、短径 1.6 m の楕円形を呈する。深さは約 0.1 m で、埋土は、上層が小礫混じりの粘土質中粒砂ブロックや、中粒砂が混じる灰色の粘土質極細砂、下層が中粒砂混じりの灰色粘土質極細～細粒砂である。

S1007 調査区の中央、南壁寄りに位置する溝である。幅は約 0.3 ～ 0.35 m で、約 40 度西偏する。深さは約 0.05 m で、埋土は粗粒砂混じりの灰黄褐色粘土質シルトである。

S1009 調査区の東半、北壁寄りに位置する溝である。南北方向の溝であるが、南壁までは達しない。幅

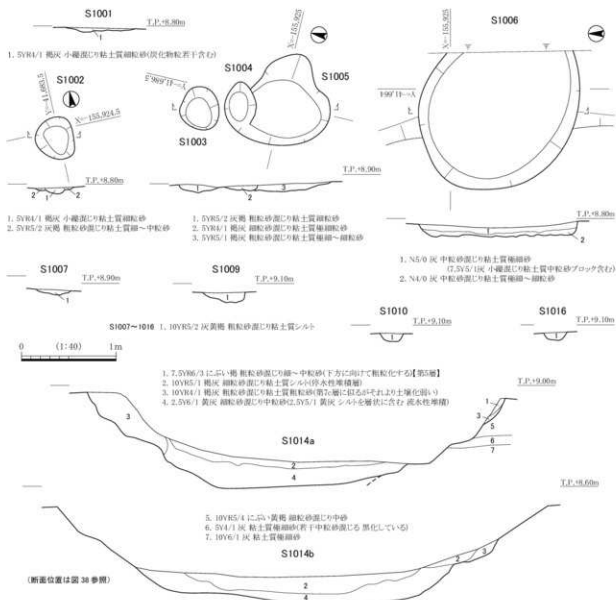


図 39 B a 区第 7 a 面検出遺構平面・断面

は 0.4 ～ 0.5 m 程度であるが、部分的に肩部が乱れて広がる箇所もある。深さは約 0.1 m で、埋土は粗粒砂混じりの灰黄褐色粘土質シルトである。

S1010 調査区の東半、S1009 の東側に位置する溝である。南北方向の溝で、調査区を横断する。幅は 0.25 ～ 0.3 m で、深さは約 0.1 m に満たない。埋土は粗粒砂混じりの灰黄褐色粘土質シルトである。

S1013・1014・1018 調査区の西半、北壁際に位置する落ち込みである。一連の遺構であるのでまとめて報告する。南東―北西報告に斜行する溝状の落ち込みで、機械掘削終了段階で、すでに黄灰色の砂層が明瞭に認識できていた。このため当初は攪乱と認識して掘削を開始したが、途中で攪乱ではないことが判明した。断面上部の記録が抜けている(図 39)のはこのためである。幅は約 3.5 ～ 5 m、東壁際の S1018 付近では 7 m 以上となる。深さは S1014 としたあたりがもっとも深く、1 m 前後であるが、これは、第 7 a 面で検出できた黄灰色の砂層を完全に掘削した後に観察できた、さらに下層の堆積までも含めた深さである。その黄灰色の砂層よりも下層には、細粒砂が混じる褐色の粘土質シルトと、黄灰色シルトを層状に含む細粒砂混じりの黄灰色中粒砂がみられる。

現地調査の段階では、上記のとおり途中から第7 a 面の遺構として調査しているが、実際には第8面で検出した流路S1020の影響により第7 a 面にできた窪み、あるいは溜りであった可能性が高い。これについては後述のS1020の報告で再度触れる。

S1013・1014からは土師器(191～209)が多数と、木製品(200・201)が2点出土している。199以外は、いずれも庄内式期後葉から布留式期前葉のものである。191は複合口縁壺の体部片か。外面は横位のヘラミガキ。192・193・204・205は庄内式甕や、布留式傾向甕あるいは布留祖形甕などと呼ばれる甕である。205はほかの甕よりも若干時期が下る。口縁端部は内面がやや肥厚し、体部内面のヘラケズリも頸部屈曲部まで達しておらず、屈曲が丸くなる。口縁部外面に靱痕が認められる。206・207は弥生形甕で、206は体部径に対して器高が低い。195～197は小型器台。195・196は脚部が接合面できれいに分かれた受部片で、口縁端部は短く立ち上がる。内面には放射状のヘラミガキを施す。198・202・203は小型丸底壺。198は体部内面にも横位のヘラミガキを施す。口縁部内側は暗文状の斜め方向のヘラミガキ。これに対し203の外面はヘラケズリのままである。199は唯一時期が古い弥生時代後期後半のもので、器台と思われる。口縁端面には凹線状の筋が僅かに確認できるが、磨滅しており不鮮明である。その上に円形竹管浮文を付けるが、その竹管は円形ではなく、C字状である。208は高杯。内面に放射状のヘラミガキを施す。194は椀型鉢、209は有段口縁鉢である。200・201は木鐺で、直径は両者ともに約6.5 cmである。

S1016 調査区西端に位置する溝である。幅0.15 m程度の細い溝で、長さは2 mを測る。深さも0.1 mに満たない。埋土は粗粒砂混じりの灰黄褐色粘土質シルトである。

S1103 調査区東端に位置する流路で、04-3調査7・15区の7層上面で検出した3125流路の延長部にあたる。幅は確認できる箇所で約9 mを測るが、それ以外の箇所では更に広がっていたと推測される。明らかに7 a層を切る流路で(写真3-5)、機械掘削終了段階で、すでに幅の広い砂の広がりが検出できていた。深さは調査設計深度であるT.P.+7.8 mまで掘り下げたが、底には達することができず、それ以下にも更に砂層が続いていた。埋土の大部分は細～粗粒砂・小礫であるが、岸際には植物遺体を含む灰色シルト～極細粒砂などが堆積する。また北半部では、西側に寄った幅7 m程度の新しい段階の流路と、それに切られるような状況の古い流路の重なりが観察できたが、これは人為的な掘り直しによるものではなく、おそらく、一旦埋まっては再度砂礫が流入するという状況の繰り返しによるものと推測される。

この最終段階の砂礫の最下層から、外面タタキを有する庄内式期後葉から布留式期前葉頃のものと思われる甕小片が2点出土している。以前の調査では、布留式期の土師器や6世紀中葉の須恵器などが多く出

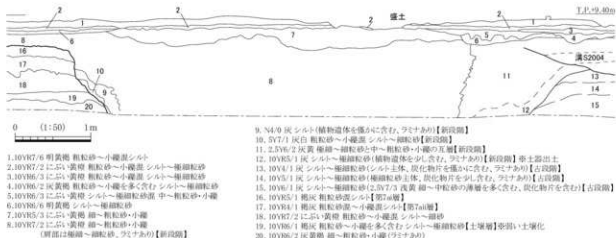


図 40 B a区S1103 断面

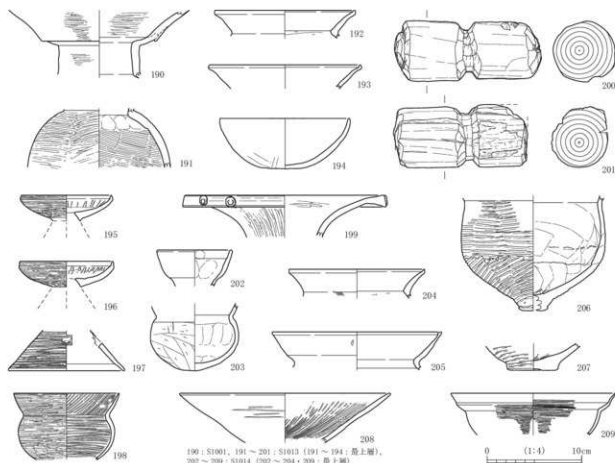


図41 B a区第7 a面検出遺構出土遺物

土していたが、今回は上記2点のみであった。

これらの遺構のほか、第7 a面では、第8面で検出する遺構の影響により上部が窪み、一見遺構のように見えるものもいくつか認められた。たとえば S1015・1031・1100 などのように、第7 a面の遺構検出の際に、誤認してすでに掘削したものもあるが、明らかに下層遺構の影響によるものであった。また、調査区北東隅で検出した S1002～1005 についても非常に浅く、そういった下層遺構（S1025～1027）の影響でできた窪みであった可能性が高い。調査区北半の北東隅で検出した S1013・1014・1018 などについても、第7 a面の調査段階にすでに深くまで掘削しているが、実は上記のような窪みであった可能性が高く、そう考えると、この第7 a面で検出したものは、大半が上層からの攪乱か、下層遺構の影響でできた窪みということになり、第7 a面は東端部の S1103 以外は遺構がほとんど分布しない遺構面ということがいえる。

第2項 第8面検出遺構

調査区西半で、土坑やピット、溝など多くの遺構を検出した。東半は遺構が稀薄である。また、それよりも一時期古い時期の流路も検出している。

S1015 調査区西壁際に位置する土坑である。前記のとおり、この遺構の上部が第7 a面でも窪んでいたため、第7 a面の遺構のように思われたが、実際には第8面に伴う遺構である。西端が調査区外のため全体規模は明らかでないが、平面形は一辺約1.3 mの隅丸方形に復原できる。深さは第7 a面から0.5 mを測るが、このうち上層の0.25 mまでが、灰黄褐色の細～中粒砂などが堆積する第7 a面に現れた窪みである。その下には同じく窪みに溜まった7 a層と考えられる中粒砂混じりの褐灰色粘土質極細粒砂がみられる。下

ハケ目は認められるが、タタキの痕跡は確認できない。214 は直口壺。体部外面はハケ後ナデ、内面はヘラケズリ。口縁部外面は斜め方向のハケで、内面は横位のハケ後、上半はナデ。215・216 は小型丸底壺。216 は外面のうち上半にのみ縦位のハケ目が認められる。217 は製塩土器か。

S1021 調査区東半に位置する土坑である。下層の S1020 埋土上面で検出できる。平面形は長径約 1.35 m、短径 0.7 m の楕円形で、深さは 0.15 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を含む黒～黒褐色のシルトである。

S1022 調査区の東半、北壁際に位置する土坑である。大半が調査区外のため、全体規模は不明。東西幅は 2.3 m 以上ある。深さは 0.45 m で、埋土は、上層がシルトの小ブロックや炭化物・粗粒砂～小礫などを含む灰黄褐色シルト、下層が基盤層のブロックや炭化物を含む黒色の粘土～シルトである。

S1023 調査区東半に位置するピットである。下層の S1020 埋土上面で検出できる。平面形は直径約 0.4 m の円形で、深さは 0.25 m を測る。埋土は黒褐色の粗粒砂～小礫混じりのシルトである。

S1025 調査区北西隅に位置する土坑である。平面形は直径約 0.9 m の円形で、深さは 0.3 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒色シルトである。

庄内式甕の口縁片（218）が出土している。

S1027 調査区北西隅、S1025 の東側に隣接する土坑である。平面形は幅 0.3～0.6 m、長さ 1.4 m の歪んだ楕円形で、深さは 0.15 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒色シルトである。

S1028 調査区北西隅、S1027 の南側に隣接するピットである。平面形は直径約 0.3 m の隅丸方形で、深さは 0.17 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色シルトである。

土師器小片が 1 点出土している。

S1030 調査区北西隅に位置するピットである。平面形は幅 0.25～0.3 m、長さ 0.5 m の瓢形で、深さは 0.2 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色のシルトである。

S1031 調査区北西隅に位置する土坑である。平面形は直径約 1.5 m の円形で、深さは 0.7 m を測る。埋土は最下層に粗粒砂～小礫を含む灰～黒色のシルト～極細粒砂があり、その上に粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒色のシルト～細粒砂などが複雑に堆積する。

最下層や中層から土師器（219～225）が多数出土している。219 は鉢。弥生時代中期後半のもので、ほかの土器とは時期が異なる。生駒山西麓産胎土で、外面に櫛描簾文を施す。220・221 は庄内式甕。220 の外面には頸部付近までハケ目が残る。タタキ目は確認できないが、ハケ目に先行する右上がりの圧痕がかすかに認められる。221 は割れや欠けのない完形品である。体部上半は右上がりのタタキで、下半は縦位のハケで仕上げる。タタキの目は、ハケの目の幅とほぼ同じで非常に細かい。体部内面は頸部までヘラケズリであるが、頸部の稜はシャープでなく、狭い面を残す箇所もある。頸部から口縁部は最終的にヨコナデで仕上げるが、頸部の屈曲部には、内外面ともに僅かにヨコナデに先行するハケ目が認められる。外面のそれはタタキの向きとはほぼ 90 度異なり、左上がりである。口縁部を接合する際に、ハケの工具を用いて形をある程度整えていたのであろうか。底部には 1 箇所、直径 5 mm の小円孔が穿たれている。222 は小型丸底壺。底部内面は放射状のハケ。口縁部内面は横位のハケ後、ヨコナデ。体部外面は横位のヘラミガキで仕上げるが、下半には先行するヘラケズリの痕跡が残る。またヘラケズリと重なるように、横位のハケ目が 1 箇所にのみ認められる。偶然工具が当たったものかもしれないが、ヘラケズリの前にハケ調整が行なわれていた可能性も考えられる。223 は小型器台の脚部。外面にのみ横位のヘラミガキを施すが、上端部にはそれに先行する縦位のヘラケズリが認められる。224 は複合口縁壺。内外面ともに横位のヘラミガキの

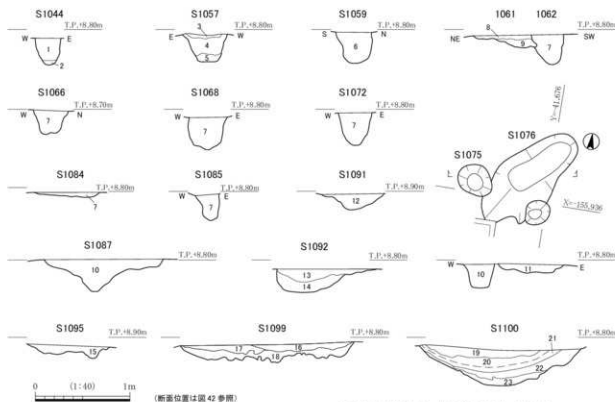


図 44 B a 区第 8 面検出遺構平面・断面 2

後、やや斜め方向に暗文風の丁寧なヘラミガキを施す。225 は尖底であることから、製塩土器と判断した。外面はタキ後ナデで、底部付近にのみタキ目が残る。内面には板状工具による圧痕が明確に認められる。被熱のためか、表面が赤褐色（10R6/6）に変色している。

S1034 調査区西端に位置する溝である。幅は約 0.4 ～ 0.7 m、長さは約 6 m で、Z 字状に蛇行する。深さは 0.1 m 程度で、埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒色シルトである。

土師器小片が出土している。

S1035 調査区の西端、S1034 の西側に隣接する土坑である。平面形は直径約 0.8 ～ 0.85 m の円形で、深さは 0.27 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐色のシルト～細粒砂や、黒色シルトである。

土師器小片が出土している。

S1036 調査区の西端、S1034 の東側に隣接するピットである。平面形は長径 0.3 m、短径 0.25 m のやや歪んだ楕円形で、深さは 0.22 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐～黒色のシルトである。

S1038 調査区の西端、S1034 の東側に隣接するピットである。平面形は直径 0.38 m の円形で、深さは 0.12 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色のシルトである。

S1041 調査区の西端、S1031 の南側に隣接するピットである。平面形は長径 0.3 m、短径 0.25 m の楕円形で、深さは 0.23 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色のシルトである。



図 45 B a 区第 8 面検出遺構土器出土状況

S1042 調査区の西端、S1041 の南側に隣接するピットである。平面形は長径 0.65 m、短径 0.52 m の楕円形で、深さは 0.18 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む褐灰色のシルト～細粒砂である。

S1044 調査区の西端、S1042 の南側に接するピットである。平面形は長径 0.52 m、短径 0.34 m の楕円形で、深さは 0.28 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒色シルトである。

S1057 調査区の西端、南壁際に位置するピットである。平面形は長径約 0.6 m、短径 0.5 m の歪んだ楕円形で、深さは 0.3 m を測る。埋土は、下層がシルト混じりの褐灰色細～粗粒砂・小礫で、中層が粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒色シルト～細粒砂、上層が粗粒砂～小礫や基盤層のブロックを含む褐灰色シルトである。

土師器小片が出土している。

S1059 調査区の西端、S1057 の東側に隣接するピットである。平面形は直径約 0.4 m の円形で、深さは 0.32 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫や基盤層のブロックを多く含む褐灰色のシルト～細粒砂である。

S1061 調査区の西端、S1059 の北側に隣接する土坑である。平面形は長さ約 3 m、最大幅 1.1 m の長い楕円形で、北側が若干折れ曲がる。深さは 0.14 m で、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む暗青灰色や褐灰色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が 3 点出土している。

S1062 上記 S1061 の西側に重複するピットである。平面形は長径約 0.6 m、短径 0.35 m の楕円形で、深さは 0.3 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒色のシルト～細粒砂で、S1061 を切る。

S1066 調査区の西端、S1061 の東側に隣接するピットである。平面形は直径 0.4～0.45 m 円形で、深さは 0.25 m を測る。埋土は S1062 と同じである。

S1068 調査区の西端、S1066 の東側に隣接するピットである。平面形は直径約 0.4 m 円形で、深さは 0.35 m を測る。埋土は S1062 と同じである。

S1072 調査区の西端、S1068 の南側に位置するピットである。平面形は直径 0.45 m の円形で、深さは 0.35 m を測る。埋土は S1062 と同じである。

S1075 調査区の西端、S1061 の南東側に隣接するピットである。平面形は長径約 0.4 m、短径 0.3 m の楕円形で、深さは 0.25 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色のシルト～細粒砂である。

S1076 上記 S1075 と重複する土坑である。平面形は長径 1.25 m、短径 0.4～0.6 m の楕円形で、深さは 0.1 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が出土している。

S1084 調査区西壁際に位置する溝状の土坑である。長さは 7.5 m 以上で、幅は約 1.0～1.7 m を測る。深さは 0.05 m と平面規模の割に浅い。埋土は S1062 と同じである。

古墳時代前期の、器壁が厚い複合口縁壺体部片がまとまって出土している。

S1085 調査区の西半、S1084の南側に隣接するピットである。平面形は直径0.4～0.45 mの円形で、深さは0.27 mを測る。埋土はS1062と同じである。

S1087 調査区西壁際に位置する土坑である。遺構の西半が調査区外のため、全体規模は不明。南北幅は約1.3 mで、深さは0.35 mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色のシルト～細粒砂である。

土師器小片が出土している。

S1091 調査区南西隅に位置する溝である。最大幅0.8 mの南北方向の溝で、北側が徐々に細くなる。深さは0.17 mで、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐色のシルト～極細粒砂である。

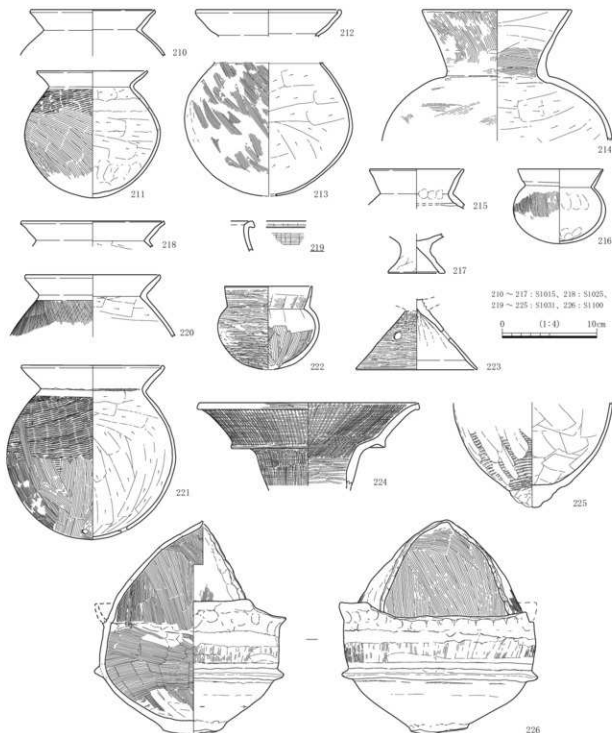


図46 B a区第8面検出遺構出土遺物

S1092 調査区の西半中央に位置する土坑である。平面形は長径 1.4 m、短径 0.75 m の楕円形であるが、東肩部が浅く広がる。深さは 0.25 m で、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒色のシルト～細粒砂である。

S1095 調査区の西半中央、S1092 の南西側に位置する土坑である。平面形は長径 2.2 m、短径 0.75 ～ 0.95 m の楕円形で、深さは 0.1 m 前後である。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐色のシルトである。

土師器小片が出土している。

S1099 調査区の西半、S1095 の東側に隣接する土坑である。平面形は長径 2.6 m、最大短径 1.9 m のビーンズ形を呈する。深さは底部に凹凸がみられるが、平均 0.15 m 程度である。埋土は、最下層が灰黄色のシルト～極細粒砂と、粗粒砂～小礫を含む黒褐色シルトとの混合土、上層が粗粒砂～小礫を含む黒褐色シルトと黄灰色シルトとの混合土や、粗粒砂～小礫を少量含む黄灰色シルトである。

S1100 調査区の西半、S1099 の北側に隣接する土坑である。遺構の東端部が調査区外のため全体規模は不明。平面形は長方形で、幅は 1.7 ～ 1.8 m、長さは 3.5 m 以上である。深さはもっとも深い箇所 0.7 m を測る。

完形の手焙土器（226）がやや浮いた状態で出土した。第 8 面の遺構から出土しているほかの土器と

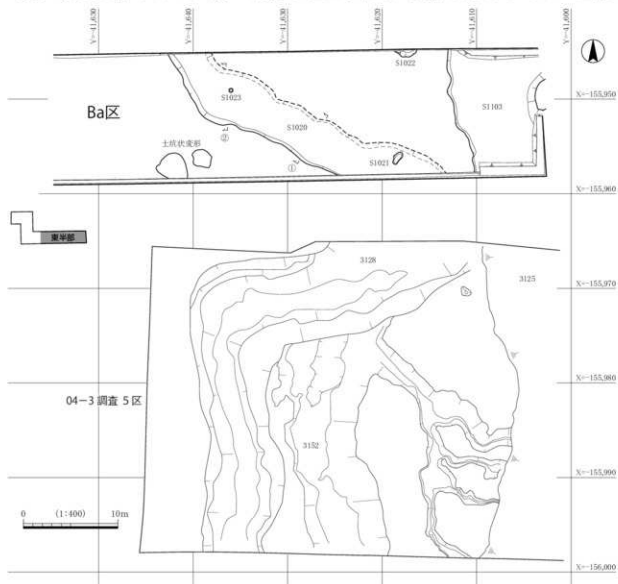


図 47 Ba 区東半第 8 面検出遺構全体平面

同時期の、庄内式期後葉から布留式期前葉頃のものと考えている。平底で、鉢部の口縁部はくの字状に外側に緩やかに開く。外面は突帯より下がナデで、ハゲ目は認められない。突帯より上は縦位のハゲ。内面は下半が縦位、上半が横位のハゲ。覆部は鉢部口縁端部よりやや下がった屈曲部に接合する。外面は縦位のハゲの後ナデ。内面はハゲで、開口部の縁は外側に折り曲げる。全体に雑なつくりである。

S1020 調査区東半に位置する流路である。第8面でその痕跡が検出できるものの、上記のピットや土坑などの遺構群が形成される古墳時代前期の段階には、すでに完全に埋まっている、明らかに一時期古い遺構であり、本来ならば、更に1層掘り下げた第9面で検出すべき遺構であったと思われる。下層に位置する流路の最上層が窪んでいたために、その窪みに溜まった埋土が第8面に伴う遺構のように溝状に検出できた。この溝状の窪みは、幅5m前後、深さ約0.1～0.15mで、東北東～西西北方向に大きく斜行している。その西側延長上には、調査区西半で検出したS1013・1014・1018が位置しており、関連がうかがわれる。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黒褐色のシルト～細粒砂で、上記のS1021・S1023はこの最上層の上面で検出している。

調査では、この溝状の窪みの底を検出しようと掘削を始めたが、更に下層まで砂層が続いており、明確な底を検出することができなかった。このため、調査設計深度であるT.P.+7.8mまで掘り下げることとなったが、結局、底に達することができず、北肩についてもその立ち上がりを検出することができなかった。これにより、当初は幅5m程度の溝と思われたものが、実際には幅の広い大規模な流路であることが明らかとなった。南肩部については、下層に広がる暗色層（写真5）を切るような明らかな立ち上がりが検出できたことから、最上層の窪みの肩部とほぼ同位置であることがうかがえるが、北肩部については、最上層の窪み肩部よりもさらに北側まで、特に顕著な変化もなく砂層が続いており、立ち上がりが近いことがうかがえるような状況でもなく、その位置を確認することも、また推測することもできなかった。おそらく調査区北壁まで達するような大規模な流路であったと考えられる。

なおこの流路の位置は、04-3調査5区の9層下面で検出した3128・3152流路の北側にあっており、その延長部であった蓋然性が高い。ただし以前の調査では、この流路から残存状態の良い縄文時代後期中葉の土器が多く出土しているが、今回の調査では皆無であった。

ところで上記のとおり、この流路の西延長上にS1013・1014・1018が位置していることは注意したい。これらの遺構は7a層上面から明らかに窪んでいたことから、第7a面の遺構として掘削・報告しているが、実は下層に位置していたこの流路S1020の影響が第7a面まで及んでおり、長い間、窪みあるいは湿地状

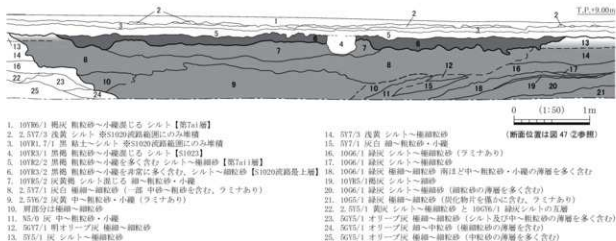


図 48 B a区 S1020 断面



写真5 A区S1020断面

の溜りとなっていたものであった可能性が考えられる。下層の影響によるこれらの窪み、あるいは溜りを、第7a面の遺構と認識し、掘削してしまっていたのかもしれない。

以上の遺構のほか、地震動によって生じたと考えられる変形構造（土坑状変形）を、調査区東半の南壁際で2基、西半の北寄りで2基確認している。〈現地調査担当：若林（12月）・信田（1月〜）〉

第3節 B b区の遺構と遺物

第1項 第6面検出遺構

溝1条を検出した。

S2001 調査区中央に位置する溝である。後述する流路S2022上に堆積した6層の上面で検出できる唯一の遺構である。調査区を横断する南北方向の溝で、幅は0.4～1.1mを測る。深さは浅く0.1mに満たない。埋土は小礫が混じる粗～細粒砂である。

土師器小片が出土している。

調査区東半部では、上記6層よりもさらに1層上の、粗～中粒砂が多く混じる黄褐色～にぶい黄色の粘土質シルト層を切る遺構を検出している。S2019・S2027・S2028などとした溝で、現代の水田床土を除去した面で検出できる遺構であったため、今回の調査では攪乱扱いとしたが、S2028からは8世紀の土師器（240～242）、須恵器（243）が出土しているため、図55に実測図のみ掲載しておく。この溝は、04～3調査9区の7層上面で検出した2362流路にあたり、この時の調査でも人面墨書土器を含む8世紀の土器が多く出土している。240は杯、241は小型の甕。242・243は壺である。

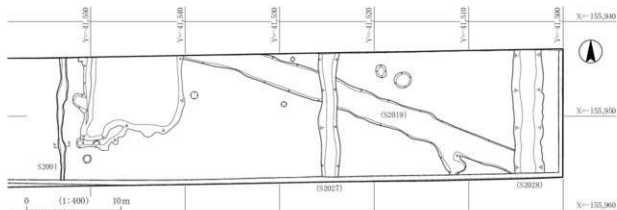


図 49 B b 区東半第 6 面検出遺構全体平面

第 2 項 第 7 面検出遺構

溝を幾筋も検出した。このほか土坑やピットを数基と、それよりも一時期古い時期の流路を検出している。

S2002 調査区の北壁際、S2001 の西脇に位置するピットである。平面形は一边約 0.3 m の方形を呈する。深さは 0.33 m で、埋土は下層から、細～極細粒砂が混じる灰黄褐色の粘土質シルト、粗～中粒砂、細～極細粒砂の 3 層である。

S2003 調査区西端に位置する溝である。B a 区東端の流路 S1103 から分岐し、北東にのびるが、北壁際では後述する溝 S2004・2005 と合流して 1 条の溝となる。幅は 1.1 ～ 1.9 m で、深さは約 0.8 m を測る。埋土は、最下層に黒褐色粘土があるが、大半は細～極細粒砂である。

S2004 調査区西端に位置する溝である。B a 区東端の流路 S1103 から分岐し、東にのびるが、僅か数メートルで上記 S2003 に合流する。幅は約 2.2 m で、深さは約 0.9 m を測る。埋土は、黒褐色の粘土偽礫が混じる灰黄褐～にぶい黄褐色の細粒砂～シルトや、極粗～極細粒砂などで、最下層には S2003 と同様に黒褐色粘土がみられる。

なお、S1103 の断面を観察している過程で、S2004 が S1103 の古い時期の埋土を切っている状況が確認できた (図 40)。これは、S1103 の東岸がある程度埋まった段階で S2004 が築かれたことを示しているが、この時 S1103 はまだ完全には埋まりきっていない。S1103 と S2003 ～ S2005 の平面的な位置関係からも、S2003 ～ S2005 が機能していた時期には、S1103 はだいぶ埋まっていたものの、ある程度の幅のまま、S2003 ～ S2005 と併存していたと考えている。ただし、南側の 04-3 調査では、S1103 の延長部にあたる 3125 流路は 7 層上面 (第 2 面) で、後述する S2005・2006・2008・2010 の延長部にあたる 3272 ～ 3275 溝は、それよりも下層の 7 b ii 層上面 (第 3 面) で検出されており、今回の状況とは若干異なる成果となっている。おそらく 3125 流路の砂層が盛り上がっていたために、上層から検出できたためと考えられるが、遺構の形成順を検討する上で重要な場所であり、注意しておきたい。

S2005 調査区の西端、S2003・2004 の東側に位置する溝で、04-3 調査 7 区の 7 b ii 層上面で検出した 3274 溝の延長部と思われる。S2003 とは逆に南東～北西方向にのび、緩やかに湾曲しながら北壁際で上記 S2003 と合流する。幅は 1.7 ～ 1.9 m で、深さは約 0.65 m を測る。埋土は、下層が黄褐色粘土の小偽礫や細～極細粒砂を含む黒褐色のシルト質粘土で、上層が細～極細粒砂である。

S2006 調査区の西端、S2005 の東側に位置する溝で、04-3 調査 7 区の 7 b ii 層上面で検出した 3272 溝の延長部と思われる。やや東偏する南北方向の溝で、上記 S2003 ～ S2005 に比べ小規模である。南端が S2005 とつながるが、調査区南壁断面では、S2005 の埋土上面から S2006 が形成されていることが観

察できた。幅は約 0.7 ～ 0.8 m で、深さは約 0.45 m を測る。埋土は、上層が黄褐色粘土質シルト、下層が粗～中粒砂や明黄褐色シルト偽礫が混じる黒褐色粘土質シルトである。

弥生時代後期の壺底部片（227）が 1 点出土している。

S2007 調査区の西半、S2006 の東側に位置するビットである。平面形は直径 0.2 m 強の円形で、深さは 0.2 m を測る。埋土は粗～中粒砂が混じるにぶい黄色の粘土質シルトである。

S2008 調査区の西半、S2006 の東側に並行する溝で、約 18 度東偏する。04-3 調査 7 区の 7 b ii 層上面で検出した 3273 溝の延長部と思われる。幅は 0.55 ～ 0.85 m で、深さは約 0.2 m を測る。埋土は、上層が粗～中粒砂を多く含むにぶい黄褐色砂質シルト、下層がにぶい黄褐色のシルト偽礫が混じる粗～中粒砂である。

土師器小片が 2 点出土している。

S2009 上記 S2008 の東側に位置する土坑である。一部未検出であるが、平面形は長径 1.5 m、短径 1.0 m の楕円形に復元できる。深さは 0.25 m で、埋土は細～極細粒砂である。

S2010 調査区の西半、S2008 の東側に位置する溝である。後に報告する流路 S2022 の西肩部にほぼ重複し、大きく蛇行する。本来の溝幅は 0.6 ～ 0.9 m 程度であるが、下層に重なる S2022 の影響で、両肩部ともに浅く広がる。深さは約 0.35 m で、埋土は、下層が粗～中粒砂が混じる褐色のシルト質粘土やシルト質粘土が混じる粗～中粒砂で、広がった肩部などは、部分的に極粗～中粒砂が混じる褐～にぶい黄褐色のシルトや極粗～中粒砂である。04-3 調査 7 区の 7 b ii 層上面で検出した 3275 溝の延長部と思われる。

S2011 調査区の西半、S2011 の西側に位置するビットである。平面形は直径約 0.3 m の一部が僅かに張り出した円形で、深さは 0.2 m を測る。埋土は、下層が炭混じりの褐灰色粘土、上層が粗～中粒砂混じりの黒色粘土質シルトである。

S2012 調査区の西半、S2010 の東側に位置する溝である。大きく蛇行する。幅は 0.4 ～ 0.6 m で、深さは 0.1 m 弱と浅い。埋土は細～極細粒砂が混じる灰黄褐のやや粘土質シルトである。

S2013 調査区の西半、S2011 の東側に位置する溝である。上記 S2006・S2008 が東偏するのに対して、この溝は約 20 度西偏する。本来の溝幅は 0.8 ～ 1.1 m 程度であるが、東肩部のみ浅く広がる。深さは約 0.15 m 強で、埋土は極粗～中粒砂を多く含む黒褐色の粘土質シルトや、粘土質シルトが混じる極粗～中粒砂などである。

最下層から土師器小片が 2 点出土している。

S2014 調査区の中央、下記 S2015 の底面で検出した溝状の土坑であるが、S2015 と一体のものと考えた方がよいかもしれない。幅は 0.2 ～ 0.3 m、長さは 1.5 m、深さは 0.06 m を測る。埋土は炭が混じる灰黄褐色の粘土質シルトである。

弥生土器、あるいは土師器と思われる小片が出土している。

S2015 調査区中央に位置する土坑である。平面形は長径 9.2 m、短径 4.5 m の大型の楕円形で、深さは 0.35 m を測る。埋土は、下層が炭混じりの黒色や灰黄褐色の粘土、上層が細～極細粒砂混じりにぶい黄褐色シルトや、にぶい黄褐～黄褐色の砂質シルト偽礫や細～極細粒砂が混じる黒褐色の粘土質シルトである。

S2016 調査区の東半に位置する溝である。下記 S2017・S2018 のような壁が立つような明らかな遺構ではなく、辛うじて輪郭が検出できる程度の浅い溝である。第 7 面で何度検出し直しても、まったく同じ位置に輪郭が認められたことから遺構とした。深さも 0.02 ～ 0.03 m 程度しかなく、調査区南壁の断面でも僅かな窪みが確認できる程度である。埋土は細～極細粒砂が混じるにぶい黄褐色シルトである。

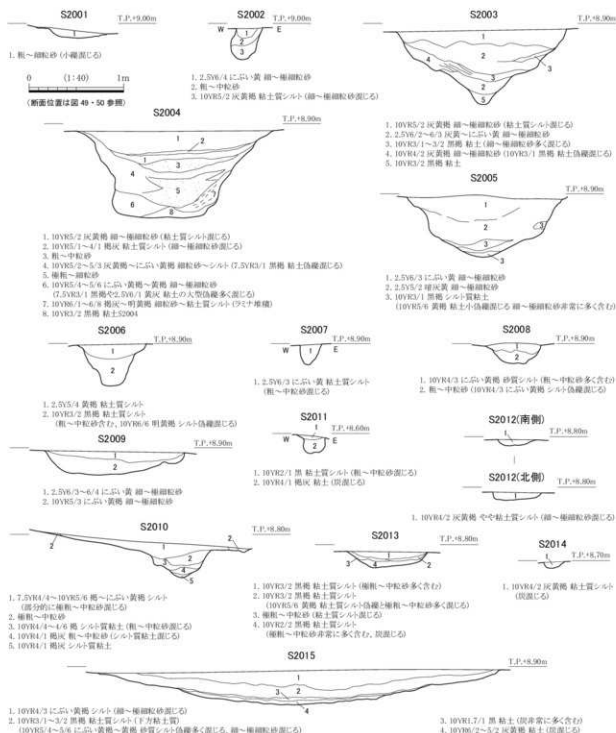


図 51 B b 区第 6・7 面検出遺構断面

S2017 調査区の東半、S2016 の東側に位置する溝である。約 22 度東偏し、調査区を斜行する。幅は約 0.75 ～ 0.95 m で、深さは約 0.45 m を測る。埋土は部分的に灰黄褐色シルトが混じる極粗～中粒砂である。

弥生時代後期後半の甕、あるいは古墳時代前期の弥生形甕と思われる口縁部片 (228) が 1 点出土している。

S2018 調査区の東端、S2017 の東側に位置する溝である。約 41 度東偏し、調査区を斜行する。幅は約 0.8 ～ 0.9 m で、深さは 0.6 ～ 0.8 m 強を測る。上半の埋土は極粗～細粒砂で、下半には灰黄色の細～極細粒砂と黒褐色の粘土がラミナ状に堆積する。調査区北壁際では肩部がやや乱れ、落ち込み状に広がる。

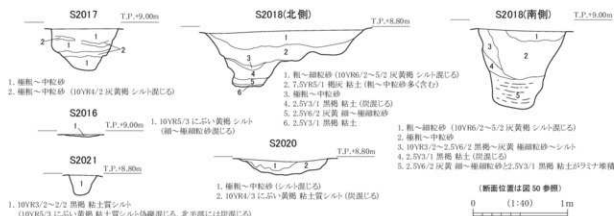


図 52 B b 区第 7 面検出遺構断面

土器片が 4 点と、北端部から須恵器が 2 点 (229・230) 出土している。229 は肩部が落ち込み状に広がった箇所からの出土である。ともに 6 世紀後半の杯。

S2020 調査区北東隅に位置する土坑である。北端部が調査区外であるが、平面形は長径約 3 m、短径約 1.0 ～ 1.1 m 楕円形に復元できる。深さは 0.15 m で、埋土は、上層がシルト混じりの極粗～中粒砂、下層が炭混じりのにぶい黄褐色粘土質シルトである。

S2021 調査区東端の調査区境に位置する溝である。僅かに東偏する南北方向の溝で、幅は 0.2 ～ 0.3 m 程度で、ほかの溝に比べ細い。深さは約 0.2 m を測る。埋土はにぶい黄褐色の粘土質シルト偽礫が混じる黒褐色粘土質シルトで、北半部には炭も混じる。

S2022 調査区西半に位置する大規模な流路である。南側の 04－3 調査でも大規模な流路を幾筋も検出しているが、これは 04－3 調査 7・8 区の 7 c 層上面で検出した 3115・3116・3410 流路 (7・8 区南側の 16 区では 3344 流路) の延長部にあたると考えている。7 層を切る第 7 面検出の遺構であるが、前記 S2010 ～ S2015 などの遺構は、この S2022 が完全に埋まった後の埋土上面に形成されており、同じ第 7 面検出の遺構でも、明らかな時期差が認められる。流路の規模は、調査区南壁際で幅約 38 m、北壁際で約 16 m を測る。深さは、第 7 面から約 1.1 m の、T.P.+7.8 m まで掘削したが、まったく底に達するような状況ではなく、さらに深くまで砂礫が続いていた。湧水も著しい。埋土は西肩部に粗～細粒砂が混じる黒褐～黒色の粘土質シルトがみられるが、それ以外はほとんどラミナ堆積を示す砂礫で、植物遺体も多く含まれている。

層的には古墳時代の遺物が出土してもよい遺構であるが、実際に出土した土器はすべて弥生土器 (231 ～ 239) であった。いずれも弥生時代後期後半のものである。231・232 は甕。232 の下半はタタキ後ナデ。

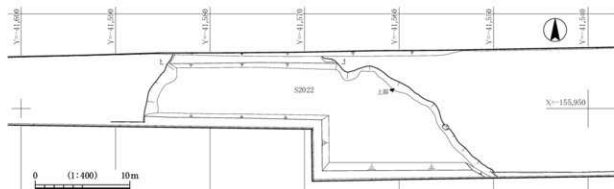
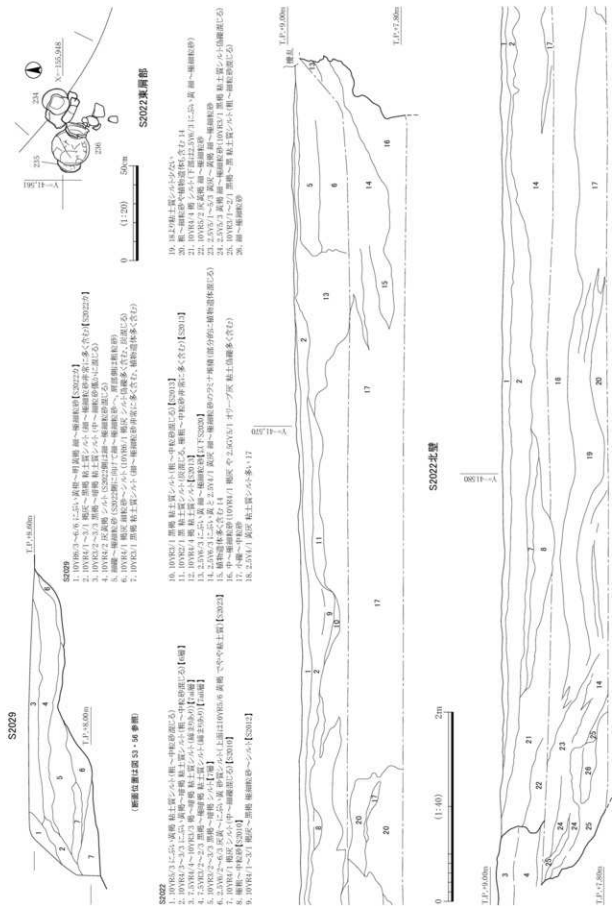


図 53 B b 区第 7 面検出 S2022 平面



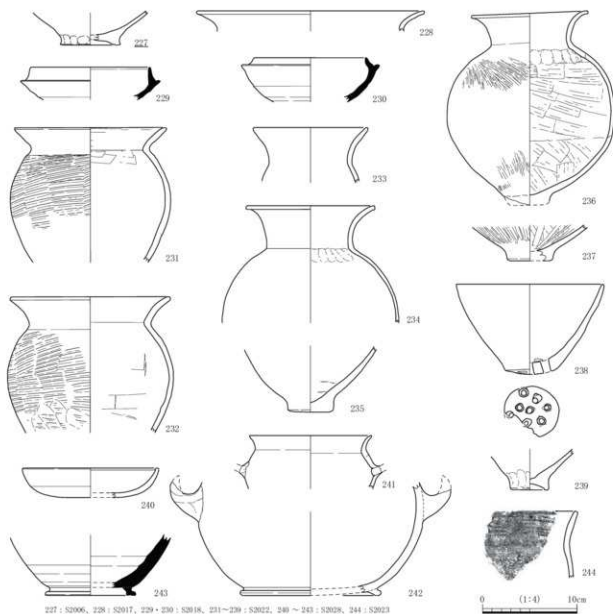


図 55 B b 区遺構出土遺物

233 は小型の長頸壺か。234 ～ 237 は壺。236 の広口壺は、外面の磨滅が著しいが、僅かにヘラミガキが認められる。内面は板状工具によるナデで、工具の痕跡が明瞭に残る。238 は有孔鉢。底部に 8 孔をあける。239 は鉢。なお、234 ～ 236 の 3 点は東岸寄りの上層からまとめて出土したものである（図 54）。

第 3 項 第 8 面検出遺構

大規模な流路を検出した。

S2023 調査区中央に位置する流路である。Y = -41,511 ～ -41,516 m 付近を東肩として調査区を横断する。西肩については、西半部に第 7 面検出の S2022 が重複しているため、正確な位置は明らかでないが、S2022 の西肩よりも西側へは流路の砂層が広がっていることから、おそらく S2022 の西肩付近に S2023 の西肩もあったと考えている。この場合、S2023 の東西幅は約 70 m となる。その位置や規模から、O4 - 3 調査 15 ～ 17 区で検出した 3527 流路の延長部にあたると思われる。この流路は 7 層によって完全に覆われ、8 層を切るような状況で検出できたが、実際には 8 層を切る第 8 面の遺構ではなく、かなり古い時

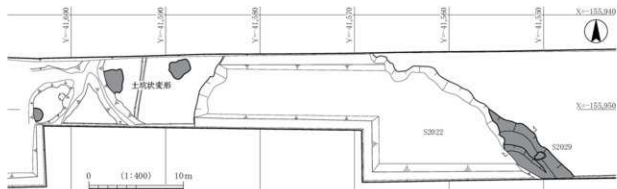


図 56 B b 区西半第 8 面検出遺構全体平面

代から存在していた流路である。第 8 面の段階にも完全に埋まりきっておらず、流路はほぼ当初の規模のまま、砂礫や木材が流れているような状況であった。その流路以外の場所に 8 層が形成されたために、8 層を切る遺構のように検出できたが、東肩部では、流路を覆うように僅かに 8 層がはみ出している状況が観察できた（写真 4-⑫、図 12-⑤）。これは、流路東肩部が僅かに埋まった段階で 8 層が形成されたことを示している。平面的にも、第 8 面で引いた流路の輪郭より、8 層を除去した第 9 面での肩部の輪郭が僅かに東側に広がったような状況で検出できた。

埋土は、最上層が黄褐色のシルト～粘土質シルトで、それ以下は細～極細粒砂である。下層ほど粒砂も粗くなり、また T.P.+8.0 m 付近から下層には多くの植物遺体が混入する。

04-3 調査では、縄文時代晩期前半の土器が多数出土したが、今回出土した遺物は土師器片と縄文土器片（244）の 2 点のみであった。土師器は庄内式後葉から布留式期前葉の小型器台の脚部小片で、この流路の最終埋没時期を示しているかもしれない。縄文土器は後期中葉の粗製深鉢。口縁部外面に条痕が認められるが、貝殻によるものかは判断が難しい。

なお、調査設計深度である T.P.+7.8 m ではまったく流路の底に至っていなかったことから、埋め戻す前に重機によって一部を掘削し、底の高さの確認に努めた。S2023 東岸掘部では、予想以上に浅く T.P.+6.9 m 付近で底が確認できた（図 58）。S2023 の埋土はほとんど礫や砂で、多くの植物遺体が含まれていた。この底の高さが全体に広がるのかを確認するため、重機を反転させ、東岸から約 20 m の地点も掘削したが、ここではまったく底が確認できず、T.P.+4.8 m 付近まで掘削したが、湧水が激しく、壁面も崩壊し始めたため、それ以上の調査は断念した。T.P.+4.8 m 付近には流木が多く埋没していたが、前回調査のような縄文土器は 1 点も出土しなかった。

時期を特定できる遺物が出土していなかったため、上記植物遺体採取し、放射性炭素年代測定を実施

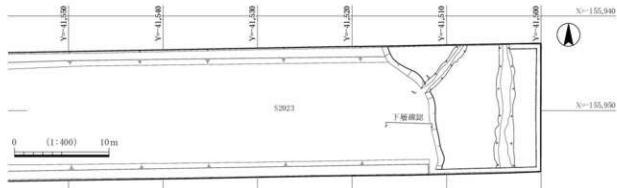


図 57 B b 区東半第 8 面検出遺構全体平面

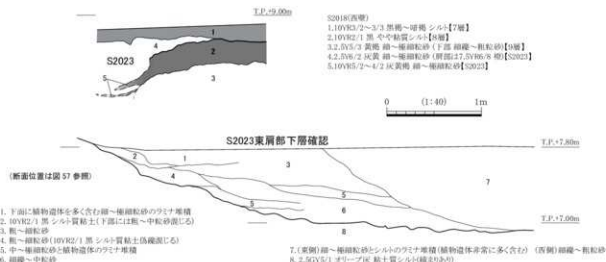


図 58 B b 区 S2023 断面

した。その結果、上層の T.P.+7.8 m 付近から出土した流木（クリ）や、T.P.+7.0 m 付近から出土した葉（イチイガシ）は縄文時代晩期頃、下層の T.P.+4.8 m 付近から出土した流木（コナラ属コナラ節）は縄文時代早期との測定結果が得られた。

なお、詳細については第 6 章で報告している。

S2029 調査区の中央、S2022 の東肩部に位置する流路である。肩部の一部のみの検出であり、全体規模は明らかでない。前記のとおり S2022 は 7 層を切る流路であるが、この S2029 は 7 層によって完全に覆われており、7 層を除去した S2023 の埋土上面でなければ検出できない（写真図版 17-4）。明らかに S2022 とは時期を異にするが、S2022 の肩部にほぼ重なっていることから、S2022 の前身遺構と考えられる。つまり、S2023 が完全に埋まった後に、新たに S2029 が形成され、その一部、あるいは全体が 7 層によって覆われた後に、再度 S2029 とほぼ同じ位置に S2022 が形成されたのではないかと考えている。埋土は、上層が黒褐色やにぶい黄褐～褐色の粘土で、下層が褐灰色のシルト礫と粗～中粒砂が混じる褐灰色の細粒砂～シルトや、細礫～極細粒砂である。

時期不明の土器小片が 2 点出土している。

これらの遺構のほか、S2022 より西側の流路外の範囲では、地震動によって生じたと考えられる変形構造（土坑変形）を 3 箇所確認している。

第 4 項 第 9 面検出遺構

この第 9 面は、調査区中央の流路 S2022・2023 によって分断され、また大きく削られているため、残っている範囲も非常に狭い。S2023 より東側ではピットを 7 基検出し、S2022 の西側では溝を 1 条検出した。ただし前章で報告したとおり、この S2022・2023 によって分断された東と西側では、80 m ほど隔れているため、8 層以下の様相がまったく異なっており、同じ第 9 面検出した以下の遺構も、同時期の遺構かどうか検証ができていない。

S2030～2037 S2023 より東側に分布するピットである。規則的に並んでおらず、建物の柱穴になるような遺構ではない。平面形はいずれも直径 0.15～0.2 m 程度の小さな円形で、深さは S2033 のように 0.05 m に満たない非常に浅いものもある。これらのピットの中には人為的な遺構ではない地面にできたシミのようなものも含まれているかもしれない。

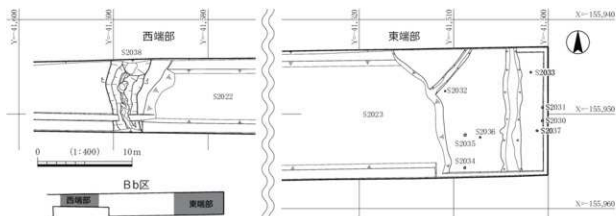


図 59 B b 区第 9 面検出遺構平面

S2030・2031 の 2 基については、調査区の東端、B c 区との境となる $Y = -41.500$ m 上の側溝を掘り直している段階で、側溝壁面に現れた遺構断面によってその存在が判明した。平面的には 8 層上面では非常に不明瞭であったため検出できず、第 9 面での検出となったが、断面では明らかに 8 層上面から掘り込まれている状況が観察できた。埋土は、ほかのピットが黒褐～黒色のシルトや粘土質シルトであるのに対して、この 2 基の上層には、にぶい黄褐色のシルト偽礫を多く含む黒褐色シルトが堆積しており、深さも S2030 は 0.25 m、S2031 は 0.4 m と深く、明らかにほかのピットとは異なる状況であった。近接する溝 S2021 が 7 層上面で検出できていたことから、この 2 基のピットについても 7 層上面から掘り込まれていた可能性も考えられる。

S2038 S2022 の西肩部に沿う溝である。調査区南壁際に設けた下層確認トレンチによってその存在が判明したため、7 層下面（第 8 面）から掘り込まれた遺構であったのかを確認するため、再度 7 層下面の遺構検出に努めた。結果、確かに溝の上部は粗粒砂の混じりが少なく、均一の細粒砂となっていることは認識できたが、その境は遺構の輪郭線を確実に引けるようなものではなく、ぼんやりとした非常に不明瞭なものであった。このため、7 層下面で検出できる遺構ではないと判断し、8 層（調査区東方に堆積する 8 層とは異なる）を除去し、第 9 面で確実な遺構の輪郭をおさえることとした。

調査区を横断する南北方向の溝で、幅は南壁際では 2.8 m、北壁際では約 4 m を測る。深さは約 0.9 ～

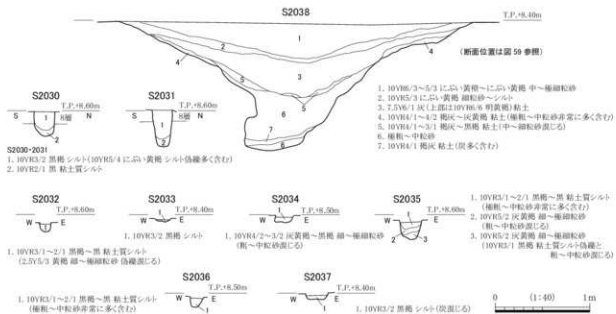


図 60 B b 区第 9 面検出遺構断面

1.35 mで、溝底には所々に土坑状の窪みがみられた。埋土は、最上層ににぶい黄橙～にぶい黄褐色の中～極細粒砂があるが、これは溝が埋まった後のできた窪みに溜まった8層と考えられる。それより下にはにぶい黄褐色の細粒砂～シルト、灰色粘土、中～細粒砂が混じる褐灰～黒褐色粘土、極粗～中粒砂、炭を多く含む褐灰色粘土などが堆積する。若干規模が小さくなるが、位置的には04-3調査7区の11層上面で検出した3512流路の延長部にあたる。

時期を特定できる遺物が出土していなかったため、最下層に含まれていた炭粒を採取し、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、約4385年前（AD1950年起点）の縄文時代中期後葉の炭であることが明らかとなった。これは、溝が縄文時代中期に埋まり始めたことを示しているのか、または単に古い時代の炭が最下層に再堆積したとするのか、その解釈が難しい。

なお、測定結果の詳細については第6章で報告している。

〈現地調査担当：伊藤〉

第4節 Bc区の遺構と遺物

第1項 7a層下面検出遺構

7a層は調査区東半にしか残っていない。この下面で多くのピットのほか、溝を数条検出した。

S3001 調査区西端に位置する溝で、04-3調査9区の7層上面で検出した2362流路東半部の溝の延長部にあたる。Bb区で検出したS2019・S2027・S2028などと同様に、7a層より更に上の地層を切る溝であったことから、7a層下面遺構の調査段階には捜査扱いとしたが、Bb区のS2028と同様に古代の土器（245）が出土しているため、図65に実測図のみ掲載しておく。

245は8世紀の鍋か。このほか須恵器の甕小片も1点出土している。

S3002 調査区南東隅に位置する土坑である。平面形は直径約0.9mの台形で、深さは0.2mを測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色や褐灰色のシルト～極細粒砂である。

S3003 調査区の東端北寄りに位置する土坑である。平面形は長辺1.7～1.8m、短辺約0.75mの隅丸長方形で、深さは0.1mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む褐灰色のシルト～極細粒砂である。

底面から細片化した土師器（246）が出土した。6世紀代のものと思われる甕で、外面は粗く雑なハケ。

S3004 調査区北東隅に位置する土坑である。平面形は長径1.25m、短径0.98mの楕円形で、深さは0.45mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐色のシルト～細粒砂や、肩部から底部に細～粗粒砂・小礫を含む褐灰色のシルト～極細粒砂などである。

須恵器の甕と甕片がそれぞれ1点ずつと、土師器小片が出土している。

S3005 調査区の北東部、S3004の南西側に位置する土坑である。平面形は凹凸がある不整形な隅丸長方形で、長径は約0.65m、短径は約0.5mを測る。深さは0.27mで、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む黒褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器高杯片など小片が2点出土している。

S3006 調査区の東半北寄り、S3005の東側に近接するピットである。平面形は直径約0.2mの一部が張り出す円形で、深さは0.16mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む褐灰色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が1点出土している。

S3007 調査区の東半北寄り、S3005の西側に近接するピットである。平面形は長径0.5m、径0.3mの楕円形で、深さは0.14mを測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる褐灰色のシルト～極細粒砂である。

S3008 調査区の東半北寄り、S3005の南側に近接するピットである。平面形は長辺0.25m、短辺0.2m

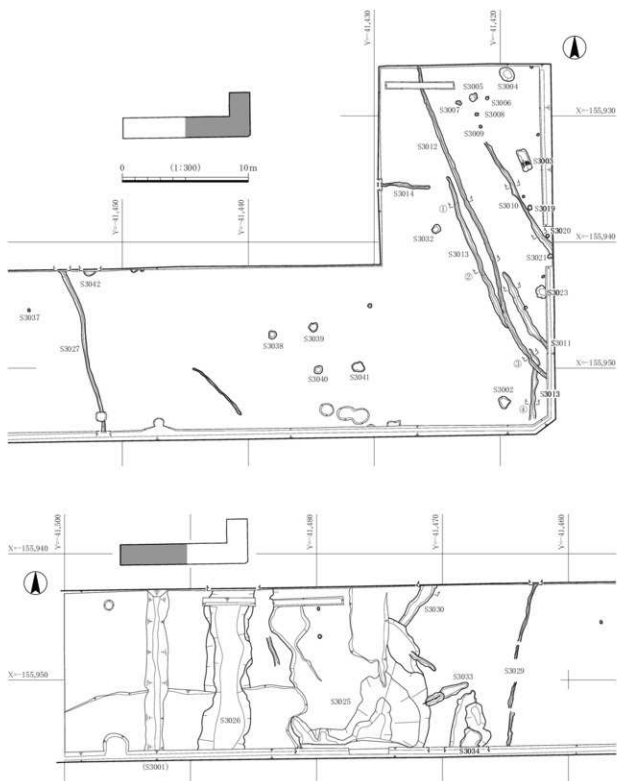


図 61 B c 区 7 a 層下面検出遺構全体平面

の隅丸長方形で、深さは 0.35 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が 1 点と、須恵器の甕片が 1 点出土している。

S3009 調査区の東半北寄り、S3008 の南側に近接するビットである。平面形は直径約 0.2 m の円形で、深さは 0.22 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が 2 点出土している。

S3010 調査区東端に位置する溝である。調査区東壁から北壁に向かって斜行する溝で、約31度西偏する。幅は、北端部では約0.25m、調査区東壁際では約0.5mを測る。深さは約0.05m～0.07mで、埋土は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が3点出土している。

S3011 調査区の東端、S3010の南側に並行する溝である。S3010同様に調査区東壁から北西方向に向かって斜行する溝で、約27度西偏する。幅は約0.6mであるが、調査区東壁際では0.3m程度となる。深さは約0.1mで、埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が1点出土している。

S3012 調査区の東端、S3010・S3011の西側に並行する溝である。S3010同様に調査区東壁から北壁に向かって斜行する溝で、約22度西偏するが、S3011の西側部分は緩やかに湾曲する。幅は約0.2～0.35mで、深さは0.1m強である。埋土は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂である。

S3013 調査区の東端、S3012の西側に並行する溝である。溝の南端部は、調査区南壁から北に向かってのびるが、S3012と交差した後は、上記S3010～S3012と同様に向きを変え、約22度西偏してS3012に並行する。幅は約0.3～0.5mを測る。深さは約0.05m前後で、埋土は粗粒砂～小礫を含む灰黄褐色のシルト～極細粒砂である。S3012と一部重複し、S3012に切られる。

なお、上記S3010～S3013のようにやや西偏する細い溝は、04-3調査11区でも4条確認されている。

S3014 調査区の東半、S3013の西側に位置する溝である。東西方向の溝で、調査区西壁から更に西へと伸びる。幅は約0.2mで、深さは0.07mを測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色のシルト～極細粒砂である。

S3019 調査区の東壁際、S3010に近接するピットである。平面形は長径0.4m、短径0.3mの楕円形で、

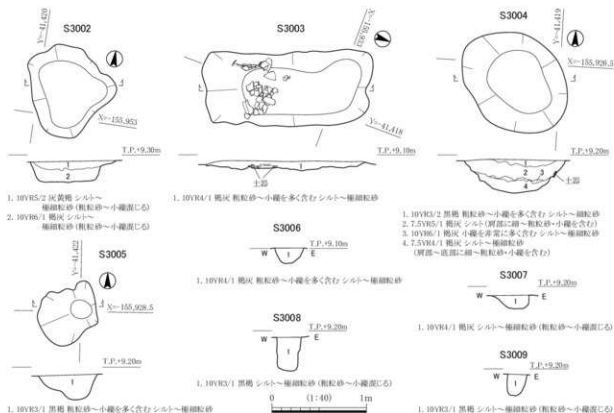


図 62 Bc区7a層下面検出遺構平面・断面1

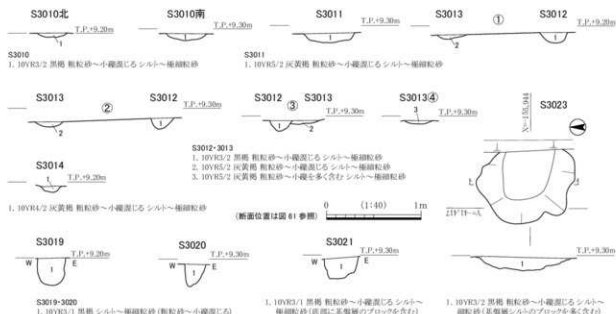


図 63 Bc区7a層下面検出遺構平面・断面2

深さは0.28 mを測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂である。

S3020 調査区の東壁際、S3010に近接するビットである。平面形は直径0.2 m強の円形で、深さは0.24 mを測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が3点出土している。

S3021 調査区の東壁際、S3010に接するビットである。平面形は直径約0.4 mの円形で、深さは0.22 mを測る。埋土は、底部に基盤層のブロックを含む粗粒砂～小礫混じりの黒褐色のシルト～極細粒砂である。

土師器小片が2点出土している。

S3023 調査区東壁際に位置する土坑である。遺構の東端部が調査区外であるが、平面形は凹凸がある不整形な隅丸長方形に復原できる。長辺は1.0 m、短辺は約0.8 mで、深さは0.14 mを測る。埋土は、基盤層のシルトブロックを多く含む粗粒砂～小礫混じりの黒褐色シルト～細粒砂である。

土師器小片が数点出土している。

S3025 調査区西半に位置する。幅の広い溝、あるいは落ち込みと呼ぶべき遺構である。幅は約10 mあり、調査区を横断する。ただし、深さは、北半では浅く0.2 m程度しかなく、溝とは言い難い。Y=-155.950 m付近から南側に向かって徐々に落ち込み、南壁際で約0.9 mの深さとなる。埋土は粗粒砂～小礫を含む黄灰色や暗灰黄色・灰色のシルト～極細粒砂などである。

土師器小片と須恵器（247・248）が出土している。247・248は6世紀後半の蓋杯。

S3026 調査区の西半、S3025の西側に隣接する溝である。04-3調査9区の7b ii層上面で検出した2258溝の延長部と思われる。調査区を横断する南北方向の溝で、幅は約3.5 mを測る。深さは約1 mで、埋土は粗粒砂～小礫が混じる黄灰色シルト、黄灰色シルト～極細粒砂、粗粒砂～小礫が混じる黒褐色のシルト～極細粒砂、植物遺体を含む灰色シルト～極細粒砂と中～粗粒砂・小礫の互層などである。

小型丸底壺（249）が出土しているが、おそらく混入品と思われる。4世紀末から5世紀前葉頃のもので、肩部がやや張る。内面はナデで、外面はハケ。

S3027 調査区中央に位置する溝である。S3010～3013と同様に約14度西偏する。幅は約0.5 mで、深さは北壁際では0.1 m、南壁際では0.2 mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を含む黄褐色や灰黄褐色のシル

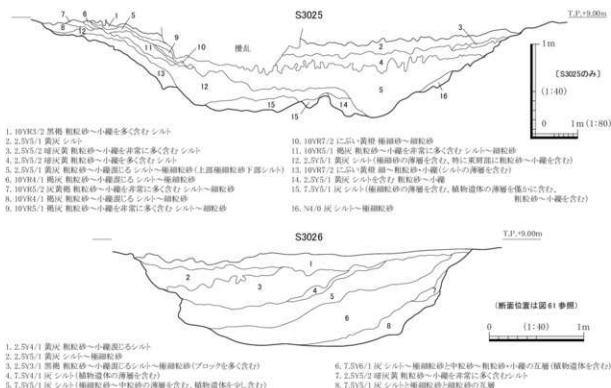


図 64 B c 区 3025・3026 断面

ト～極細粒砂である。

S3029 調査区中央に位置する溝である。南北方向の溝で、これまでに報告した溝とは異なり、約 10 度東偏する。幅は約 0.35 m で、深さは北壁際で 0.13 m を測る。途中で浅くなり、数箇所で見分断するが、調査区を横断する一連の溝である。埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色のシルトである。

S3030 調査区の西半、北壁際に位置する溝である。大きく東偏し、南側が S3025 につながる。幅は 0.7 ～ 1.1 m で、深さは 0.05 m 以下と非常に浅い。埋土は粗粒砂～小礫が混じる褐灰色シルトである。

S3032 調査区の東半、S3014 の南側に位置する土坑である。平面形は長辺 0.7 m、短辺 0.5 ～ 0.6 m の隅丸長方形で、深さは 0.05 m を測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色のシルト～極細粒砂である。

S3033 調査区の西半、S3025 の東側につながる溝状の土坑である。S3025 と一連の遺構であったかもしれない。楕円形の土坑が東西方向に二つ連なったような形状を呈する。西側の土坑の幅は約 0.7 m、東側の土坑の幅は 0.5 ～ 0.85 m で、総延長は 3.7 m を測る。深さは 0.13 m で、西側土坑の底には中軸線上に



図 65 B c 区 7 a 層下面検出遺構出土遺物

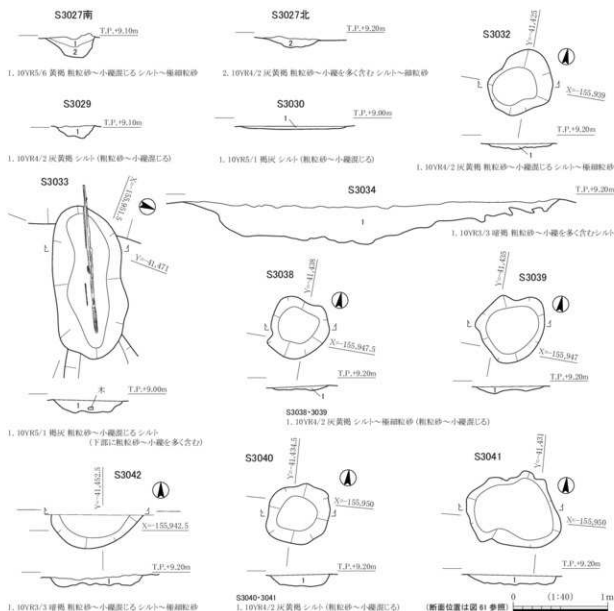


図 66 B c 区 7 a 層下面検出遺構平面・断面 3

細い加工材が設置されていた。材の断面形は一边約 3.5 cm の三角形で、長さは 1.55 m である。埋土は下部に粗粒砂～小礫が多く混じる褐灰色シルトである。

須恵器甕片が 1 点と土師器小片が出土している。

S3034 調査区北半の南壁際、S3033 の南側に近接する落ち込みである。南側が調査区外のため全体規模は不明。最大幅は東西 4.0 m、南北幅 5.0 m を測る。深さは 0.4 m で、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む暗褐色シルトである。

土師器小片が 1 点出土している。

S3038 調査区東半に位置する土坑である。平面形は凹凸がある不整形な隅丸方形、あるいは楕円形で、直径は約 0.6 ～ 0.7 m を測る。深さは 0.05 m で、埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色のシルト～極細粒砂である。

S3039 調査区の東半、S3038 の東側に位置する土坑である。平面形は凹凸がある不整形な隅丸方形、あるいは楕円形で、直径は約 0.65 ～ 0.75 m を測る。深さは 0.07 m で、埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄

褐色のシルト～極細粒砂である。S3038とは2.6 m隔てる。

S3040 調査区の東半、S3039の南側に位置する土坑である。平面形は凹凸がある不整形な隅丸方形で、直径は約0.6～0.65 mを測る。深さは0.15 mで、埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色シルトである。S3039とは2.7 m隔てる。

S3041 調査区の東半、S3040の東側に位置する土坑である。平面形は凹凸がある不整形な隅丸長方形で、長径は約0.9 m、短径は約0.8 mを測る。深さは0.1 mで、埋土は粗粒砂～小礫が混じる灰黄褐色シルトである。S3040とは2.35 m隔てる。

上記S3038～3041は、検出段階では掘立柱建物の柱穴ではないかと思われたが、周辺からはこれ以外の遺構は検出できなかった。一見整然と並んでいるものの、3基以上が並ぶ箇所はなく、掘立柱建物の柱穴とするには根拠に乏しいと言わざるを得ない。

S3042 調査区の中央、北壁際に位置する土坑である。平面形はおそらく円形や楕円形を呈すると推測できるが、遺構の北側が調査区外のため、全体規模は不明。残存最大径は0.97 mで、深さは0.1 mを測る。埋土は粗粒砂～小礫が混じる暗褐色のシルト～極細粒砂である。

第2項 7c層下面検出遺構

7b・7c層が残る東半部で、土坑や溝、ピットを検出した。

S3045 調査区東端の、北に折れ曲がった部分に位置する土坑である。平面形は一边4.0～4.5 mの隅丸方形を呈する。深さは平面規模の割に浅く、0.1 m程度しかない。埋土は粗粒砂～小礫が混じるにぶい黄褐色のシルト～極細粒砂である。

S3046 調査区南東隅に位置する溝である。東西方向の溝で、幅は約1.0～1.5 mで、西に向かって徐々に細くなる。深さは約0.05 mで、埋土は粗粒砂～小礫が混じる褐灰色のシルト～細粒砂や、粗粒砂～小礫を多く含む灰黄褐色のシルト～細粒砂である。

S3047 調査区東半に位置する溝である。南北方向の溝であるが、南のS3046までは達しない。下記S3049

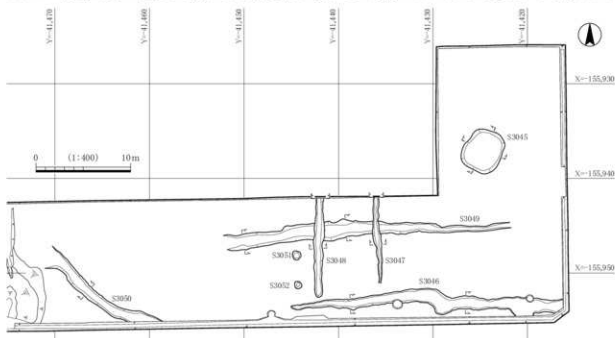


図 67 Bc区東半7c層下面検出遺構全体平面

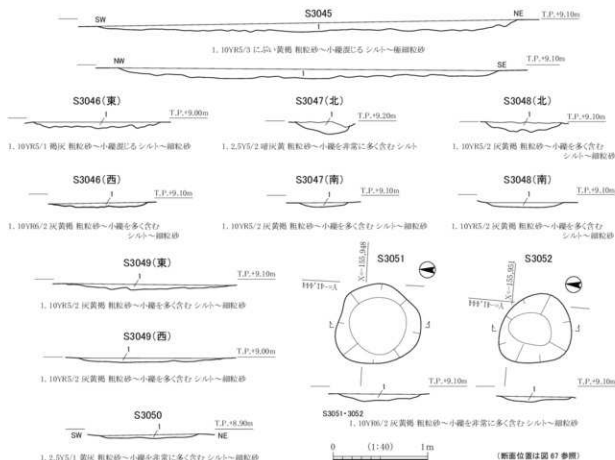


図 68 B c 区 7 c 層下面検出遺構平面・断面

とほぼ直角に交差し、S3049を切る。幅は約0.6～0.8mであるが、南に向かって徐々に細くなり、0.4m程度となる。深さは北壁際がもっとも深く、0.12mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を含む暗灰黄色や灰黄褐色のシルト～細粒砂である。

S3048 調査区東半に位置する溝である。S3047の西側に並行する南北方向の溝で、S3047とは約5.3～6.0m隔てる。S3047と同じく、南のS3046までは達しない。下記S3049とほぼ直角に交差し、S3049を切る。幅は0.7～0.9m程度で、深さは北壁際がもっとも深く、0.1mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を多く含む灰黄褐色のシルト～細粒砂である。

S3049 調査区の東半に位置する溝である。S3046の北側に並行する東西方向の溝で、S3046とは約6.5m隔てる。幅は約1.2～2.0mで、S3046とは逆に東に向かって徐々に細くなり、東端部では幅0.6m程度となる。深さは約0.05mで、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む灰黄褐色のシルト～細粒砂である。

サヌカイトの剥片が1点出土している。

S3050 調査区中央部に位置する溝である。この溝のみ国土座標軸にのらず、大きく西偏する。幅は約1.0～1.2mであるが、深さは非常に浅く0.03m程度しかない。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む黄灰色のシルト～細粒砂である。

S3051 調査区の東半、S3048の西側に隣接するピットである。平面形は直径0.8～0.9mの円形で、深さは0.07mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む灰黄褐色のシルト～細粒砂である。

S3052 調査区の東半、S3051の南側に隣接するピットである。平面形は直径約0.75mの円形で、深さは0.05mを測る。埋土は粗粒砂～小礫を非常に多く含む灰黄褐色のシルト～細粒砂である。

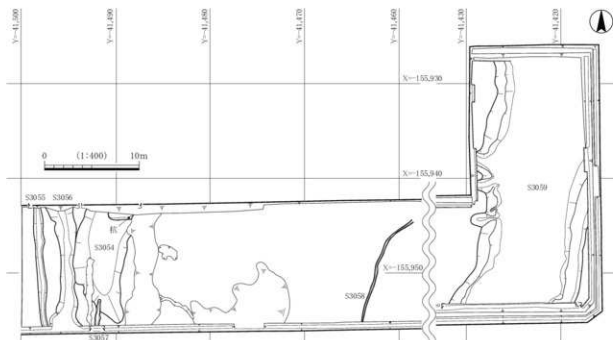


图 69 Bc 区 7d 層下面検出遺構全体平面

第3項 7 d層下面檢出遺構

西端部にまとまって溝を4条と、中央部で溝1条、東端部で下層流路の影響による溝状の窪みを検出した。

S3054 調査区西端に位置する溝である。南北方向にのびるが、南端は調査区南壁までは達しておらず、細く収まる。幅は約 5.5 m で、深さは調査区北壁際で約 0.6 ~ 0.65 m を測る。埋土は、底に黒褐色や褐灰色のシルトが薄くあり、それより上が粗粒砂～小礫を多く含む黄灰色のシルトである。調査区北壁際では、東側の溝裾部で 1 本の細い木杭を検出した。

高杯（250・251）などの土師器の小片と、サマカイトの割片が1点出土している。250・251は布留式期後半の無縁外反形の高杯。250は内外面ハケで、外面は放射状に施す。口縁部付近はハケ後にヨコナデ。接合部には竹筴状の細い棒状刺突痕が残る。251にはハケ目は認められない。

S3055 調査区の西端、S3054の西側に位置する溝である。南北方向の溝で、調査区を横断する。幅は約0.6～1.0 mで、深さは約0.3 mを測る。埋土は炭化物や粗粒砂～小礫が混じる黒色シルトや、粗粒砂～小礫を非常に多く含むオリブ黒色シルトである。

土師器小片が数点出土している。

S3056 調査区の西端、上記 S3054 と 3055 に挟まれた溝である。南北方向の溝で、東肩が S3054 の西肩と接する。幅は 1.4 m ほどの狭い箇所もあるが、平均は 2 m 前後で、北壁際では 2.5 m 以上に広がる。深さは調査区北壁際で約 0.75 m を測る。埋土はシルトブロックや粗粒砂～小礫、植物遺体や炭化物などを含む青灰色や暗青灰色のシルトなどである。

S3057 調査区の西端、S3054 の南側に位置する溝である。南北方向の溝で、S3054 の南端から南に向かってのびる。幅は約 0.45 ～ 0.5 m で、深さは約 0.2 m を測る。埋土は青灰色シルトである。

土師器小片が1点出土している。

S3058 調査区中央に位置する溝である。幅は0.2～0.25 m程度で、やや東偏する。深さは非常に浅く、僅かに掘り下げた程度で底に達した。

(S3059) 調査区東端に位置する大規模な流路の痕跡である。おそらく7e III層下面に伴うと考えられる流

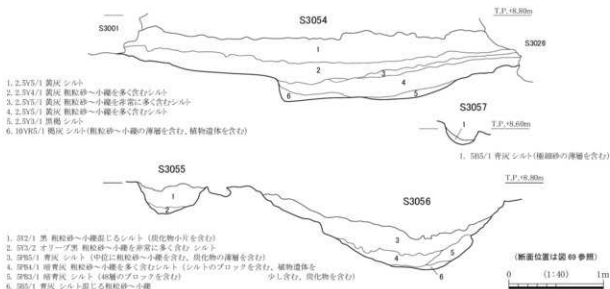


図 70 B c 区 S3054～S3057 断面

路が下層にあり、その流路の上部がこの7d層下面でも窪んでいたために、7d層が厚く堆積し、流路状にみえたものである。本来ならば、7d層のみを除去し、浅い窪みとすべきであったが、この面の調査段階で7d層以下の流路埋土まで掘削してしまった。このため平面的には確認できていないが、南壁の断面には、流路西寄りに規模を減じた溝状の窪みが1条あったことが認められた(図76・写真図版24-4)。S3059の最終段階の姿といえる窪みである。その幅は約2mで、深さは0.25m程度である。

第4項 7 e i 層下面検出遺構

溝を1条と、土坑を2基検出したのみで、遺構は稀薄である。

S3060 調査区の東半、S3059の西肩部に位置する溝である。幅は0.35～0.5m程度で、東端がY字状に分岐する。深さは0.1m以下で浅い。人為的なものではなく、S3059に向かって水が流れ込んだ際にで

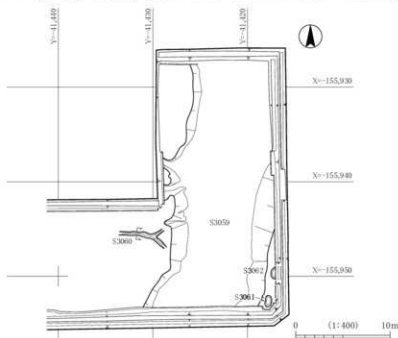


図 71 B c 区東端7 e i 層下面検出遺構平面



図 72 B c 区 S3060 ～ S3062 断面

きた流路のようなものと考えている。埋土は暗灰色のシルトである。

S3061 調査区の南東隅に位置する土坑である。平面形は長径 1.2 m、短径 0.7 m の楕円形で、深さは 0.17 m を測る。埋土は粗砂へ小礫・炭化物を含む暗灰色シルトや、粗砂へ小礫が混じる灰色のシルトへ極細砂である。

S3062 調査区南東隅、S3061 の北側に隣接する土坑である。遺構の東半が調査区外のため全体規模は不明。平面形は円形、ないしは楕円形で、南北幅約 1.6 m を測る。深さは約 0.15 m で、埋土は粗粒砂へ小礫混じる黄灰色のシルトへ極細砂である。

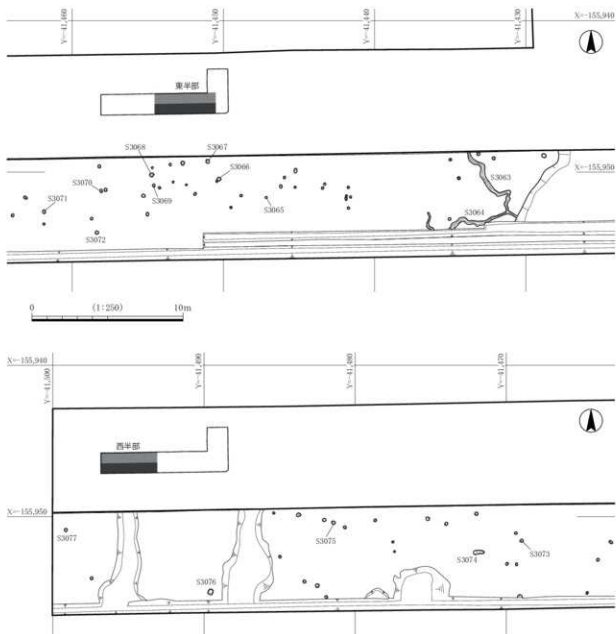


図 73 B c 区 7 e iii 層下面検出遺構全体平面

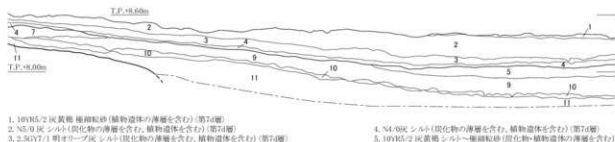


図 74 B c 区 S3059 断面 (東半)

第5項 7 e iii 層下面検出遺構

溝とピットを検出した。また、前述の S3059 もこの面に帰属する遺構である。

ピットは小規模なものが多数ある。それらのうちのいくつかは、輪郭も明瞭で、確実に人為的に掘られた遺構と判断できるものであったが、多くのピットは輪郭があまり鮮明ではなく、また、直径も 0.1 m 程度のものも含まれており、遺構とするには躊躇するようなものであった。平面を若干削り、凹レンズ状に窪ませた段階で消滅するものもあったが、多くはそれでも黒褐色の変色部が残っていたため、遺構として掘削したが、いずれも建物を構成する柱穴のような人為的なピットではなく、多くは単なる窪みのようなものであった。

記録をとった数基 (S3065 ~ 3077; 図 73) のピットのうちでも、残りの良い数基と溝のみ以下に報告する。

S3063・S3064 調査区の東半、S3059 の西肩部に位置する溝である。幅は 0.1 ~ 0.3 m 程度で、蛇行し、S3059 肩部で合流する。底には凹凸があり、深い箇所では 0.2 m 以上の深さがある。人為的なものではなく、S3059 に向かって水が流れ込んだ際にできた流路のようなものと考えられる。埋土は灰色のシルト→極細粒砂である。

S3068 調査区中央に位置するピットである。平面形は直径約 0.25 m のやや歪んだ円形で、深さは 0.1 m を測る。埋土は灰色のシルト→極細粒砂である。

S3074 調査区の西半に位置する土坑状に長いピットである。平面形は長径 0.73 m、短径 0.22 ~ 0.28 m の楕円形で、深さは 0.08 m を測る。埋土は S3068 と同じである。

S3076 調査区の西半、S3026 の西側に位置するピットである。平面形は一辺 0.3 ~ 0.35 m の隅丸方形で、深さは 0.1 m を測る。埋土は S3068 と同じである。

S3077 調査区の西端に位置するピットである。平面形は直径約 0.2 m の円形で、深さは 0.25 m を測る。埋土がほかのものとはまったく異なり、B b 区で検出した S2030・2031 によく似た、にぶい黄褐色のシルト偽礫を多く含む黒褐色シルトであった。おそらくこの 1 基のみ、S2030・2031 と同じく 7 e i 層上面 (B b 区では 7 層上面) から掘り込まれていたものであった可能性が高い。

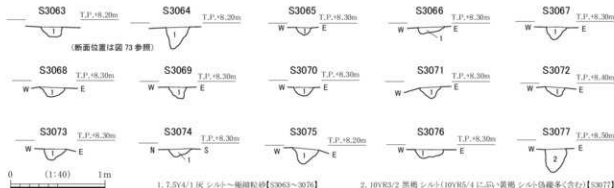


図 75 B c 区 7 e iii 層下面検出遺構断面

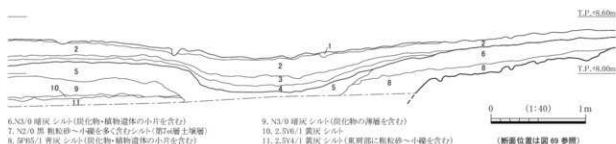


図 76 B c 区 S3059 断面 (西半)

7 e Ⅲ層下面検出の溝・ピットからは、遺物は出土していない。

S3059 調査区東端に位置する流路である。04-3 調査 10 区の弥生時代遺構面で検出した 2100 流路の延長部にあたる。この上面の窪みが 7 d 層下面まで幅広く残っていたため、すでに深くまで掘削してしまっていたが、本来はこの面に帰属する遺構と考えている。南北方向の流路で、流路西肩は調査区の南壁から北壁まで検出できたが、東肩は北半部が調査区外となり検出できていない。南半部での流路幅は約 11 ～ 13 m を測る。深さは調査設計深度である T.P.+7.8m まで掘削したが、底を確認することはできなかった。埋土は、炭化物や植物遺体を含む青灰色シルト、炭化物を含む暗灰シルト、粗粒砂〜小礫を含む黄灰色シルトなどである。以前の調査 (2100 流路) でも、粘土質の堆積で、水溜りのような状況であったことが報告されている¹⁾。T.P.+7.8m 以下は、足が埋まるほど非常にぬかるんでおり、まだまだ底が深いことがうかがえた。

弥生土器 (252 ～ 272) と石器 (273 ～ 276・278)、砥石 (277) が出土している。いずれも弥生時代中期前葉のものである。252・253 は甕。253 の外面はヘラケズリ。254 ～ 268 は壺。254 は櫛描直

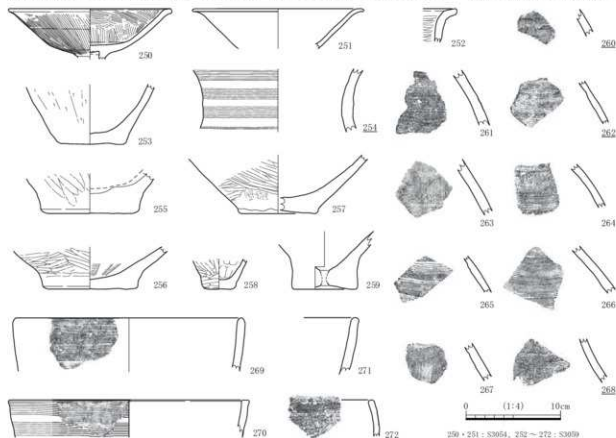


図 77 B c 区 S3054・S3059 出土遺物

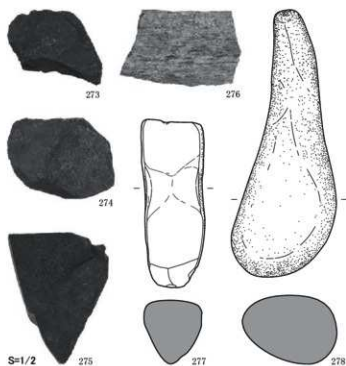


図 78 B c 区 S3059 出土石器

線文を施す広口壺の頸部片。255～258は外面をヘラミガキとするが、257にはそれに先行する縦方向の板ナデの痕跡が認められる。また258は底部外面にもヘラミガキが及ぶ。259は厚底で、底部中央に穿孔の痕跡が僅かに認められる。260～268はいずれも壺の肩部片で、櫛描文が施されている。260の櫛描文は直線文の間に直線文同士をつなぐように扇形文を配し、疑似流水文としたものである。261・262・265・266は直線文。264は直線文と波状文。263・267・268は横位の直線文とそれに直交する縦位の直線文を配し、文様間にヘラミガキを施す。これと同様の文様を施した破片が、以前の調査(2100 流路)でも出土している²⁾。269～272は鉢。269外面の文様は、櫛描直線文の途中に扇形文を入れ、疑似流水文としたものである。ただし、260のように扇形文を直線文と直線文の間に配するのではなく、直線文上に配している。これに酷似した鉢も、以前の調査で出土している。270・272は櫛描直線文。273～275はサヌカイトの剥片。276は板状の結晶片岩。厚さは約2～3mmと薄い。石器製作に用いたものか。277は砥石。278は磨石か。細い部分を握って用いたと考えられるが、下部先端には敲打痕がないことから、敲石ではなく、何かを磨り潰すための石器と考えられる。

〈現地調査担当：信田〉

註

1) 財団法人大阪府文化財センター 2009『三宅西遺跡』222p.

2) 同上



写真6 B c 区北東隅から北方のA区を望む

第6章 自然科学分析

第1節 分析の目的

三宅西遺跡内では、これまで数次にわたって発掘調査が実施されてきた。その中でも、平成16年(2004)から平成18年(2006)までの期間で実施した阪神高速道路大和川線の建設に伴う調査では、弥生時代中期前葉の集落のほか、中央部では大規模な流路を幾箇所も検出した。その流路からはローリングをほとんど受けておらず、炭化物が厚く付着する遺存状態の非常に良い縄文時代後期中葉の土器が発見され、近接してこの時期の集落の存在が推定されるなど、大きな成果をあげた。

今回の調査のうち、B区とした東西に長い調査区は、この阪神高速道路大和川線の北側に接しており、調査ではその中央付近(Bb区)から、以前の調査区から続く大規模な流路(S2022・S2023)や溝(S2038)が検出できた。このうち、流路(S2023)については、前回の成果から、おそらく縄文時代後期頃の流路と考えられたが、今回の調査では縄文土器片は1点出土したのみで、前回のような状態の良いものは出土しておらず、遺構の時期を特定することが難しい状況であった。このため流路の砂礫とともに流れてきた樹木や木葉について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施し、流路の形成・埋没時期を推定する手掛かりを得ることとした。

溝(S2038)については、上記流路の西肩部で検出した、流路と同時期、あるいはそれよりも古い時期と考えられる溝であるが、この溝からも遺物が出土しておらず、遺構の時期を特定できていない。S2023のような流木なども出土していないが、最下層にたまった土の中から炭粒が多く出土しており、これについて同様の年代測定を実施し、溝の形成・埋没時期を推定する手掛かりを得ることとした。

これらの成果は、遺構の時期の推定はもちろん、両遺構の関係、また既往の調査で検出された遺構とのつながりを検討するうえで有用で、当地域の地形や土地利用の変遷を復原するうえで重要なものである。

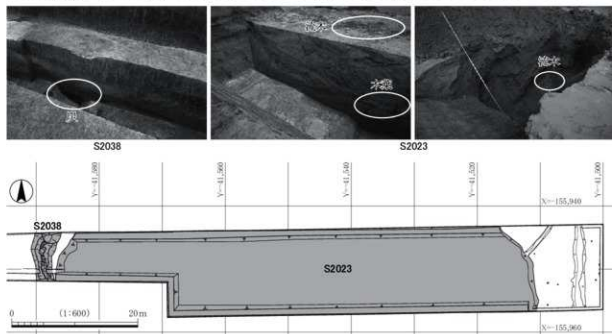


図79 年代測定する遺構と試料サンプリング位置

第2節 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料1～3は、三宅西遺跡のB b区で検出された流路（S2023）の下層（T.P.+4.8 m付近）で出土した流木、上層（T.P.+7.8 m付近）で出土した流木、同じく上層（T.P.+7.0 m付近）で出土した木本の葉である。試料4は、S2038 充填堆積物最下層から堆積物ごとに取り上げられた炭化植物遺体1点である。堆積物は葉理構造が確認される砂礫～泥質砂からなり、炭化植物遺体は葉層として挟んでいた。炭化植物遺体はいずれも小破片であり、複数の小破片を集めて試料とした。

2. 測定方法と算出方法

試料（木材・葉・炭化植物遺体）は超音波で洗浄した後、アセトンによる有機物除去処理を行ない、続いて酸（塩酸）・アルカリ（水酸化ナトリウム）・酸（塩酸）洗浄を実施した（AAA 処理）（表1）。

試料は調整後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を使用して測定した。

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた ^{14}C 濃度について、同位体分別効果の補正を行ない、放射性炭素（ ^{14}C ）年代、及び暦年代（較正年代）を算出した。（表2・3、図80・81）

表1 年代測定する遺構とその試料サンプリング位置

試料番号	測定番号 (PLD.)	出土遺構	試料	前処理・調整
1	53559	B b区 S2023 T.P.+7.8m 付近	木材 (クリ)	超音波洗浄、有機溶剤処理 (アセトン)・酸・アルカリ・ 酸洗浄 (塩酸・水酸化ナトリウム・塩酸)
2	53560	B b区 S2023 T.P.+4.8m 付近	木材 (コナラ属コナラ節)	
3	53561	B b区 S2023 T.P.+7.0m 付近	葉 (イチイガシ)	
4	54065	B b区 S2028 最下層	炭化植物遺体 (状態: dry) 墓理に挟在	

(1) δ (デルタ) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いている。統計誤差 (±) は1 σ (シグマ) (68.27%確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値も併記する。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動及び ^{14}C の半減期の違い (^{14}C の半減期5730 ± 40年) を較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。

^{14}C 年代の暦年較正には、OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果 (試料1~3)

試料番号	測定番号 (PLD-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲 (68.27% 確率)	2 σ 暦年代範囲 (95.45% 確率)
1	53559	-27.38 $\pm$ 0.19	2933 $\pm$ 21	2935 $\pm$ 20	1204-1140 cal BC (45.56%) 1134-1110 cal BC (16.84%) 1091-1085 cal BC (2.90%) 1064-1058 cal BC (2.97%)	1216-1050 cal BC (95.45%)
2	53560	-27.48 $\pm$ 0.17	7949 $\pm$ 28	7950 $\pm$ 30	7029-6966 cal BC (21.35%) 6946-6932 cal BC (4.28%) 6914-6881 cal BC (12.17%) 6834-6769 cal BC (22.95%) 6757-6752 cal BC (1.63%) 6720-6702 cal BC (5.89%)	7035-6958 cal BC (24.38%) 6955-6874 cal BC (23.55%) 6867-6737 cal BC (37.72%) 6733-6696 cal BC (9.80%)
3	53561	-30.03 $\pm$ 0.19	2953 $\pm$ 21	2955 $\pm$ 20	1212-1186 cal BC (22.20%) 1182-1153 cal BC (24.81%) 1149-1125 cal BC (21.26%)	1258-1244 cal BC (2.62%) 1230-1107 cal BC (86.84%) 1098-1078 cal BC (3.26%) 1071-1055 cal BC (2.72%)

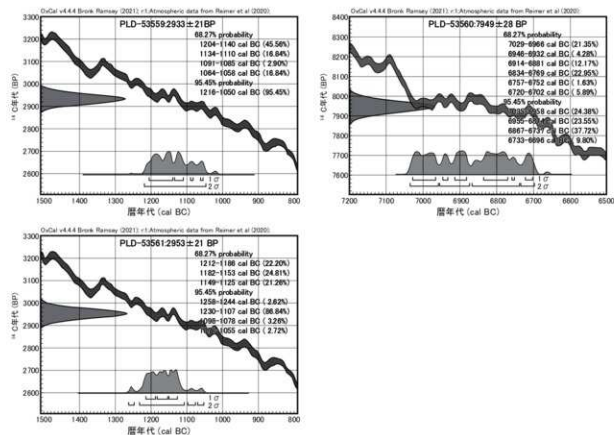


図 80 暦年較正結果 (試料1~3)

は OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1 σ $\times$ 2 σ 値が表記される場合もある。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表3 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果(試料4)

試料 番号	測定番号 (PLD)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲 (上段 cal BC 下段 cal BP)	
					1 σ 暦年代範囲 (68.27% 確率)	2 σ 暦年代範囲 (95.45% 確率)
4	54065	-25.42 $\pm$ 0.21	4384 $\pm$ 22	4385 $\pm$ 20	3021-3003 cal BC (13.81%)	3089-3056 cal BC (12.36%)
					2994-2926 cal BC (54.46%)	3032-2916 cal BC (83.09%)
					4970-4952 cal BP (13.81%)	5038-5005 cal BP (12.36%)
					4943-4875 cal BP (54.46%)	4981-4865 cal BP (83.09%)

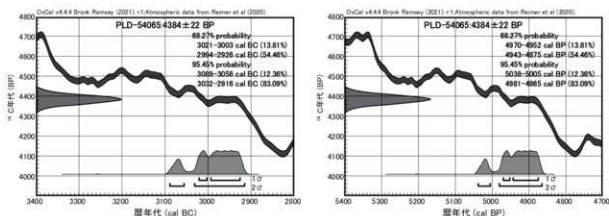


図81 暦年較正結果(試料4)

3. 結果と考察

(1) S2023 について(株式会社 古環境研究所)

S2023 の下層 (T.P.+4.8 m) より出土した流木(コナラ属コナラ節)は、補正 ^{14}C 年代が 7950 $\pm$ 30 年 BP、2 σ の暦年較正値は 7035-6958 calBC (24.38%)、6955-6874 calBC (23.55%)、6867-6737 calBC (37.72%)、6733-6696 calBC (9.80%) であった。上層 (T.P.+7.8 m) より出土した流木(クリ)は、補正 ^{14}C 年代が 2935 $\pm$ 20 年 BP、2 σ の暦年較正値は 1216-1050 calBC (95.45%) であった。同じく上層より出土した木本の葉(イチイガシ)は、補正 ^{14}C 年代が 2955 $\pm$ 20 年 BP、2 σ の暦年較正値は 1258-1244 calBC (2.62%)、1230-1107 calBC (86.84%)、1098-1078 calBC (3.26%)、1071-1055 calBC (2.72%) であった。これらの結果から、下層は縄文時代早期、上層は縄文時代晩期頃の堆積層と考えられる。

(2) S2038 について(株式会社 バレオ・ラボ)

S2038 最下層の炭化植物遺体 (PLD-54065) は、 ^{14}C 年代で 4385 $\pm$ 20 BP、暦年代で 5038-5005 cal BP (12.36%)、4981-4865 cal BP (83.09%) の暦年代を示した。

小林(2017)によると、近畿地方の縄文時代中期前葉の船元Ⅰ式で 4745 $\pm$ 40 BP、中期前葉～中葉の船元Ⅲ式で 4450 $\pm$ 25 BP、中期後葉の船元Ⅳ式で 4425 $\pm$ 30 BP、里木Ⅱ式期で 4350 $\pm$ 30 BP の ^{14}C 年代値が報告されている。また、本遺跡の周辺遺跡の年代測定結果をみると、北側に位置する瓜破遺跡 UR07-1 次調査地において、縄文時代中期前～中葉の船元Ⅲ式の土器が出土する、西谷底の流木(南区: No.1 (UR-1))で 4785 $\pm$ 25 BP の ^{14}C 年代値が得られている(渡辺, 2009)。また、瓜破遺跡 UR10-1 次調査地の中央区で検出された縄文時代中期の自然流路(NR103)より出土した種実(SP04 ④-4: エゴノキ)で 4060 $\pm$ 25 BP の ^{14}C 年代値が得られている(渡辺, 2013)。また、瓜破遺跡の北側に位置する瓜

破北遺跡 11-1-1 区の第 10-1a 層の植物遺体層で 4180 ± 25 BP の ^{14}C 年代値が得られている(株式会社バレオ・ラボ, 2013)

以上のことから、 4385 ± 20 BP の ^{14}C 年代を示している S2038 最下層の炭化植物遺体は、縄文時代中期後葉の年代値と判断できる。したがって、S2038 最下層の形成年代は、縄文時代中期後葉以降と推定される。ただし、最下層堆積物試料の層相から、水流によって運搬堆積した異地性の炭化植物遺体と判断されるため、堆積物中への取り込まれ方(タフオノミー)によっては、実際の堆積年代との間で多少の時間差が生じている可能性がある。例えば、炭化植物遺体が古い時代の堆積物から洗い出され再堆積したものとすると、最下層の形成年代は縄文時代中期後葉より新しい年代に形成されたことになる。この点は、S2038 の形成過程や堆積環境に基づいて、再評価する必要がある。

引用・参考文献

- ・Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- ・株式会社バレオ・ラボ (2013) 第 6 章 自然科学分析 第 2 節 放射性炭素年代測定, 『公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 238 集 瓜破北遺跡-大阪府営瓜破西(第 3 期) 住宅(建て替え) 建設工事に伴う発掘調査報告書』, 公益財団法人大阪府文化財センター, 100-102.
- ・小林謙一 (2017) 「縄文時代の実年代 —土器形式編年と炭素 14 年代—」, 同成社, 263p.
- ・中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編『日本先史時代の 14C 年代』: 3-20, 日本第四紀学会.
- ・Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon*, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- ・渡辺正巳 (2009) 第 III 章 自然科学分析 第 9 節 材の炭素 14 年代測定, 『大阪市平野区 瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ』, 財団法人大阪市文化財協会, 78
- ・渡辺正巳 (2013) 第 IV 章 自然科学分析 第 9 節 炭素 14 年代測定, 『大阪市平野区・東住吉区 瓜破・住道矢田・矢田遺跡発掘調査報告—本文—』, 公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所, 526-532.

第3節 年代測定試料の樹種同定と大型植物遺体同定

1. 試料

試料は前節で年代測定を実施した S2023 上層 (T.P.+7.8m 付近) から出土した流木 (試料 1)、下層 (T.P.+4.8m 付近) から出土した流木 (試料 2)、同じく上層 (T.P.+7.0m 付近) から出土した木本の葉 (試料 3) である。

2. 樹種同定

(1) 方法

剃刀を用いて、木片から横断面 (木口)、放射断面 (柃目)、接線断面 (板目) の 3 断面について切片を作製し、ガム・クロラール (抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入してプレバートとした。プレバートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定した。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982) や Wheeler 他 (1998) を参考にした。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にした。

(2) 結果

樹種同定結果を表 4 に示す。木材は、広葉樹 2 分類群 (コナラ属コナラ節、クリ) に同定された。各分類群の解剖学的特徴などを以下に記し、3 断面の顕微鏡写真を写真 7 に示す。

表 4 樹種同定結果

No	地区	遺構	層位	位置	内容	樹種
1	B b 区	S2023	上層部	T.P.+7.8m 付近	流木	クリ
2	B b 区	S2023	下層部	T.P.+4.8m 付近	流木	コナラ属コナラ節

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め (早材部) に大型の道管が 3 ~ 4 列配列した後、やや急激に道管径を減少させる。晩材部では小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1 ~ 20 細胞高。

・コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

環孔材。年輪の始め (早材部) に大型の道管が 1 ~ 2 列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では、小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1 ~ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

(3) 考察

流木と考えられる木材 2 点は、No 1 がクリ、No 2 がコナラ節に同定された。同時に実施した年代測定結果によれば、No 1 が 2935 ± 20 yBP、No 2 が 7950 ± 30 yBP の値が得られており、小林 (2017) を参考にすれば、No 1 が縄文時代晩期、No 2 が縄文時代早期と考えられる。

クリとコナラ節は、いずれも二次林などに生育する落葉高木である。年代測定結果を考慮すれば、縄文時代早期の流路周辺にはコナラ節、縄文時代晩期の流路周辺にはクリが生育していたことが推定される。なお、

Bb区 S2023 上層 (T.P.+7.0 m付近) から出土した種実や葉は、年代測定結果からNo.2と近い時期の植物遺体群と考えられる。これらには、イチイガシの果実や葉、アカガシ・ツクバネガシの葉、アラカシ?の葉、シラカシ?の葉、コナラ亜属の果実が認められ、周辺に常緑広葉樹のアカガシ亜属が生育していたことが推定される。クリは、その林縁部などに生育していた可能性がある。

近畿地方では観音寺本馬遺跡 (奈良県橿原市・御所市) において、縄文時代晩期の流路周辺から出土した根材を含む自然木の調査から、コナラ節、オニグルミ、ニレ属、カエデ属、ヤマグワなどの落葉広葉樹を主体として、アカガシ亜属、イヌガヤを伴う林分と、クリの純林といえる林分とが存在していたこと、クリ林については人為的な可能性があることが指摘されている (高橋, 2012)。今回の分析では1点のみであり、直接的な比較は難しいが、流路からクリの流木が確認された結果は当該期の周辺植生を考える上で興味深い結果である。

3. 大型植物遺体 (葉・種実) 同定

(1) 方法

試料を双眼実体顕微鏡で観察し、同定が可能な葉遺体や種実遺体をピンセットや面相筆で抽出する。葉遺体の同定は、現生標本や吉山・石川 (1992)、濱野 (2005)、田中 (2008)、林 (2017) などを参考に実施する。種実遺体の同定は、現生標本や中山ほか (2010)、鈴木ほか (2018) などを参考に実施する。結果は個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフオンで結んで表示する。分析後は、大型植物遺体を分類群毎に容器に入れ、約70%のエタノール溶液に浸して保管する。

(2) 結果

結果を表5に、各分類群の写真を写真8に示す。

Bb区 S2023 上層 (T.P.+7.0 m付近) より出土した大型植物遺体は、落葉広葉樹のコナラ亜属果実1個、

表5 大型植物遺体同定結果

分類群	部位		状態	Bb区 S2023 T.P.+7.0m 付近	備考
木本					
コナラ亜属	果実		破片	1	残存長 19.53, 残存幅 10.85mm
イチイガシ	果実		完形	1	
	葉	頂部	破片	6	
		基部	破片	5	
アカガシ・ツクバネガシ	葉	頂部	破片	13	
		基部	破片	5	
			破片	7	
			破片	5	
アラカシ?	葉		破片	1	
シラカシ?	葉		破片	2	
不明広葉樹 (コナラ属?)	葉		破片	2	
不明広葉樹	葉		破片	7	
草本					
ギンギン属	花被		完形	1	
タデ科	果実		完形	1	
合計					
木本葉				44	
不明葉				9	
木本種実				2	
草本種実				2	
合計 (不明を除く)				48	

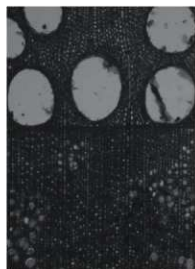
常緑広葉樹のイチイガシ果実 1 個、葉 24 個、アカガシ・ツクバネガシ葉 17 個、アラカシ? 葉 1 個、シラカシ? 葉 2 個、草本のギシギシ属花被 1 個、タデ科果実 1 個の、計 48 個が同定された。イチイガシ葉が最も多く、アカガシ・ツクバネガシ葉が次いで多い。その他、不明広葉樹（コナラ属?）葉 2 個、不明広葉樹葉 7 個が確認された。コナラ垂属の果実は破片の出土であるが、コナラやミズナラとは区別され、クスギ、アベマキ、カンワ、ナラガシワなどの大型の果実をもつ分類群のいずれかに由来すると考えられる。

（3）考察

三宅西遺跡の B b 区 S2023 上層（T.P.+7.0 m 付近）より出土した大型植物遺体は、広葉樹で落葉高木のコナラ垂属、常緑高木のイチイガシ、アカガシ・ツクバネガシ、アラカシ?、シラカシ? と、草本のギシギシ属、タデ科に同定され、イチイガシとアカガシ・ツクバネガシが多い組成を示した。これらは調査地近辺に生育していたと考えられる。特にイチイガシ、アカガシ・ツクバネガシ、アラカシ?、シラカシ? は、本地域に分布する暖温帯性常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成種である。多くの葉とともに果実が確認されたイチイガシは、コナラ属で唯一アーク抜きせずに果実内部の子葉が生食可能であることから、西南日本の遺跡出土例が多い（渡辺, 1975; 岡本, 1979 など）。

引用・参考文献

- ・濱野周泰, 2005, 原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木, 柏書房, 334p.
- ・林 哲之, 2017, くらべてわかる木の葉っぱ, 山と溪谷社, 159p.
- ・林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- ・伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- ・伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- ・伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- ・伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- ・伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- ・中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版), 東北大学出版会, 678p.
- ・岡本素治, 1979, 遺跡から出土するイチイガシ, 大阪市立自然史博物館研究報告, 32 号, 31-39, 図版 4-5.
- ・小林謙一 (2017) 「縄文時代の実年代 —土器形式編年と炭素 14 年代—, 同成社, 263p.
- ・島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- ・鈴木康夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる 734 種—増補改訂 一, ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.
- ・高橋 敦・田中義文・辻本裕也・辻 康男・松元美由紀・田中義文・馬場健司, 2012, 観音寺木馬遺跡の自然科学分析, 「観音寺木馬遺跡 —京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書— 本文編」, 橿原市埋蔵文化財調査報告第 1 冊, 奈良県橿原市教育委員会, 118-168.
- ・田中啓隆, 2008, 落葉樹の葉, 山溪ハンディ図鑑 12, 山と溪谷社, 447p.
- ・Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- ・渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食, 雄山閣出版, 187p.
- ・吉山 寛・石川美枝子, 1992, 原寸イラストによる落葉図鑑, 文一総合出版, 372p.



横断面
クリ No.1



放射断面



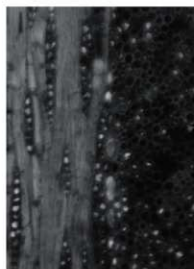
接線断面



横断面
コナラ属コナラ節 No.2



放射断面



接線断面

写真7 試料の断面切片顕微鏡写真



1. コナラ亜属 果実(東肩部下部)
3. イチイガシ 葉(東肩部下部)
5. イチイガシ 葉(東肩部下部)
7. イチイガシ 葉(東肩部下部)
9. アカガシツクバネガシ 葉(東肩部下部)
11. アカガシツクバネガシ 葉(東肩部下部)
13. アラカシ? 葉(東肩部下部)
15. 広葉樹(コナラ属?) 葉(東肩部下部)
17. 広葉樹 葉(東肩部下部)
19. キンギシ属 花被(東肩部下部)

2. イチイガシ 果実(東肩部下部)
4. イチイガシ 葉(東肩部下部)
6. イチイガシ 葉(東肩部下部)
8. アカガシツクバネガシ 葉(東肩部下部)
10. アカガシツクバネガシ 葉(東肩部下部)
12. アカガシツクバネガシ 葉(東肩部下部)
14. シラカシ? 葉(東肩部下部)
16. 広葉樹(コナラ属?) 葉(東肩部下部)
18. 広葉樹 葉(東肩部下部)
20. タデ科 果実(東肩部下部)

写真8 大型植物遺体

第7章 総 括

これまでに実施された周辺の調査では、大規模な流路や溝、弥生時代・古墳時代の集落など多くの遺構が検出されていた。今回の調査地は、それらを検出した調査区と隣接しており、いくつかの遺構でその延長部が確認できた。また集落の一部も検出され、周辺で確認されていた集落との関係や、その広がりなどが明らかとなった。以下、これまでの調査成果もあわせて考察し、まとめとする。

弥生時代中期前葉の集落 A区の第9面で、多くの土坑とともに竪穴建物2棟と掘立柱建物1棟を検出した。出土する遺物はいずれも弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）のものであり、これにより遺跡の北方にこの時期の集落が広がっていたことが明らかとなった。ただし、遺構が密集しているような状況ではなく、集落の中

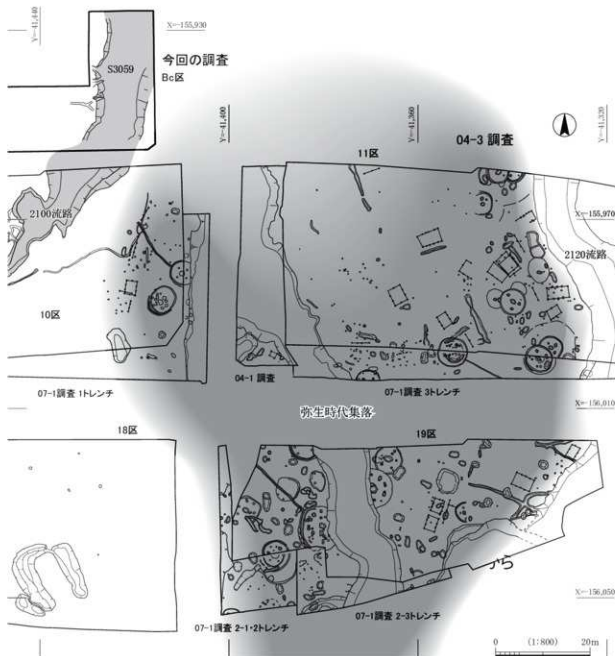


図 82 B c 区南東側にみられる弥生時代集落の広がり

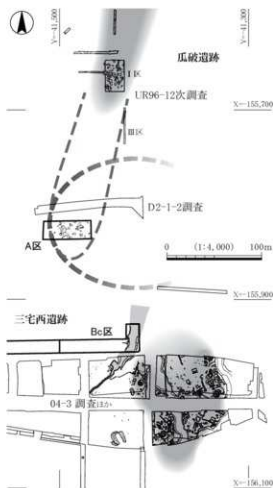


図 83 弥生時代集落の分布

では、もう一方の集落はどうか。

A区北側の集落は、三宅西遺跡範囲外の瓜破遺跡内に展開しており、財団法人大阪市文化財協会によるUR 94-19・96-12・97-19次調査で確認されたものである。そのうちもっとも密に遺構が検出された調査区は、A区から北に約170m隔てたUR 96-12次調査のI区である。ここでも弥生時代中期前葉に限られた短期的な集落が確認されており、竪穴建物や掘立柱建物のほか、溝や土坑・ピットなど、折り重なるように築かれた無数の遺構が検出されている。一見集落の中心部のような遺構密度であるが、それでも土器の出土量や周辺を含めた遺構の分布状況から、集落の中心ではなく、南西縁辺の一部ではないかとされており、中心は調査地より北側が想定されている。確かに、I区の南側に設定された南北に長いIII区では、遺構が稀薄であり、集落がさらに南に広がっている様子はうかがえない。

では、今回A区で確認された集落の一部は、これまでに周辺で確認されていた集落とはまったく別の集落だったのか。

Bc区南東側に中心をもつ集落との関係については、集落境を成すと考えられるS3059を挟んでいることから、上記のとおり、A区まで集落域が広がっていたとは考え難い。瓜破遺跡側に広がる集落との関係については、UR 96-12次調査I区より南側で遺構が稀薄となることは看過できないが、A区との間に集落境を成すような施設が検出されていないことなどから、現時点では、この瓜破遺跡側に広がる集落の南末端部である可能性の方が高いのではないかと考えている。ただし、南東側の集落と瓜破遺跡側の集落との間の、ちょうどA区の東側あたりに、それらとは異なる別の集落が展開していた可能性も想定しておきたい。

心部ではないような印象を受ける。おそらく、周辺に広がる集落の縁辺部にあたっていると思われる。

では、この集落の中心はどのあたりにあったのか。

これまでに実施された周辺の調査では、A区の南東側と北側の2箇所、今回みつかった集落と同時期の弥生時代中期前葉の集落が確認されており、そのどちらかの一部ではないかと考えられた。

南東側の集落は、阪神高速道路大和川線建設に伴い、当センターによって実施された04-3・07-1調査などで確認されたもので、今回調査したBc区のすぐ南東側、A区からは約200m隔てたあたりに広がっている。しかしこちらの集落は、南限については不確定などところがあるものの、遺構の分布状況から、東は2120流路、西は2100流路に至る自然の傾斜地までの範囲とほぼ判明しており、北側についても、04-3調査の10・11区よりも北へはほとんど遺構が展開していないことから、北限を遺構が稀薄となる10・11区の北側あたりとした、直径100m程度の集落範囲が推定されている。遺構の分布状況や、西限とされるS3059(04-3調査では2100流路)の位置などをみても、この南東側に広がる集落がA区まで続いているとは、やはり考え難いように思われる。

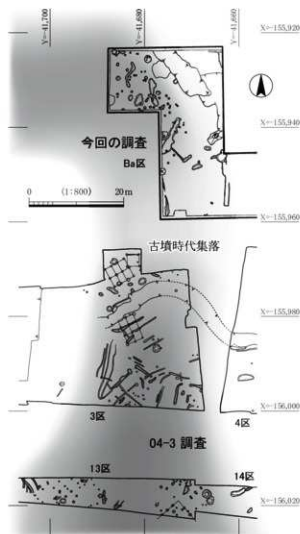


図 84 B a 区周辺にみられる古墳時代集落の広がり

古墳時代須恵器出現期前後の集落 B a 区では新たに古墳時代前期(庄内式期後葉から布留式期前葉)の集落を確認した。ただし、その分布範囲は B a 区西端部に偏っており、東半部には展開していない。検出した遺構も土坑やピットが主で、建物跡が未検出であることから、この集落の中心は、B a 区よりさらに西側にあったと推定できる。つまり B a 区の西端部が辛うじてその集落の東縁辺にかかっていたような状況と考えられる。検出した遺構からは須恵器がまったく出土しておらず、ほとんどが庄内式期後葉から布留式期前葉頃の土師器であること、また遺構を覆う 7 a 層をみても、上面から出土した土器の中に混入品と思われる須恵器製の体部片が 1 点含まれているのみで、ほか須恵器はまったく出土していないことから、この集落は、須恵器が出現する以前に営まれていた古墳時代前期の短期的な集落であったと判断できる。

これと同時期の集落は、これまでの調査では確認されていないが、このすぐ後に続く須恵器を伴う時期の集落が、今回みつかった集落のすぐ南側で確認されている。当センターが実施した 04-3 調査の 3・13・14 区で検出されたもので、掘立柱建物のほか、井戸や土坑、ピットなど多くの遺構が、北側の B a 区に向かって舌状に広がっている。両者は非常に近接しており、集落範囲の線引きが難しい。この南側に広がる集落の時期については、遺物包含層や遺構から出土した遺物のなかに初期須恵器が何点も含まれていることなどから、中心は須恵器が出現して間もない、古墳時代中期の 5 世紀前葉頃であったと考えられるが、遺構を

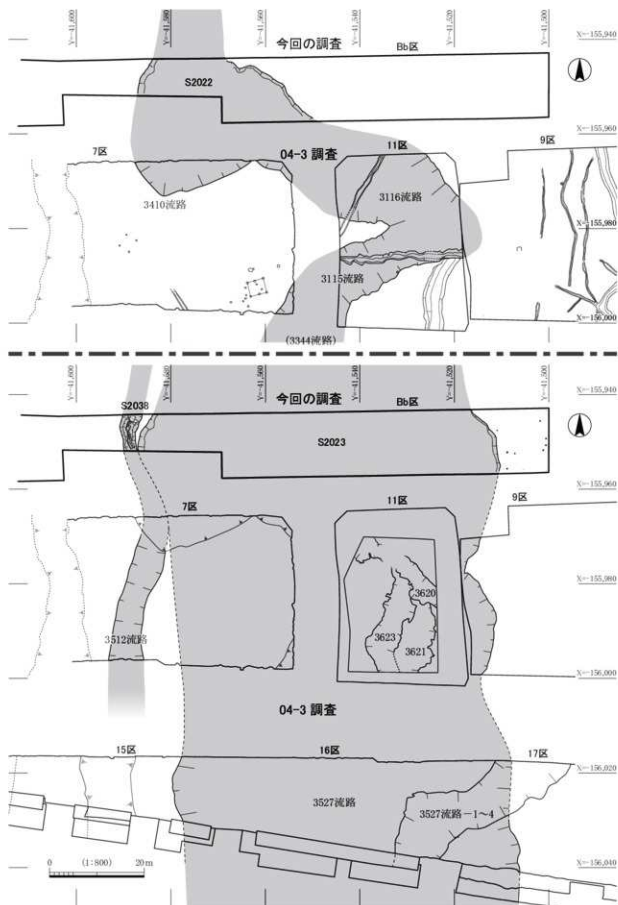


図 85 既往調査との遺構のつながり (上: S2022・下: S2023・S2038)

詳しくみると、庄内式甕など B a 区側の集落と同時期の遺物が出土する遺構もある程度存在しており、須恵器出現前の段階から、集落の一部として、すでに土地利用されていたことがうかがえる。

つまり、B a 区から西側に広がる集落と、04-3 調査で確認した集落とは、一見時期の異なる別々の集落のようにみえるが、実際には、両者には完全な分断があったわけではなく、集落が形成された当初の古墳時代前期には、南北に長い一つで集落であった可能性が高い。おそらく、① 古墳時代前期に B a 区の西側に集落が形成された。その中心は B a 区の西側あたりであったが、縁辺は 04-3 調査区内まで広がっていた。② 須恵器が出現して間もなくの頃、集落の中心を南の 04-3 調査区側へ移した。というものであったのではないだろうか。ただしこの時、B a 区側の集落内に須恵器がまったく含まれていないことは注意したい。集落の中心が南に移って以降も、B a 区側の集落範囲が土地利用されていたとした場合には、おそらく B a 区側の集落内にも須恵器が混入するはずであるが、実際にはまったく混入していない。つまり、B a 区側の範囲は、短期間で完全に放棄され、その後まったく使われなくなったと考えなければならない。

それ以降の集落については、現時点では前述の弥生時代中期前葉の集落が形成された B c 区の南東側一帯に移動したと考えているが、先の B a 区南側の集落についても、数は少ないものの、古墳時代後期の 6 世紀中葉の須恵器が含まれる遺構も確実に存在していることから、細々とではあるが、その頃まで集落が継続していたのではないかと考えている。

遺構の変遷 今回の調査では大規模な流路や溝を幾筋も検出した。それらとこれまでの調査で検出された遺構とのつながりやその変遷について簡単に整理しておく。

縄文時代には B a 区の流路 S1020 (04-3 調査では 3128 流路)、B b 区の流路 S2023 (04-3 調査では 3527 流路) や溝 S2038 (04-3 調査では 3512 流路か) が形成されていた①。それぞれが機能していた時期については、以前に出土した土器から、S1020 が縄文時代後期中葉、S2023 が晩期前半頃と推定されたが、今回実施した放射性炭素年代測定では、S2023 下層出土の流木が縄文時代早期のものであることが明らかとなり、S2023 の形成時期についてはさらに古く、縄文時代早期にまで遡る可能性が出てきた。これらの流路は、長い年月をかけて徐々に埋まっていくが、縄文時代晩期になっても埋まりきることはなく、あ

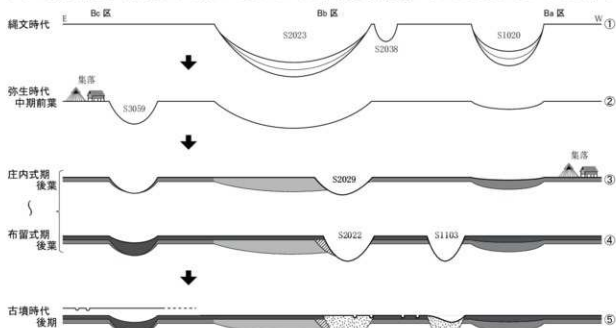


図 86 B 区の景観変遷

る程度の水流のある流路として残る。

弥生時代中期前葉になると、B c 区の東端に流路 S3059 (04-3 調査では 2100 流路) が形成され、それを境に東側には集落が営まれる②。おそらく S2023 は、さらに埋没が進んでいるものの、この頃も完全に埋まりきることはなく、浅い流路として存在していたものと思われる。

その後、S2023 上を除いて 8 層 (B c 区では 7 e ii・iii 層) が形成され、B a 区西側に古墳時代前期 (庄内式期後葉～布留式期前葉) の集落が営まれる③。S2023 の埋没時期については判然としなが、この B a 区の集落が営まれている時期には、ほぼ埋まっていたのではないかと考えている。S2023 が埋まりきった後、その西端部には一旦 S2022 の前身となる流路 S2029 が形成されるが④、間もなくこの S2029 上も含め、調査区全体を 7 層 (B a 区では 7 a 層、B c 区では 7 e i 層) が覆う。その時期は、B a 区の 7 a 層上面で検出できる流路 S1103 (04-3 調査では 3125 流路) に布留式期後半の須恵器出現期頃の土器が多く含まれていることから、それよりも古い時期、つまり B a 区西側の集落が営まれてからあまり時を経ない布留式期のうちに形成されたと考えられる。この時 B b 区には、先の S2029 に重なるように新たに流路 S2022 (04-3 調査では 3410・3116・3115・3344 流路) が形成されるが⑤、S2023 のように長くは機能せず、短期間で埋没する。その時期は、西側の S1103 (3125 流路) に僅かながら 6 世紀中葉の須恵器が含まれていることから、遅くともその頃までにはほとんど埋まっていたのではないかと考えている。

この S2022 が完全に埋まって以降すぐに、B b 区には S2006・2008 をはじめとした幾筋もの溝が設けられ、B c 区の東端にも同様の小規模な遺構が形成される⑥。S1103 については、B b 区第 7 面で検出した S2004 などの溝と一時期併存していた状況がうかがえることから、S2022 が埋まって以降も、しばらくの間流路として機能していたと思われる。

以上が、B 区を中心とした大まかな遺構の変遷であるが、庄内式期後葉から須恵器が出現する布留式期後葉のにかけて、三宅西遺跡内が大きく景観を変えていく状況がうかがえたいへん興味深い。その背景や経緯など、周辺地域の動向とも重ねながら解明していく必要があろう。

今回の調査成果を中心に、周辺の遺構とのつながりを確認するとともに、集落の範囲や景観変遷などについても若干考察した。ただし、これまでに実施した周辺調査の成果とは、出土遺物以外、層序の対応関係などについては十分な比較・検討ができておらず、遺構のつながりやその時期などにいくつかの誤認があるかもしれない。また今回の調査では、細い調査区内を幅の広い流路や溝が幾筋も横断していたため、地層が途中で分断され、その正確な対応関係の把握が困難な箇所もあった。本書内では、B a 区から B c 区までの地層を、確実な箇所を手掛かりに、理解しやすいようつなげているが、実際には本書でまとめたような単純に連続するものではなかった可能性も考えられる。出土遺物についても、層位的に考えられる時期と大きく隔てた古い時期のものばかりが出土している状況も多く、検討の余地を残している。

前年に実施した D 2-1-2 調査や、今後実施される調査の成果も合わせ、もう少し広い視野に立っての再検討が必要かもしれない。

引用・参考文献

- ・財団法人 大阪市文化財協会 1999 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 —1996 年度—』「第三章 瓜破遺跡の調査」
- ・財団法人 大阪市文化財協会 1999 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告 —1997 年度—』「第三章 瓜破遺跡の調査」
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2009 『三宅西遺跡』
- ・松原市教育委員会・公益財団法人 大阪府文化財センター 2024 『三宅西遺跡』

写真図版



人力掘削風景 (B b区 S2038)



1. 中央部第7c面検出遺構（北から）



2



4



3



5

2. S0001
3. S0002

4. S0004
5. S0005



1. S0014
2. S0015

3. S0020
4. S0021



5. 第8面検出遺構全景〔東から〕(ドローンより撮影)



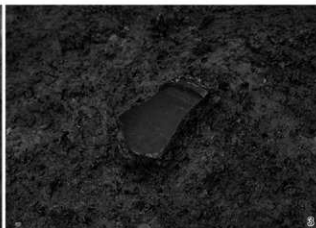
1. S0022〔北から〕



2. S0022 断面と埴輪出土状況〔南から〕



1. S0022 西斜部断面
2. S0022



3. S0022 埴輪出土状況
4. S0023



5. S0016・S0017
6. S0016



7. S0019
8. 第8面土器出土状況

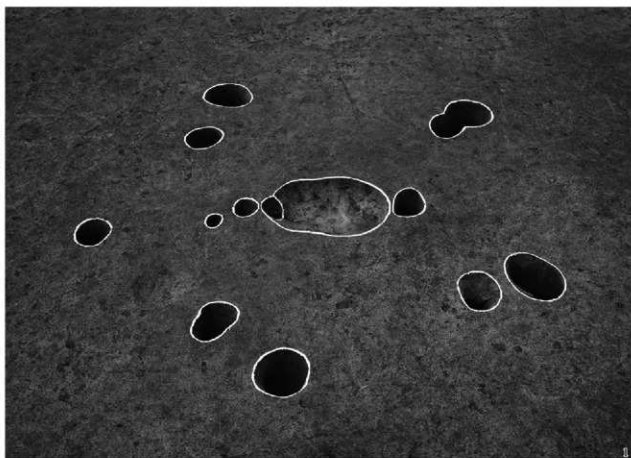




1. 第9面検出遺構全景〔東から〕



2. 第9面検出竪穴建物・掘立柱建物〔北東から〕



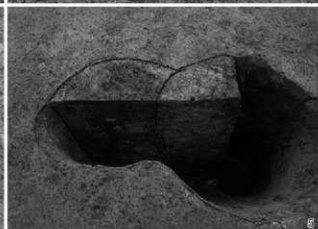
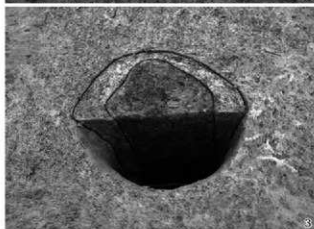
1. 竪穴建物 1〔南から〕



2. S0046
3. S0050



4. S0051
5. S0056 (右は S0058)





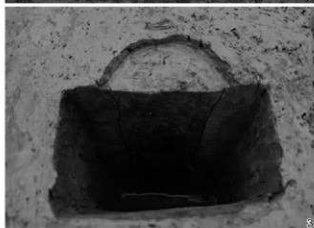
1. 竪穴建物2〔東から〕



2



4



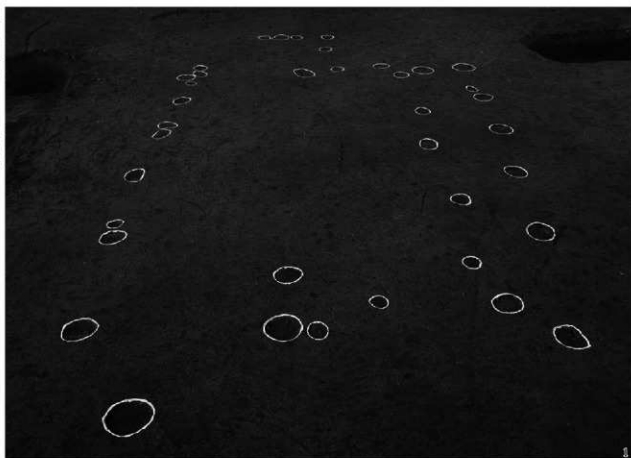
3



5

2. S0060
3. S0073

4. S0074
5. S0078



1. 掘立柱建物1 (南から)



2. S0089
3. S0091



4. S0095
5. S0101



1. S0025 (手前)・S0026 (奥)
2. S0028

3. S0027
4. S0027 土器出土状況



5. S0033 (右)・S0034 (左)
6. S0036

7. S0039
8. 下層確認トレンチ



1. 西端部第7 a 面検出遺構（東から）



2



4



3



5

2. 東半部第7 a 面検出遺構全景
3. S1001

4. S1103
5. S1103 西側部断面



1. 第8面検出遺構全景〔北西から〕



2. 西半部第8面検出遺構全景〔北東から〕



1. 東半部第8面検出遺構全景（手前は7a面検出S1103）〔東から〕



2. S1020 断面（東側）
3. S1020 断面（西側）



1. S1015
2. S1025

3. S1031
4. S1084 土器出土状況



5. S1091
6. S1092

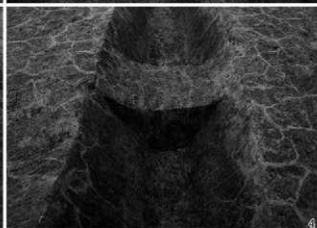
7. S1095
8. S1100



1. 西端部第7面検出遺構〔南東から〕



2. 西半部第7面検出遺構全景〔東から〕



1. S2003
2. S2004

3. S2005
4. S2006



5. S2010
6. S2012

7. S2013
8. S2014・S2015



1. 東端部第7面検出遺構 [南西から]



2. S2017
3. S2020



4. S2018 (南側)
5. S2018 (北側)



1. S2022 全景〔南西から〕



2



4



3



5

2. S2022 東肩部土器出土状況
3. S2022 西側部断面

4. S2029 検出状況
5. S2029 完掘状況



1. 第7～9面検出遺構全景（中央部はS2023、奥はS2022）〔東から〕



2. S2023 東側部〔南から〕



1. 東端部第9面検出遺構 [南東から]



2



4



3



5

2. 西端部第8面検出遺構
3. S2023 東斜部下層断面

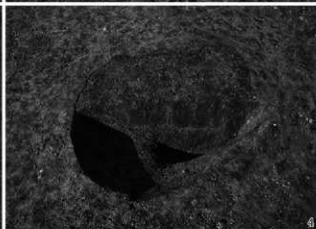
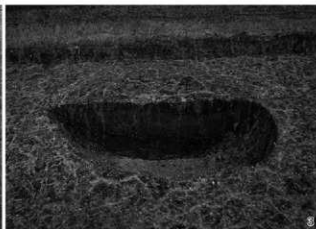
4. S2031
5. S2038



1. 7 a 層下面検出遺構全景〔北西から〕

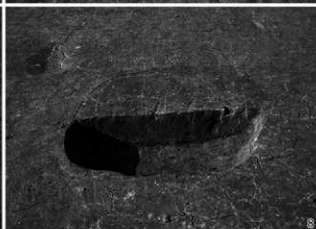


2. 東半部 7 a 層下面検出遺構全景〔北から〕



1. S3002
2. S3003

3. S3004
4. S3005



5. S3009
6. S3012

7. S3023
8. S3040



1. S3027

2. S3033 木材出土状況

3. S3038 ~ 3041

4. S3041



5. 7c層下面検出遺構全景〔北東から〕



1. S3045
2. S3046

3. S3048
4. S3049



5. 7 d 層下面検出遺構全景〔北西から〕



1. 東半部7d層下面検出遺構 (S3059) 全景〔北から〕



2. S3055 (左)・S3056 (右)

3. S3058

4. S3059



1



3



2



4

1. S3061・S3062
2. S3061

3. 東半部7 e i 層下面検出遺構
4. S3064



5



6



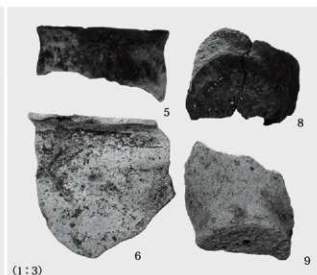
7

5. 7 e Ⅲ層下面検出遺構全景〔東から〕

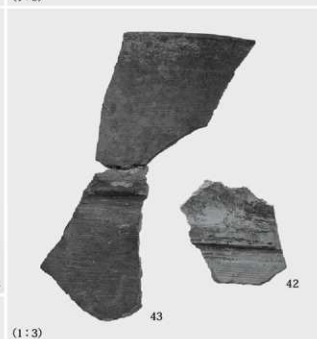
6. S3068
7. S3077



1 (1:3)



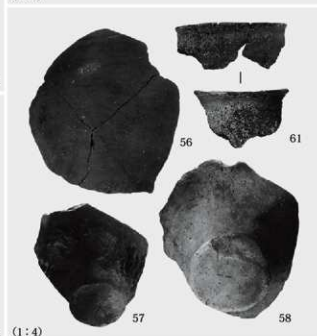
38



(1:3)



41



64 (1:4)



62



69



60



67



65

(1:4)



2



105



186

(2:3)



19



14



15



20



21

(1:3)



66



148



107



108



115

(1:3)



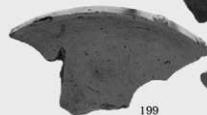
190



196



198



199



209

(1:3)



194



206



221



211



200



201

(1:3)



203



216



222



214



226



223



224



230



225



234

(1:3)



238



236



244

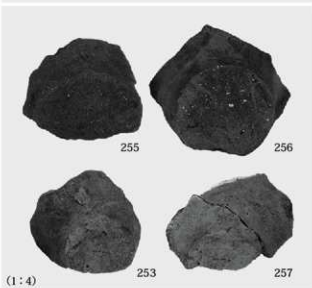
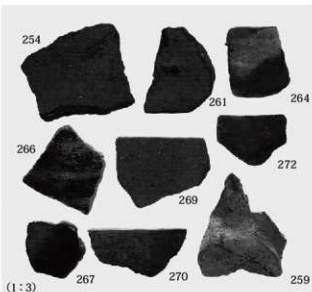
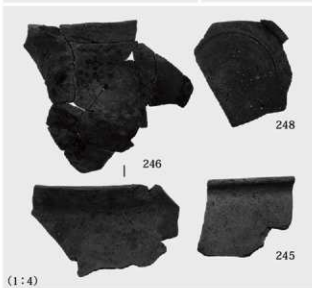
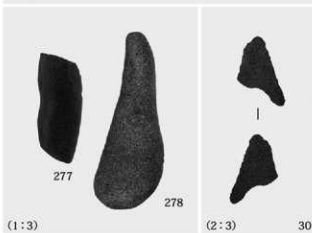
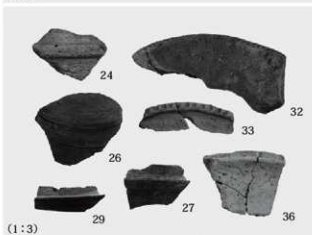


232



231

(1:4)



松原市文化財報告 第20冊
公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第340集

三宅西遺跡2

松原市三宅西土地区画整理事業地内物流倉庫建設計画に伴う
三宅西遺跡（D2-1-4）発掘調査報告書

発行年月日 / 2025年5月30日
編集 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
発行 / 松原市教育委員会
大阪府松原市阿保1丁目1番1号
公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地

本書の著作権は、例言に記したとおり、一部を除き松原市教育委員会に帰属しますが、「クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)」に基づき、出典の表示を条件として自由な二次利用を許諾します。 

また、数値的なデータや簡単な表・グラフ・拓本などについては、著作権が発生しないため自由な二次利用が可能です。

なお、第三者が著作権を有する図1～4の背景地図、写真1の背景写真などについては、自由な二次利用の対象外です。二次利用する場合は、条件などを事前に確認してください。